小野地区水田址遺跡社宮司地点
谷地Ｄ遺跡

―― 市道2481号線道路改良拡幅工事に伴う発掘調査報告書 ――

２００４

群馬県藤岡市教育委員会

序

藤岡市は群馬県の南西部に位置し、神流川を境として埼玉県と接しています。近年は関越自動車道や上信越自動車道の開通により、地域交通の起点として重要な役割を果たしています。

また、藤岡市には、国指定史跡の七輿山古墳・白石稲荷山古墳・本郷埴輪窯址をはじめとする数多くの文化財があり、県指定史跡平井地区１号古墳から出土した金銅装単鳳環頭大刀・銀象嵌円頭大刀、埴輪・須恵器類は一括して国の重要文化財に指定されています。

今回調査を行った谷地遺跡は、藤岡市北部の小野地区にあり、縄文時代後晩期の遺跡として藤岡市を代表するものとなっています。今回調査したＤ地点は谷地遺跡の北東側にあたると考えられ、遺跡の主要な範囲は東西約300m、南北約200mに及ぶものと推定されます。未だにその全体像は明らかではありませんが、住居跡、埋設土器群や配石遺構をはじめとする遺構群や貴重な様々な形の土器や石器をまだ多く包蔵しており、縄文時代の生活文化を知る上で重要であり、学術的に大変注目される遺跡であります。今回の調査の成果が広く活用され、郷土の歴史に対する理解に役立てていただければ幸いと存じます。

最後に、今回の発掘調査にご協力いただいた皆さま、並びに関係諸機関に感謝を申し上げます。

平成16年３月

藤岡市教育委員会

教育長　岡田　要

例　言

1　本書は市道2481号線改良拡幅工事に伴う小野地区水田址遺跡社宮司地点・谷地D遺跡の発掘調査報告書である。

2　本事業による遺跡調査略称は「C45」である。「C」は藤岡市小野地区、「45」は当該地区の45番目の発掘調査事業をそれぞれ表している。遺物注記等はこの遺跡略号「C45」で記載されている。

3　本遺跡は群馬県藤岡市中栗須字社宮司903番地ほかに所在する。

4　発掘調査は、藤岡市教育委員会が実施した。調査面積は約2,800㎡である。

5　調査期間　　平成13年９月12日～平成14年２月７日
　遺物整理期間　平成14年４月14日～平成16年３月31日

6　調査組織

教　育　長	岡田　要
教 育 部 長	齋藤　稔一
文化財保護課長	前川　善昭
埋蔵文化財係長	古郡　正志
庶　務　担　当	岩田由紀江
試掘調査・事務担当	軽部　達也・伊藤　実
本調査・整理担当	田野倉武男

7　整理作業・報告書作成
　遺物整理は田野倉が担当し、本書の作成は寺内敏郎・田野倉が行い、原稿の執筆・編集は田野倉・軽部が行った。また、遺物実測・各種挿図・写真図版の作成などは、担当指導により井上美恵子、臼田田鶴子、岸さく子、小島真弓、中山美奈子、西崎真奈美、平井律江、堀越和子が行った。

8　調査によって得られた出土遺物・記録は藤岡市教育委員会が保管している。

9　調査協力機関
　群馬県教育委員会、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

10　発掘調査・遺物整理参加者(敬称略)
　浅見悦子　新井孝子　新井敏治　安藤いそ子　飯島敏夫　飯塚美芳　井上美恵子　猪野峯次　今井与一
　岩佐みさ江　臼田わか　及川松義　大久保芳雄　岡本重昭　小野里義隆　折茂玉枝　金澤治郎　岸さく子
　黒沢佐忠　小島真弓　小谷野安布　斉藤しげ　佐伯春雄　坂居治徳　塩谷妙子　篠崎　博　清水　栄
　清水シマ　杉山松吉　高橋直樹　高見沢老昭　竹市六郎　立石文雄　田中良一　田沼典子　塚越和子
　角田幹一　富岡梅子　中野　弘　中山美奈子　中村すみ　縫島甫枝　秦野公　秦野ルイ子　馬場芳雄
　早川みつ子　針谷武男　針谷満佐代　樋口君江　平井律江　堀越ちゑ子　堀越ひろ子　堀越裕子　松井道男
　松本君代　水沼　巴　牟田義一　安田菊枝　山名澄子　吉島信治

凡　例

1．遺構名には縄文時代住居跡＝「JH」、縄文時代土坑＝「JD」、ピット＝「P」、溝＝「M」などの略称を付し、「縄文時代ｎ号竪穴住居跡」を「JH-n」と呼称した。
2．遺物注記には遺跡略称（C45）、出土調査区名、遺構略称と取り上げ番号を記した。
3．挿図・遺物観察表に付した遺物番号は出土調査区名、遺構出土の場合は遺構略称と取り上げ番号を示し、覆土中より出土した遺物は「F」を付し便宜上の番号を付した。
4．遺構計測表ならびに遺物観察表の（　）は推定復元値を示した。
5．遺構挿図中に使用した方位は、座標北を示し、断面基準線は標高値で表した。
6．土層断面図の「S」＝石、「K」＝撹乱層を示す。

報告書抄録

ふりがな	おのちくすいでんしいせきしゃぐうしちてん・やちでーいせき
書名	小野地区水田址遺跡社宮司地点・谷地D遺跡
副書名	市道2481号線道路改良拡幅工事に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
編著者名	田野倉武男・軽部達也
編集機関	藤岡市教育委員会
所在地	〒375-8601　群馬県藤岡市中栗須327番地
発行年月日	西暦2004年３月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
おのちくすいでんしいせきしゃぐうしちてん 小野地区水田址 いせきしゃぐうしちてん 遺跡社宮司地点	ぐんまけんふじおかし 群馬県藤岡 しなかりすおざ 市中栗須字 しゃぐうじ 社宮司903～ 914	10209		36° 268′ 177″	139° 08′ 251″	20010914 ～ 20020207	2800m²	市道新設 改良拡幅 工事
やちでーいせき 谷地D遺跡								

ふりがな 所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
おのちくすいでんしいせきしゃぐうしちてん 小野地区水田址 いせきしゃぐうしちてん 遺跡社宮司地点	水田址	平安時代 古墳時代	溝状遺構 畝状耕作痕 溝状遺構	20条 1ヶ所 3条		
やちでーいせき 谷地D遺跡	集落 旧河川跡	縄文時代	住居 配石遺構 土坑・ピット多数	3軒 2基 70基	縄文時代後期～晩期前半の土器・石器・土製品	獣骨片

目　次

序
例　言
凡　例
報告書抄録

第Ⅰ章　調査に至る経過 …… 1

第Ⅱ章　調査の方法と経過 …… 1
　第１節　調査の方法 …… 1
　第２節　発掘調査の経過 …… 3
　第３節　整理作業の経過 …… 3

第Ⅲ章　遺跡の歴史的環境 …… 4

第Ⅳ章　基本層序 …… 7

第Ⅴ章　検出された遺構 …… 8
　第１節　小野地区水田址遺跡社宮司地点 …… 9
　　１）古墳時代溝状遺構 …… 10
　　２）平安時代以降溝状遺構 …… 10
　　３）畝状遺構 …… 21
　　４）水田遺構 …… 21
　　５）遺構外出土遺物 …… 21
　第２節　谷地Ｄ遺跡 …… 22
　　１）住居址・配石遺構・集石遺構 …… 22
　　２）土坑・ピット …… 36
　　３）遺構外出土遺物の分布 …… 53
　　４）遺構外出土遺物 …… 59

第Ⅵ章　自然科学分析 …… 123

写真図版

挿図目次

第 1 図　グリッド設定図・調査区設定図…… 2
第 2 図　周辺遺跡分布図…… 5
第 3 図　基本層序図…… 7
第 4 図　遺構全体図…… 8
第 5 図　M-22A・B・23・24・26号溝状遺構(1) …… 11
第 6 図　M-1・2・3A・B・4・5号溝状遺構(2)…… 12
第 7 図　M-6・8・21A・B・28号溝状遺構(3) …… 14
第 8 図　M-8・9・10・12・13号溝状遺構(4) …… 15
第 9 図　M-14号溝状遺構・畝状遺構(5) …… 16
第 10 図　M-11・15号溝状遺構(6) …… 17
第 11 図　M-7・16・17号溝状遺構(7) …… 18
第 12 図　M-18～20号溝状遺構(8) …… 19
第 13 図　M-20号溝状遺構・水田址(9) …… 20
第 14 図　遺構外出土遺物…… 21
第 15 図　JH-1 号住居址…… 23
第 16 図　JH-1 号住居址出土遺物(1)…… 24
第 17 図　JH-1 号住居址出土遺物(2)…… 25
第 18 図　JH-2 号住居址…… 26
第 19 図　JH-2 号住居址遺物分布図…… 27
第 20 図　JH-2 号住居址出土遺物…… 28
第 21 図　JH-2・3 号住居址出土遺物(1)…… 29
第 22 図　JH-3 号住居址…… 30
第 23 図　JH-2・3 号住居址出土遺物(2)…… 31
第 24 図　1 号配石遺構…… 32
第 25 図　2 号配石遺構…… 33
第 26 図　2 号配石遺構出土遺物…… 33
第 27 図　1・2 号配石遺構出土遺物…… 34
第 28 図　1・3 号集石遺構…… 35
第 29 図　1 号集石遺構出土遺物…… 36
第 30 図　土坑(1)…… 37
第 31 図　土坑(2)…… 38
第 32 図　土坑(3)…… 39
第 33 図　土坑(4)…… 40
第 34 図　土坑(5)…… 41
第 35 図　土坑(6)…… 42
第 36 図　土坑出土遺物(1)…… 43
第 37 図　土坑出土遺物(2)…… 45
第 38 図　土坑出土遺物(3)…… 46
第 39 図　土坑出土遺物(4)…… 47
第 40 図　土坑出土遺物(5)…… 48
第 41 図　土坑出土遺物(6)…… 49
第 42 図　土坑出土遺物(7)…… 50
第 43 図　土坑・ピット(7)…… 52
第 44 図　遺構外遺物出土分布図…… 54
第 45 図　遺構外遺物分布図(1)…… 55
第 46 図　遺構外遺物分布図(2)…… 56
第 47 図　遺構外遺物分布図(3)…… 57
第 48 図　遺構外遺物分布図(4)…… 58
第 49 図　遺構外出土土器(1)…… 60
第 50 図　遺構外出土土器(2)…… 61
第 51 図　遺構外出土土器(3)…… 62
第 52 図　遺構外出土土器(4)…… 64
第 53 図　遺構外出土土器(5)…… 66
第 54 図　遺構外出土土器(6)…… 68
第 55 図　遺構外出土土器(7)…… 69
第 56 図　遺構外出土土器(8)…… 70
第 57 図　遺構外出土土器(9)…… 72
第 58 図　遺構外出土土器(10…… 73
第 59 図　遺構外出土土器(11…… 74
第 60 図　遺構外出土土器拓影図(1)…… 76
第 61 図　遺構外出土土器拓影図(2)…… 77
第 62 図　遺構外出土土器拓影図(3)…… 78
第 63 図　遺構外出土土器拓影図(4)…… 79
第 64 図　遺構外出土土器拓影図(5)…… 80
第 65 図　遺構外出土土器拓影図(6)…… 81
第 66 図　遺構外出土土器拓影図(7)…… 82
第 67 図　遺構外出土土器拓影図(8)…… 83
第 68 図　遺構外出土土器拓影図(9)…… 84
第 69 図　遺構外出土土器拓影図(10…… 85
第 70 図　遺構外出土土器拓影図(11…… 86
第 71 図　遺構外出土土器拓影図(12…… 87
第 72 図　遺構外出土土器拓影図(13…… 88
第 73 図　遺構外出土土器拓影図(14…… 89
第 74 図　遺構外出土土器拓影図(15…… 90

第 75 図　遺構外出土土器拓影図(16)…… 91
第 76 図　遺構外出土土器拓影図(17)…… 92
第 77 図　遺構外出土土器拓影図(18)…… 93
第 78 図　遺構外出土土器拓影図(19)…… 94
第 79 図　遺構外出土土器拓影図(20)…… 95
第 80 図　遺構外出土土器(12)…… 96
第 81 図　遺構外出土土器(13)…… 97
第 82 図　遺構外出土石器(1)…… 98
第 83 図　遺構外出土石器(2)…… 99
第 84 図　遺構外出土石器(3)……100
第 85 図　遺構外出土石器(4)……101
第 86 図　遺構外出土石器(5)……102
第 87 図　遺構外出土石器(6)……103
第 88 図　遺構外出土石器(7)……104
第 89 図　遺構外出土石器(8)……105
第 90 図　遺構外出土石器(9)……106
第 91 図　遺構外出土石器(10)……107
第 92 図　遺構外出土石器(11)……108
第 93 図　遺構外出土石器(12)……109
第 94 図　遺構外出土石器(13)……110
第 95 図　遺構外出土石器(14)……111
第 96 図　遺構外出土石器(15)……112
第 97 図　遺構外出土石器(16)……113
第 98 図　遺構外出土石器(17)……114
第 99 図　遺構外出土石器(18)……115
第100図　遺構外出土石器(19)……116
第101図　遺構外出土石器(20)……117
第102図　遺構外出土石器(21)……118
第103図　遺構外出土石器(22)……119
第104図　遺構外出土石器(23)……120
第105図　遺構外出土石器(24)……121
第106図　遺構外出土石器(25)……122

表目次

第 1 表　発掘調査の経過 …… 3
第 2 表　整理作業の経過 …… 3
第 3 表　周辺遺跡一覧表 …… 6
第 4 表　溝状遺構一覧表 …… 9
第 5 表　小野地区水田址遺跡遺構外遺物観察表 …… 21
第 6 表　JH－1 号住居址出土土器観察表 …… 22
第 7 表　JH－1 号住居址出土石器観察表 …… 23
第 8 表　JH－2 号住居址出土土器観察表 …… 28
第 9 表　H－2 ・ 3 号住居址出土石器観察表…… 31
第10表　1 ・ 2 号配石遺構出土石器観察表 …… 33
第11表　1 号集石遺構出土土器観察表 …… 36
第12表　土坑計測表(1) …… 36
第13表　土坑計測表(2)……44
第14表　土坑出土土器観察表 …… 44
第15表　土坑出土土製品観察表 …… 48
第16表　土坑出土石器観察表 …… 51
第17表　ピット計測表 …… 51
第18表　遺構外出土土器観察表(1) …… 59
第19表　遺構外出土土器観察表(2) …… 63
第20表　遺構外出土土器観察表(3) …… 65
第21表　遺構外出土土器観察表(4) …… 67
第22表　遺構外出土土器観察表(5) …… 71
第23表　遺構外出土土器観察表(6) …… 73
第24表　遺構外出土土器観察表(7) …… 74
第25表　遺構外出土小形土器・土製品観察表(1) …… 97
第26表　遺構外出土小形土器・土製品観察表(2) …… 98
第27表　遺構外出土石器観察表(1) …… 99
第28表　遺構外出土石器観察表(2) ……100
第29表　遺構外出土石器観察表(3) ……109
第30表　遺構外出土石器観察表(4) ……111
第31表　遺構外出土石器観察表(5) ……112
第32表　遺構外出土石器観察表(6) ……119
第33表　遺構外出土石器観察表(7) ……120

第Ⅰ章　調査に至る経過

平成12年４月26日に藤岡市文化財保護課と都市建設部所管の事業に関する文化財保護の協議において、本起業地である藤岡市中栗須字社宮司地内で市道の改良拡幅に関する照会があった。この区域は小野地区水田址遺跡に該当し、既に圃場整備事業の道水路工事において、隣接地より平安時代の溝６条を検出しており、また、谷地遺跡と隣接することから、開発にあたっては文化財の保存協議が必要である旨回答した。しかし、その後の協議において、この起業地の西に隣接する公立藤岡総合病院外来センターの建設工事が開始され、この市道開発を土木課が強く望んだため、平成13年４月25日付け土木課からの試掘調査依頼を受け、遺跡のあり方を確認するため市内遺跡範囲確認調査により平成13年６月26日・27日に試掘調査を実施した。その結果、当該地の全体に小野地区水田址遺跡の一部と思われる溝状遺構と谷地遺跡の一部に該当すると考えられる縄文時代包含層を確認した。平成13年６月29日付けで、試掘依頼に対して当該地の埋蔵文化財の状況を回答し、文化財保護課は当該起業地内には範囲全体に埋蔵文化財が存在し、計画変更および保存協議が必要であることを添えた。その後の協議の中で、道路改良拡幅は必要で、不可避であり、計画変更は不可能であるということから事前に記録保存処置として発掘調査を実施することとなった。本起業地の道路拡幅用地交渉、工作物等補償が完了し、藤岡市長塚本昭次（都市建設部土木課）より平成13年６月６日付けで文化財保護法による土木工事等による埋蔵文化財発掘届が提出され、同年７月に記録保存に必要な費用の積算と期間が求められた。発掘調査は文化財保護課が調査体制を確立し、その費用を平成13年度９月補正予算に計上し、発掘調査を実施するに至った。

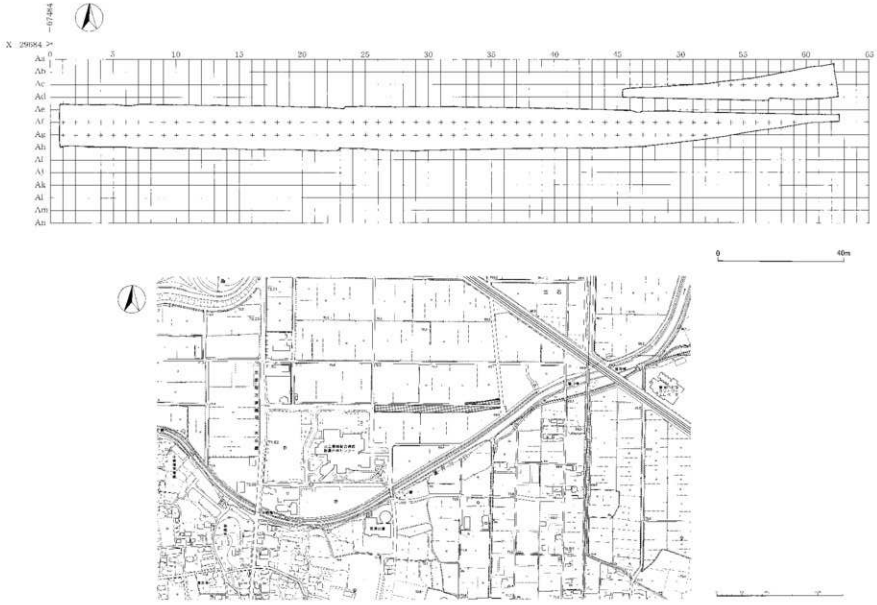
発掘調査は平成13年９月12日から開始されたが、調査区域は用水路に隣接し、周囲から調査区域へ水が侵入するため、調査は難航し、さらに当初調査区域の東側半分程度と考えられていた縄文時代包含層の範囲がほぼ全体に広がることが判明した。小野地区水田址遺跡の遺構確認面と谷地遺跡の包含層は約20cm前後の間層を挟んでおり、発掘調査は平成14年２月７日までの約６ヶ月間を要した。

第Ⅱ章　調査の方法と経過

第１節　調査の方法

調査にあたっては重機による表土掘削をした後、遺構確認を行い、測量杭を設置した。測量杭は公共座標（日本測地系）を準用し、遺跡全域とその周辺までも含めるため、Ｘ＝29684、Ｙ＝－67484をグリッドの起点Aa－０杭として基本杭を設定した。グリッドは100m毎に大グリッド、アルファベット大文字のＡ・Ｂ・Ｃ…と付し、４ｍ×４ｍのグリッドを基本単位として、その100ｍの間を25等分し、起点から南へ小文字のａ・ｂ・ｃ…ｙ、起点から西に向かって０、１、２、３…25、と付して設定した。

遺構の掘り下げにあたっては、土層観察用のベルトを残し、埋没状況の確認をした。出土した遺物は１点ずつ遺物出土地点を測量システムによって測量し記録した。遺構の写真撮影は、遺構毎に行うことを基本とし、必要に応じて確認状況写真、土層写真、遺物出土状態写真、完掘写真等を記録した。撮影には35㎜カメラを用い、モノクロとカラーリバーサルフィルムで記録した。また、遺構の測量には、主に平板を用い、縮尺１/20・１/40を用いた。その他の土層図・断面図にも縮尺１/20を主に用い、遺物出土状態図等は縮尺１/10で記録した。



第1図　グリッド設定図・調査区設定図

第２節　発掘調査の経過

発掘調査は平成13年９月12日より土木重機による表土掘削を開始。９月10日の台風による雨水のため、調査範囲の水抜き用の溝を南北に掘削した。その後、表土掘削を開始。同年10月12日に表土掘削を完了した。10月22日には委託業者により調査区内の方眼杭打ち、公共座標の取り付け、水準点の設置を実施した。

第１表　発掘調査の経過

		平成13年度					
		9月	10月	11月	12月	1月	2月
排水溝掘削							
表土掘削							
掘削							
プレハブ整地							
方眼杭打ち測量							
平安時代	遺構確認						
	水田址調査						
	水田址測量						
古墳時代	古墳遺構確認						
	調査						
	測量						
縄文時代	掘り下げ						
	遺構確認						
	調査掘り下げ						
	測量						

調査は、土木重機によりⅢ層下面浅間Ｂ軽石（As-Ｂ）直下を一応の遺構確認の目安として掘削し、状況にあわせて、浮土を除去しながら遺構確認を実施した。特に小野地区水田址遺跡では水田の面的な確認が出来るように注意を払った。

第３節　整理作業の経過

発掘調査終了から継続して遺物の洗浄および出土地点の注記を実施し、整理作業は平成14年４月14日から平成16年３月31日までの約２年間で完了する計画で実施した。平成14年度は未洗浄遺物の洗浄および出土地点等の注記を行い、５月中旬までに完了。その後、遺物台帳整備、遺物の分類、接合を実施した。そして、遺物実測および遺物写真撮影のための石膏復元作業を行った。また、これらに並行して、９月から報告書作成のための遺物の実測作業を実施。遺構図の修正、遺構下図の作成、ならびに遺物分布下図の作成を行った。平成15年度は継続して遺物の実測とトレース、遺構図のトレース、遺物分布図を作成し、各種の図版の作成と遺物観察表・原稿執筆を行った。

第２表　整理作業の経過

	平成13年度	平成14年度											平成15年度											
	2月	3月	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
水洗・注記																									
遺物台帳整備																									
遺物分類																									
接合・復元																									
実測																									
遺構図修正																									
トレース																									
拓本																									
図版作成																									
遺物写真図版作成																									
原稿執筆																									
校正																									

第Ⅲ章　遺跡の歴史的環境

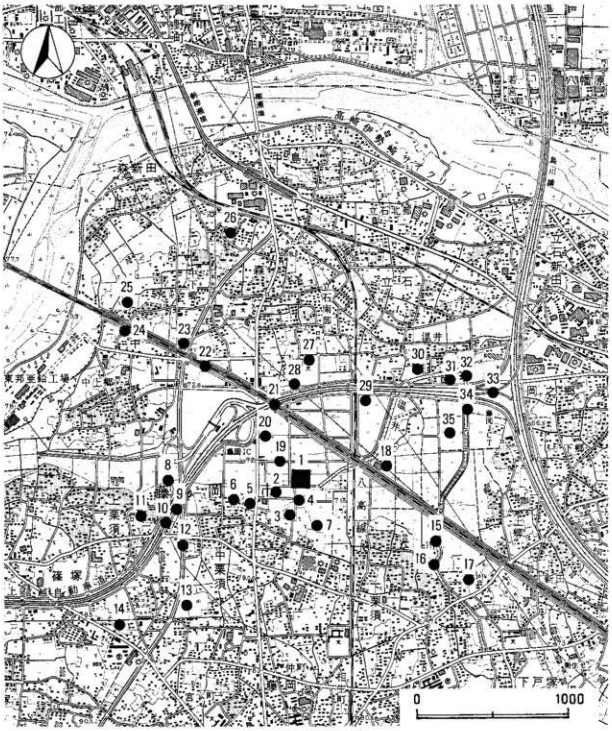
本遺跡の立地する周辺の歴史的環境について、旧石器時代では田島遺跡(16)から石器１点のみ出土している。縄文時代草創期及び早期では同じく田島遺跡から円錐形石斧、尖頭器、爪形文・撚糸文などが検出されている。縄文時代前期では、上栗須寺前遺跡群(11・12)、薬師裏遺跡(８)、薬師裏Ｂ遺跡から土坑が検出され、大道南ⅡＢ遺跡では住居址が検出されている。縄文時代中期になるとこの周辺では、温井川流域の台地端部を中心に沖積地への展開がみられる。特に縄文時代後期では温井川流域の沖積低地の微高地への展開が顕著になる。縄文時代中期中葉では神明北遺跡(５)で集落跡が確認されている。中期後半から後期にかけては、上栗須寺前遺跡群(11・12)、神明上遺跡(６)、田島遺跡(16)で住居址が、岡之台Ⅱ遺跡(35)、上栗須遺跡(12)、加桝皆戸遺跡(34)で土坑などが検出されている。

薬師裏遺跡、薬師裏Ｂ遺跡、谷地遺跡では配石・集石等も確認されている。特に谷地Ｃ遺跡(２)では後期の埋没河川流路に隣接する列石遺構や配石墓、石棒を伴う方形区画配石遺構は注目される。一部は公立藤岡総合病院外来センターの敷地内に移築復元されている。その他、岡之台遺跡(31)、神明北遺跡(５)、滝川遺跡(20)、滝川Ｂ遺跡(20)、森遺跡(21)、中栗須滝川Ⅱ遺跡(３)、埋設土器遺構を検出した神明北遺跡がある。縄文時代後期から晩期にかけては、この谷地遺跡と周辺に大規模な集落が展開している。特に中栗須滝川Ⅱ遺跡では住居址、弧状列石、盛土状遺構、水場遺構など、谷地遺跡からは、埋設土器遺構や配石遺構が確認されている。その他に、五町田遺跡(15)、中Ⅱ遺跡(24)、中栗須滝川遺跡(20)などで土器片が確認されている。

弥生時代の遺跡は市内でも限られている。特に本地域周辺では沖積微高地上に占地する沖Ⅱ遺跡(27)で多くの埋設土器遺構が検出され、いくつかの土器内からは骨片が発見されており、再葬墓と考えられている。特長的な独鈷状石器、石鏃などの石器も確認されている。また五町田遺跡、森遺跡、森泉遺跡(26)、森泉Ｂ遺跡で少量の土器片等が出土している。

古墳時代の遺跡は台地や沖積低地の自然堤防の台地に上栗須Ａ遺跡(13)、神明上遺跡、神明西遺跡、田島遺跡、中栗須滝川Ⅱ遺跡、中栗須滝川Ⅲ遺跡、原屋敷・原屋敷Ｂ遺跡、薬師前遺跡(９)などがある。その一方で、沖積微高地上に占地している遺跡として、岡之台Ⅱ遺跡、滝川Ｂ遺跡、仙久保遺跡(17)、仙久保Ｂ遺跡、中道遺跡(32)、温井遺跡(33)、森遺跡、森泉遺跡がある。古墳は稲荷通り遺跡、上栗須遺跡(12)、上栗須寺前遺跡群、上戸塚正上寺遺跡などで検出されている。その他に小野地区水田址遺跡道下地点で住居が、五町田遺跡、中Ⅱ遺跡(24)で遺構が確認されている。

奈良時代以降、平安時代にかけては、遺跡の数も増え台地上に広く展開している。この時期には、小野地区の沖積低地及び藤岡台地の北縁に遺跡が展開するようになる。稲荷屋敷遺跡、円浄遺跡、大林遺跡、大林Ｂ遺跡、上栗須遺跡、上栗須Ａ遺跡、上栗須寺前遺跡群、上戸塚西原Ⅲ遺跡、北原遺跡、郷戸遺跡、下大塚遺跡、下川前遺跡(29)、下木戸遺跡、神明西遺跡、仙久保遺跡、仙久保Ｂ遺跡、中大塚遺跡、中大塚Ａ遺跡、中大塚Ｃ遺跡、中栗須滝川Ⅱ遺跡、中栗須滝川Ⅲ遺跡、中堤添遺跡(25)、八反畑遺跡、原屋敷・原屋敷Ｂ遺跡、藤岡境Ｃ遺跡、藤岡境Ｄ遺跡、藤岡境Ⅱ遺跡、藤岡境Ⅲ遺跡、前原遺跡、本動堂東遺跡などで住居址等が検出されている。全体的には７世紀後半から始まる集落遺跡の多くが平安時代まで継続する傾向があり、規模も比較的大きい。また、上栗須遺跡の古墳前庭部からは「富本銭」が発見されている。平安時代では、奈良時代から継続する遺跡に加え、稲荷屋敷Ｂ遺跡、稲荷屋敷Ｃ遺跡、岡之台Ⅱ遺跡、沖遺跡、大明神遺跡、中大塚中道遺跡、中沖遺跡、中Ⅰ遺跡、中堤添Ｂ遺跡、新掘遺跡、西原遺跡、藤岡境遺跡、藤岡境Ｂ遺跡、森泉遺跡、森泉Ｂ遺跡などがある。上栗須寺前遺跡群、中Ⅰ遺跡、中Ⅱ遺跡や上栗須Ａ遺跡では掘立柱建物群が検出されている。



第２図　周辺遺跡分布図

１．小野地区水田址遺跡社宮司地点・谷地Ｄ遺跡　２．小野地区水田址遺跡道下地点・谷地Ｃ遺跡　３．中栗須滝川Ⅱ遺跡　４．谷地遺跡　５．神明北遺跡　６．神明上遺跡　７．中栗須滝川ⅡＢ遺跡　８．薬師裏遺跡　９．薬師前遺跡　10．寺前遺跡　11．寺前Ｂ遺跡　12．上栗須遺跡　13．上栗須Ａ遺跡　14．郷戸遺跡　15．五町田遺跡　16．田島遺跡　17．柚久保遺跡　18．新田遺跡　19．小野地区水田址遺跡　20．滝川遺跡　21．森遺跡　22．中Ｉ遺跡　23．社宮寺遺跡　24．中Ⅱ遺跡　25．中堤添遺跡　26．森泉遺跡　27．沖Ⅱ遺跡　28．沖遺跡　29．下川前遺跡　30．岡之郷温井遺跡　31．岡之台Ｉ遺跡　32．中道遺跡　33．温井遺跡　34．加例皆戸遺跡　35．岡之台Ⅱ遺跡

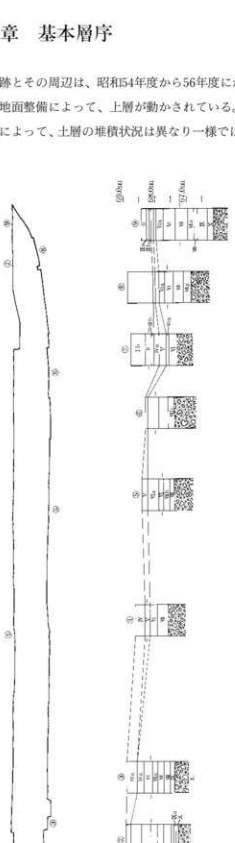
第３表　周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時期	概要
1	小野地区水田址遺跡群社宮司地点	古墳・平安・中世・近世	古墳時代溝２、浅間山噴出Ｂ軽石直下の水田跡。畦畔状遺構２、水路21条、畠１、中近世土坑２
	谷地Ｄ遺跡	縄文	縄文時代後晩期住居址３、配石遺構２、土坑72、集石遺構２、土坑72、ピット多数
2	小野地区水田址遺跡群道下地点	平安・中世・近世	浅間山噴出Ｂ軽石直下の水田跡。畦畔状遺構、水路214条
	谷地Ｃ遺跡	縄文・古墳	縄文時代住居址、配石遺構、列石遺構、土坑、ピット、土器埋設遺構、古墳時代住居址１
3	中栗須滝川Ⅱ遺跡	縄文・平安	縄文時代後晩期住居址26、配石墓、土壙墓８、列石遺構、大溝１、掘立柱建物跡、土坑・ピット多数、包含層、平安時代住居址28、溝８
4	谷地遺跡	縄文・奈良・平安	縄文時代前・中・後・晩期包含層、後・晩期埋設土器33、配石４、奈良平安時代包蔵地
5	神明北遺跡	縄文・平安	縄文時代中～後期包含層、埋設土器４、配石１、平安時代包蔵地
6	神明上遺跡	縄文・古墳・中世・近世	縄文時代住居１、包含層、古墳時代住居１、方形区画溝、掘立柱建物跡１、中近世溝１
7	中栗須滝川ⅡＢ遺跡	古墳・奈良・平安・江戸	古墳時代後期住居址３、奈良時代住居址２、平安時代住居址２、土坑ピット溝、江戸時代土坑ピット溝落ち込み
8	薬師裏遺跡	縄文	縄文時代前～後期包含層、縄文時代後期柄鏡形住居址１、土器埋設遺構、配石１
9	薬師前遺跡	縄文・古墳	縄文中期土坑、ピット、古墳住居址、溝、土坑、ピット、掘立柱建物跡
10	寺前遺跡	縄文・古墳・平安・中世・近世	縄文中期末敷石住居址、円墳11、奈良～平安住居址178、中近世土壙墓
11	寺前Ｂ遺跡		
12	上栗須遺跡	古墳・奈良・平安・中世	古墳時代中・後期古墳９、古墳・奈良・平安時代住居址、奈良時代掘立柱建物、平安時代畑、中世墓、近世馬埋葬土坑
13	上栗須Ａ遺跡	古墳・奈良・平安・中世	古墳時代後期・奈良・平安時代住居址108、掘立柱建物址(溝もち、布掘りを含む)34、中世溝、井戸４、他土坑、ピット、竪穴状遺構15
14	郷戸遺跡	古墳・平安	古墳(１)・平安時代(９)住居址、掘立柱建物址４
15	五町田遺跡	古墳・中世	古墳時代前期土壙、中世屈館跡、井戸、火葬墓、土壙墓
16	田島遺跡	旧石器・縄文・古墳	旧石器時代尖頭器、縄文時代草創期土器片、中期住居址、古墳時代中(２)・後期(３)住居址
17	仙久保遺跡	古墳・奈良・平安	古墳時代後期住居址１、溝１、奈良～平安時代住居址４、溝６、土坑12、ピット
18	新田遺跡	平安・近世	平安溝、近世溝、時期不明土坑
19	小野地区水田址遺跡	平安	浅間山噴出Ｂ軽石直下の水田跡。畦畔状遺構、水路214条。
20	滝川遺跡	縄文	縄文時代中・後期包含層
21	森遺跡	古墳・平安	古墳・平安時代掘立柱建物址
22	中Ⅰ遺跡	平安	平安時代掘立柱建物址
23	社宮寺遺跡	平安	平安時代住居址４、溝１
24	中Ⅱ遺跡		
25	中堀遺遺跡	奈良・平安	奈良～平安時代住居址28、土坑、ピット。多数の灰釉陶器出土。
26	森泉遺跡	弥生・古墳・奈良・平安・近世	弥生時代前期末包含層、古墳時代前(１)・後期(11)、奈良・平安時代(22)住居、古墳時代前期周溝墓１、近世用水路跡
27	沖Ⅱ遺跡	弥生・平安・中世	弥生時代前期末再葬墓27、土坑、包含層、平安時代溝、中世土坑
28	沖遺跡	平安	平安時代住居址３、竪穴状遺構１
29	下川前遺跡	奈良・平安	奈良(１)・平安時代(５)住居址
30	岡之郷温井遺跡	縄文・平安・中世・近世	縄文時代包蔵地、平安時代以降溝３、中近世溝12、井戸１
31	岡之台Ⅰ遺跡	縄文	縄文時代中～後期包蔵地、砂利採取に伴い発見、土器10数片、打製石斧、スクレイパー出土(砂利採取実施時に発見)
32	中道遺跡	古墳・平安	古墳時代後期住居址７、平安時代溝
33	温井遺跡	古墳	古墳時代中・後期住居址37
34	加柄笹戸遺跡	縄文・古墳・平安	縄文時代中期土坑、古墳・平安時代溝
35	岡之台ⅠⅠ遺跡	縄文・古墳・平安	縄文時代中期土坑、古墳時代後期(４)・平安時代(８)住居址

古墳時代から平安時代にかけての生産遺跡では、本遺跡のある小野地区水田址遺跡が知られている。水田址は特に平安時代を中心に鏑川・烏川の氾濫により形成された沖積地に立地し、東西約２㎞、南北約0.6㎞の広範囲に所在する市内最大級のに作られた水田址遺跡である。水田遺構の遺存状態は良くないが、これまでに畦畔状遺構、溝300条以上が検出されて、プラントオパール分析により水田遺構が広がっていたことが確認されている。また同遺跡では溝の配置などと現況地割りが合致するなど当時の条里区画や方格区画が現地割りに踏襲されているといわれている。

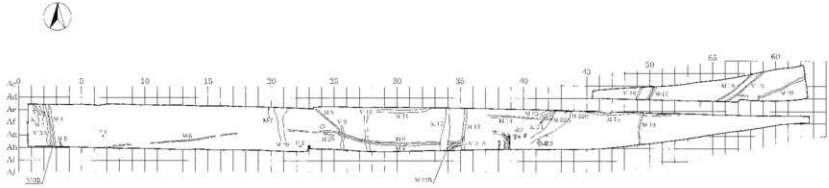
第Ⅳ章　基本層序

本遺跡とその周辺は、昭和54年度から56年度にかけて行われた小野地区の土地改良事業により、農道および水路、耕地面整備によって、上層が動かされている。また、残存する堆積土層についても、旧温井川の氾濫や河道の変化によって、土層の堆積状況は異なり一様ではない。基本土層は表土層より砂礫層までをⅠ～Ⅺ層に区分し、同質層において、性状が異なる場合にはａ、ｂ、ｃなどのアルファベット小文字で細分層している。以下、各層について記述する。

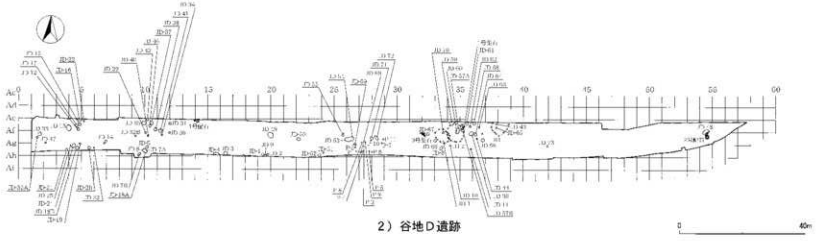


第３図　基本層序図

Ⅰ層　灰色　耕作土　As－A混土
　Ⅰａ層　耕作土（土地改良後の耕作土）
　Ⅰｂ層　耕作土（土地改良盛土）
Ⅱ層　灰褐色土
　Ⅱａ層　灰黄褐色粘質土層
Ⅲ層　暗茶褐色土　As－B混土
　Ⅲａ層　As－Ｂを少量含む
　Ⅲｂ層　As－Ｂを多く含む
　Ⅲｃ層　As－B純層または多量に含む
Ⅳ層　黒色粘質土　（平安時代水田土壌Ａ）
　Ⅳａ層　（平安時代水田土壌Ｂ）灰白色水浸酸化鉄沈着層
Ⅴ層　暗灰色粘土
Ⅵ層　灰褐色粘土
　Ⅵａ層　炭化物粒を多く含む
Ⅶ層　茶褐色シルト粘質土
　Ⅶａ層　粘質が強い、Ⅵ層漸移層
　Ⅶｂ層　粘質が弱い　縄文時代後～晩期包含層
Ⅷ層　茶褐色シルト土
Ⅸ層　褐色粘質土
　Ⅸａ層　暗色　炭化物を多量に含む
　Ⅸｂ層　暗色　炭化物を含まない
Ⅹ層　暗灰褐色土　炭化物少量含む　縄文時代後期包含層
Ⅺ層　砂礫層



1）小野地区水田址遺跡社宮司地点



2）谷地D遺跡

第4図　遺構全体図

第１節　小野地区水田址遺跡社宮司地点

小野地区水田址遺跡は、小野地区高速関連土地改良事業に係るＣ４小野地区遺跡群発掘調査の概報（昭和54・55年度）、昭和57年の報告において、温井川流域に平安時代水田址が広範囲にわたって存在していることが報告されている。特に昭和55年度の概報において、本遺跡の北側隣接水路部分の調査（19トレンチ）が行われている。当時検出された遺構は浅間Ｂ軽石埋没水路（溝）で、本遺跡の調査でも検出された溝と対応するものが報告されている。

この小野地区水田址遺跡は、水田址遺構遺存状況は良好とは言えず、水田遺構の区画、畦畔遺構が明確な形で検出されていない。また、浅間Ｂ軽石降下以降、水田復旧などの痕跡も現在までのところ遺構として検出されていない。度重なる調査では水田形成土壌とプラントオパール分析結果、水路、水口遺構、無数の耕作足跡痕跡群遺構などの水田址と考えられる条件を満たす状況的水田址遺跡である。

本遺跡においても、平安時代の溝21条と水田址面と考えられる遺構、間層を挟んで下位の溝６条を検出したが、水田畦畔遺構も明確には検出されなかった。畝状遺構も１ヶ所検出しており、水田址だけでなく、立地や耕作条件で畑遺構が混在していたことも推定される。

１．遺構と遺物

本遺跡からは、小野地区水田址遺跡関連の平安時代頃の溝21条と畦状遺構２条、畝状遺構１箇所、中世溝２条、調査区の東端には水田遺構と思われる痕跡も確認されている。また、古墳時代後期に相当すると考えられる溝が５条検出されている。特に古墳時代の溝については、小野地区水田址遺跡の形成過程において重要な遺構であると考えられる。

本遺跡では、小野地区水田址遺跡「Ｃ４小野地区遺跡群発掘調査報告書」(1982)の19トレンチの隣接にあたり、当時の調査区が現在の調査区北側の水路の位置に相当する。

したがって当時検出された溝の延長が本調査区においても確認されている。

第４表　溝状遺構一覧表

名　称	グ リ ッ ド	時代時期	上幅(cm)	下幅(cm)	深さ(cm)	走行方向	1982報告
M−22A	Ad−43, Ag−40	古墳時代	128 〜 280	24 〜 88	16 〜 32	N−51−E	
M−22B	Ad−43, Ag−40	古墳時代	280	35 104	10	N−18−E	
M−23	Ae−41	古墳時代	88 〜 96	48 〜 64	24	N−60−E	
M−26	Ad−20, Ah−21	古墳時代	160 〜 456	52 〜 264	40 〜 68	N−14−W	
M−1	Ae−01	平安時代	28 〜 56	12 〜 40	8	N−37−W	
M−2	Ad−01, Ae−01	平安時代	36 〜 96	20 〜 28	16 〜 24	N−37−W	
M−3	Ad−01, Ag−02	平安時代	64 〜 96	16 〜 48	24	N−12−W	IM 9
M−5	Ag−03	平安時代	16 〜 56	5 〜 40	12	N−26−W	
M−6	Ag−06, Ag−35	平安時代	20 〜 70	6 〜 55	8	N−85−E	
M−7	Ad−19, Ae−19	平安時代	30 〜 46	12 〜 27	32	N−2−W	
M−8	Ad−23, Ag−35	平安時代	44 〜 46	18 〜 44	21 〜 24	N−135〜92−E	IM11
M−9	Af−25, Ah−25	平安時代	56 〜 104	16 〜 44	8	N−3−W	
M−10	Af−27, Ah−27	平安時代	72 〜 112	8 〜 44	8	N−4−W	
M−11	Ae−28, Ad−32	平安時代	54 〜 98	10 〜 38	2	N−87−E	
M−13	Ad−35, Ah−34	平安時代	64 〜 113	26 〜 90	18 〜 24	N−3−E	
M−14	Ae−37, Ae−42	平安時代	32 〜 64	9 〜 36	32	N−91−E	
M−15	Ad−41, Ae−52	平安時代	40 〜 72	16 〜 51	8	N−96−E	
M−17	Ac−50, Ag−49	平安時代	46 〜 73	24 〜 37	40	N−28−E	
M−18	Ab−58, Ad−55	平安時代	23 〜 40	6 〜 18	24	N−46−E	IM12
M−19	Aa−58, Ad−55	平安時代	40 〜 64	16 〜 30	20 〜 24	N−46−E	IM13
M−20	Ac−56, 57	平安時代	4 〜 45	2 〜 22	10	N−95〜66−E	
M−21A	Ag−34, Ah−34	平安時代	36 〜 48	20 〜 32	11	N−60−E	
M−21B	Ag−34, Ah−33	平安時代	48 〜 64	12 〜 34	5	N−67−E	
M−28	Af−24, Ag−24	平安時代	30 〜 42	6 〜 24		N−100−E	
M−4	Ad−02, Ag−02	中　世	40 〜 86	14 〜 44	40	N−8−W	IM10
M−12	Ad−34, Ah−33	中　世	99 〜 240	6 〜 40	35 〜 48	N−7−E	
M−16	Ac−49, Ae−48	中　世	40 〜 68	19 〜 33	8	N−26−E	

1）古墳時代溝状遺構

本調査では古墳時代に相当すると考えられる溝５条を検出した。その他の浅間Ｂ軽石降下以前、平安時代溝状遺構より間層を挟んで下位にあり、Ⅴ層中から掘り込まれている。直接関係しないが、同層準より古墳時代の高坏等が検出されている。小野地区水田址遺跡の成立を考える上で注意される溝状遺構である。

M-22A

規模形状　溝底より緩やかに立ち上がる。溝幅は広く、南西から北東に向かって幅を広げながら流下する。　**出土遺物**　なし。　**切り合い関係**　調査区北側でM-22Bと合流する。M-22Bとの時間的な切り合い関係は不明である。

覆土等　深掘調査時に溝の一部を断面で確認、確認レベルまで掘り下げて調査を行った。

M-22B

規模形状　溝底より緩やかに立ち上がる。　**出土遺物**　なし。　**切り合い関係**　調査区北側でM-22Aと合流する。時間的な切り合い関係は不明である。　**覆土等**　調査時の状況ではM-22Aと掘り込みレベルはほぼ同じであり、覆土の状況も際だった差異はないことから、ほぼ同時期と思われる。

M-23

規模形状　溝底より弧状にやや急激に立ち上がる。溝幅は90cm前後で安定している。　**出土遺物**　なし。　**切り合い関係**　なし。M-22Aと平行するように北東へ流下する。調査区北でM-22Aと交叉すると思われる。　**覆土等**　M-22Aの覆土の状況と近似している。

M-24

規模形状　深さは16cm程度で浅く、幅は88cm前後で、M-23に平行する様に北東に流下し、南側は不明瞭である。　**出土遺物**　なし。　**切り合い関係**　M-22Aに切られる。　**覆土等**　M-23と規模形状的には近似しており、同時期の可能性が高い。

M-26

規模形状　溝底は深く、比較的平らで、底幅約50cmぐらいから緩やかに立ち上がる。調査区北側で急激に溝幅を広げ、東側の立ち上がりが明確でなくなる。　**出土遺物**　なし。　**切り合い関係**　なし。　**覆土等**　掘り込み層位、レベルではM-22Aとほぼ同じ、もしくは若干下位である。ほぼ古墳時代の所産と思われる。

2）平安時代以降溝状遺構

M-1

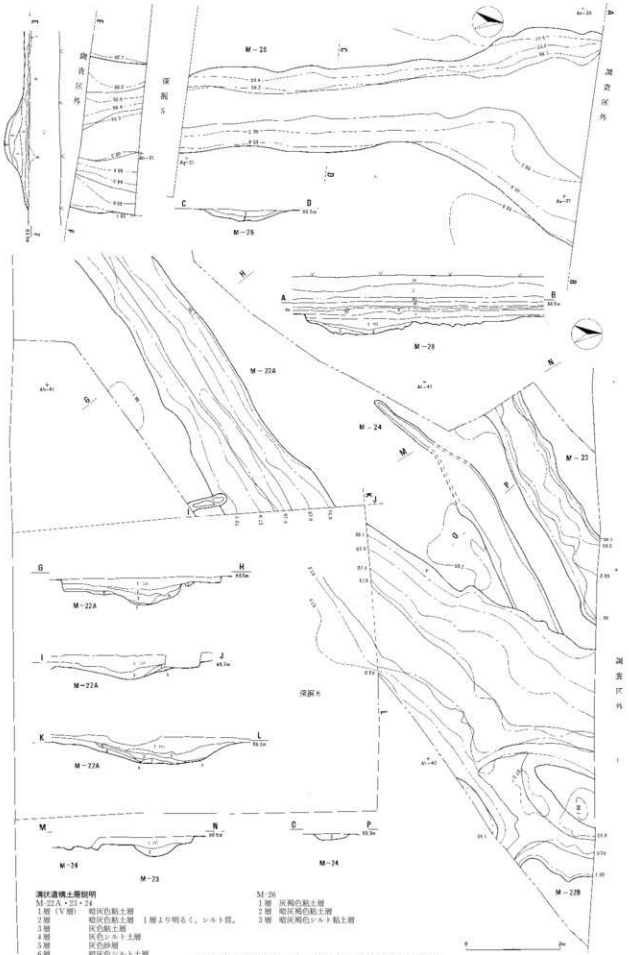
規模形状　溝底は比較的平らで狭く、緩やかに立ち上がる。　**出土遺物**　なし。　**切り合い関係**　M-2と平行。北側は遺構外。　**覆土等**　Ⅲ層下位より掘り込まれている。

M-2

規模形状　溝底は比較的平らで狭く、緩やかに立ち上がる。　**出土遺物**　なし。　**切り合い関係**　M-1と平行。北側は遺構外。　**覆土等**　Ⅲ層下位より掘り込まれている。

M-3

規模形状　溝底は比較的平らで狭く、急激に立ち上がる。溝幅約64cmで安定している。区画南で広がり、A・B２本に分かれる。　**出土遺物**　なし。　**切り合い関係**　M-4に平行する。　**覆土等**　上部が削平されているため明確な掘り込み面は不明である。



遺構土層説明

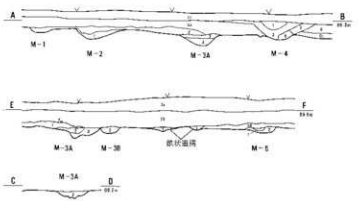
M-22A・23・24

1層（V層）　暗灰色粘土層
2層　暗灰色粘土層　1層より明るく、シルト質。
3層　灰色粘土層
4層　灰色シルト土層
5層　灰色砂層
6層　暗灰色シルト土層
7層　灰色砂利層

M-26

1層　灰褐色粘土層
2層　暗灰褐色粘土層
3層　暗灰褐色シルト粘土層

第5図　M-22A・B・23・24・26号溝状遺構(1)



溝状遺構土層説明

M－2
1層　暗灰褐色土層　II層土を混入する。
M－3A・B
1層　黄灰褐色土層　　砂を含む。
2層　暗褐色粘質土層
3層　暗灰色シルト土層　砂を含む。
M－4
1層　灰褐色砂質土層
2層　灰褐色シルト粘土層
3層　灰褐色粘土層
4層　灰色シルト土層
M－5
1層　黒色粘土層
2層　暗灰色粘土層
畝状遺構
1層　黄色砂質土層（As－B軽石降下以降）

0　2m

第6図　M－1・2・3A・B・4・5号溝状遺構2)

M－4

規模形状　溝底は比較的平らで狭く、急激に立ち上がる。溝幅約64cm。区画南で広がり、A・B２本に分かれる。**出土遺物**　なし。　**切り合い関係**　M－３に平行する。　**覆土等**　土地改良整備により掘り込み層位不明。

M－5

規模形状　溝底は凹凸があり、急激に立ち上がる。　**出土遺物**　なし。　**切り合い関係**　南調査区外　**覆土等**　浅間Ｂ軽石降下以降の畝土層が上位にのる。

M－6

規模形状　溝底は比較的平らで狭く、急激に立ち上がる。溝幅約56cmで安定している。　**出土遺物**　なし。　**切り合い関係**　調査区を東西に若干弧状に横断し、途中 Ag-26グリッド付近でM－８を切り、併走し、M-12、M-13に切られて、M-13で終止する。M－９、10、21Ａ・Ｂを切る。　**覆土等**　土地改良面整備により掘り込み層位不明。浅間Ｂ軽石を覆土に含む。

M－7

規模形状　溝底は狭く、立ち上がりは不明確。　**出土遺物**　なし。　**切り合い関係**　なし。　**覆土等**　Ⅲ層を覆土に持つ。

M－8

規模形状　溝底は比較的平らで狭く、急激に立ち上がる。溝幅約56cmで安定している。　**出土遺物**　なし。　**切り合い関係**　途中 Ag-26グリッド付近でM－６に切られ併走し、M-12、M-13に切られて、M-13で終止する。M－９、10、21Ａ・Ｂを切る。　**覆土等**　土地改良整備により掘り込み層位不明。浅間Ｂ軽石を覆土に含む。

M－9

規模形状　溝底は浅く、緩やかに立ち上がる。僅かに蛇行する。　**出土遺物**　なし。　**切り合い関係**　M－６・８に切られる。　**覆土等**　Ⅲｂ層。

M-10

規模形状　溝底は浅く、不明確。僅かに蛇行する。　**出土遺物**　なし。　**切り合い関係**　M－６・８に切られる。**覆土等**　土地改良整備により掘り込み層位不明。

M-11

規模形状　溝底は狭く、立ち上がりは不明確。　**出土遺物**　なし。　**切り合い関係**　なし。　**覆土等**　土地改良面整備により掘り込み層位不明。

M-12

規模形状　溝底は狭く、急激に立ち上がり「Ｖ」字状の薬研堀。途中幅が広がり、テラス状の段を持つ。　**出土遺物**　なし。　**切り合い関係**　M－６・８を切る。　**覆土等**　土地改良整備により掘り込み層位不明。

M-13

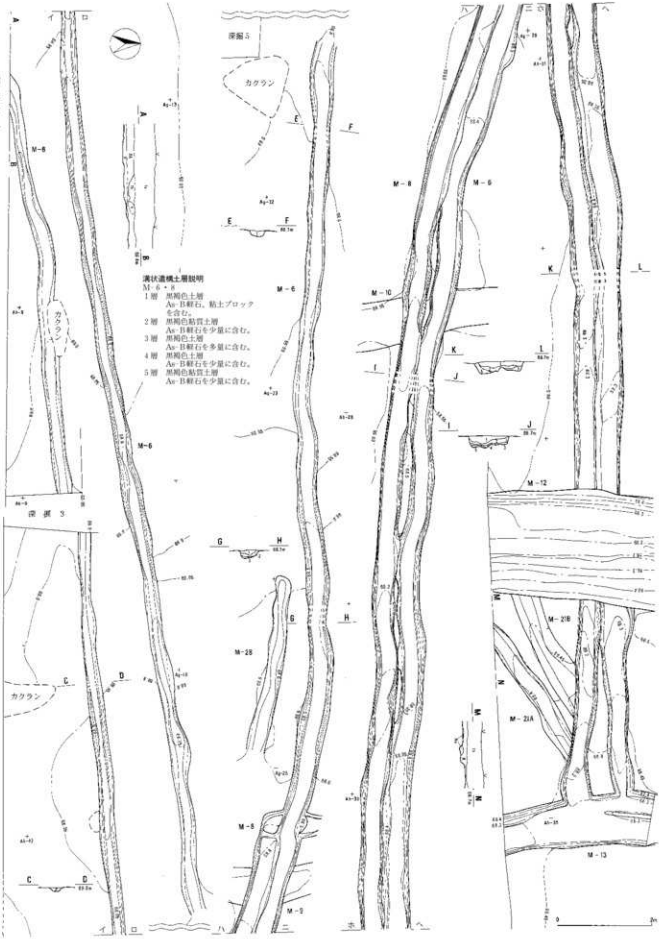
規模形状　溝底は平らで広く、急激に立ち上がり「コ」字状。途中若干幅が広がり、段を持つ。　**出土遺物**　なし。　**切り合い関係**　M－６・８を切り、合流する。　**覆土等**　Ⅲｂ層より掘り込まれる。

M-14

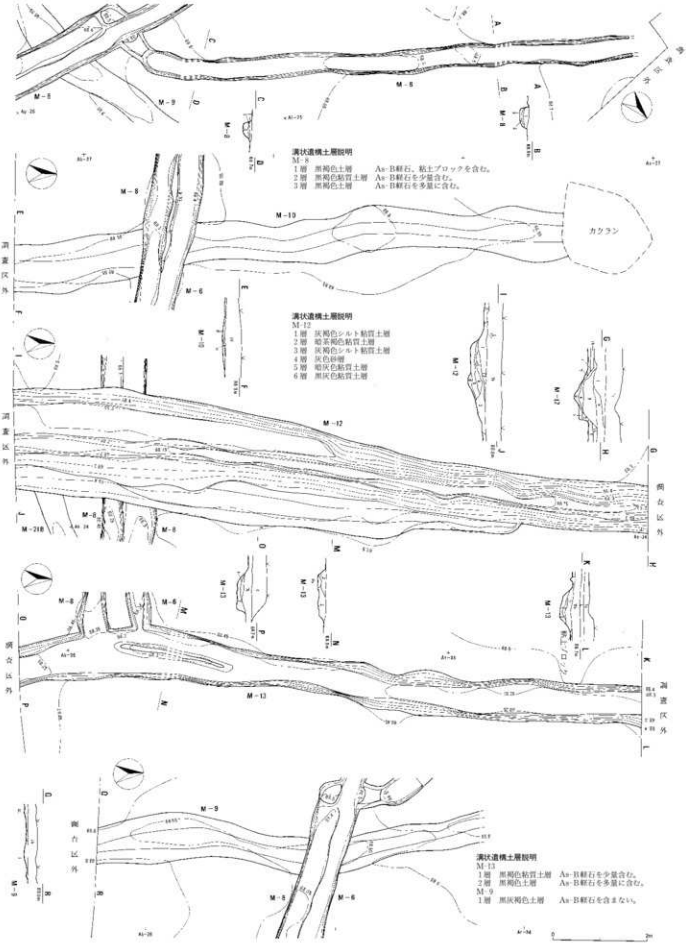
規模形状　溝底は平らで広く、急激に立ち上がり「コ」字状。　**出土遺物**　なし。　**切り合い関係**　M－６・８を切り、合流する。　**覆土等**　Ⅲｂ層より掘り込まれる。

M-15

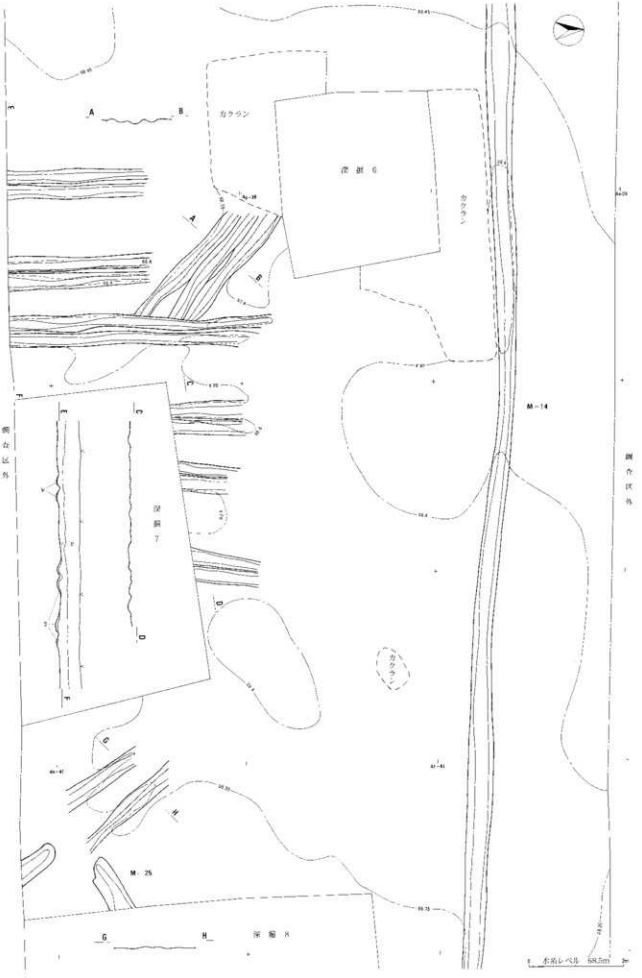
規模形状　溝底は平らで、急激に立ち上がり「コ」字状。　**出土遺物**　なし。　**切り合い関係**　M-16・17を切る。**覆土等**　覆土にⅢ層を含む。



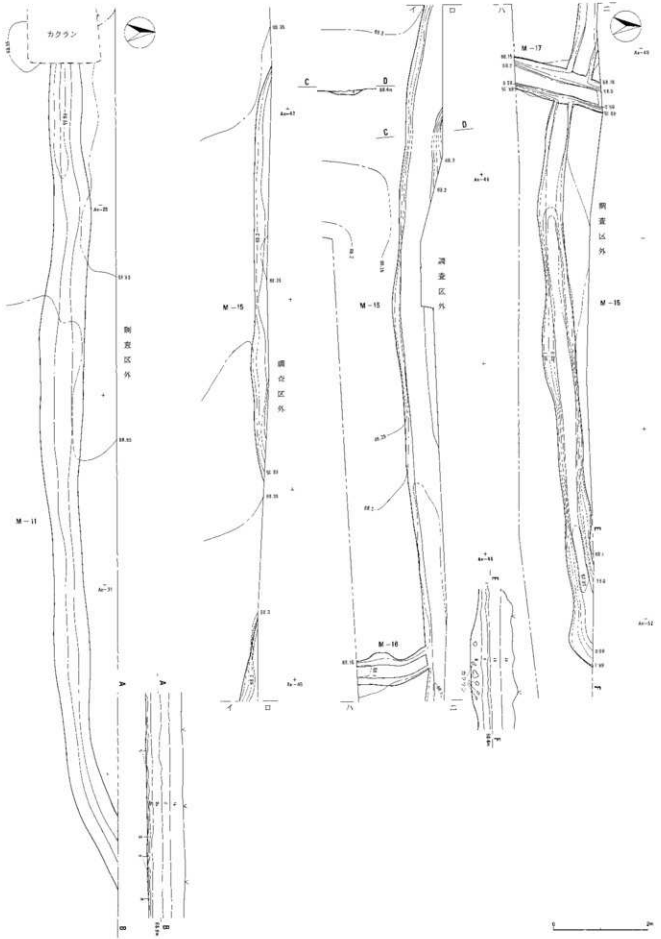
第7図　M-6・8・21A・B・28号溝状遺構(3)



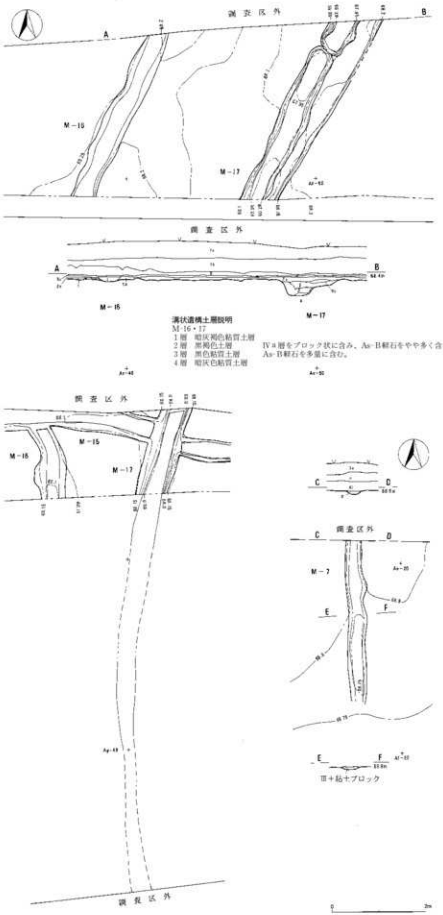
第8図　M-8・9・10・12・13号溝状遺構(4)



第９図　M-14号溝状遺構・畝状遺構(5)

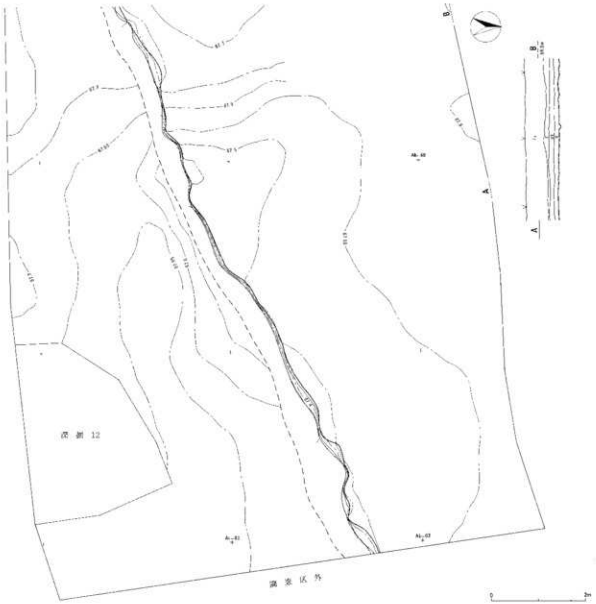


第10図　M-11・15号溝状遺構(6)



第11図　M－7・16・17号溝状遺構(7)

第12図　M-18～20号溝状遺構(8)



第13図　M-20号溝状遺構・水田址(9)

M-16

規模形状　溝底は平らで、急激に立ち上がり「コ」字状。　**出土遺物**　なし。　**切り合い関係**　M-17に併走し、M-15に切られる。　**覆土等**　IIａ層より掘り込まれる。

M-17

規模形状　溝底は平らで、急激に立ち上がり「コ」字状。　**出土遺物**　なし。　**切り合い関係**　M-16に併走し、M-15に切られる。　**覆土等**　IIIａ層より掘り込まれる。

M-18

規模形状　溝底は平らで、急激に立ち上がり「コ」字状。　**出土遺物**　なし。　**切り合い関係**　M-19に併走する。**覆土等**　III層より掘り込まれる。

M-19

規模形状　溝底は平らで、急激に立ち上がり「コ」字状。　**出土遺物**　なし。　**切り合い関係**　M-18に併走し、M-20を切る。　**覆土等**　III層より掘り込まれる。

M-20

規模形状　浅く、立ち上がりは不明確。　**出土遺物**　なし。　**切り合い関係**　M-19に切られる。　**覆土等**　Ⅲｂ層より掘り込まれる。浅間Ｂ軽石埋没水田遺構の水口へ繋がる可能性がある。

M-21Ａ・Ｂ

規模形状　Ａ・Ｂ２条が並行し、掘り込みは浅く、北西側の立ち上がりが不明確。　**出土遺物**　なし。　**切り合い関係**　M-６・８・21に切られる。　**覆土等**　Ⅲ層中より掘り込まれる。

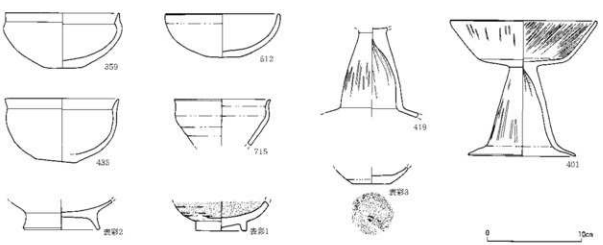
３）畝状遺構

Af～Ah/37～41グリッドにかけて、南北方向に幅30～40cmの２条単位で並行する浅い畝状遺構、明確ではないがそれらに切られるように傾斜する２～３条単位の畝状遺構が検出された。覆土に浅間Ｂ軽石を含む。畦畔などの遺構は確認されなかったが、水田を区切って、水田耕作以外に部分的に畑作が行われていたものと推測される。

４）水田遺構

調査区の東端部、M-19の東側に若干東へ傾斜する範囲で、浅間Ｂ軽石埋没水田遺構が検出された。畦畔は不明であるが、M-20の延長上に水口遺構のような落ち込みとそこから延びる流水痕が確認され、水田址遺構面には無数の足跡のような窪みが広範囲から検出された。面の状態については実測図として掲載できなかったが、状況写真図版を参照されたい。

５）遺構外出土遺物



第14図　遺構外出土遺物

第５表　小野地区水田址遺跡遺構外遺物観察表

図版番号	遺物番号	器　種	法　量（cm）				色　調	胎　土	焼成	残存部位	残存率	時期・型式	備　考
			口径	底径	器高	脚部大径							
第14図	512	坏	12.0	—	4.6	—	器外面：にぶい橙5YR6/4 器内面：橙5YR6/6	①細砂：多量 ②粗砂：少量	硬質	口辺～底	ほぼ完形	土師器（8C代）	
第14図	359	坏（内斜口縁）	12.0	4.0	5.8	—	器外面：明赤褐5YR5/6　50% 橙7.5YR6/6　40% 褐灰7.5YR4/1　10% 器内面：明赤褐5YR5/8	①細砂：多量 ②粗砂：少量 ③小石：微量	硬質	口辺～底	2/3	土師器（5C代）	
第14図	435	坏（内斜口縁）	12.0	4.2	3.4	—	器外面：橙7.5YR6/6　60% にぶい橙7.5YR6/3　20% 褐灰　7.5YR4/1　20% 器内面：にぶい橙7.5YR6/4	①細砂：多量 ②粗砂：少量	硬質	口辺～底	2/3	土師器（5C代）	
第14図	401	高坏	15.4	11.2	14.4	—	器外面：にぶい赤褐色5YR5/3 器内面：にぶい橙5YR6/4	①細砂：多量 ②粗砂：微量	硬質	口辺～脚	2/3	土師器（5C代）	
第14図	491	高坏	—	—	(9.4)	—	器外面：にぶい橙5YR6/4 器内面：にぶい橙5YR6/3	①細砂：多量	硬質	脚～裾	1/3	土師器（5C代）	
第14図	表採２	高台碗		8.0	(3.2)		器外面：橙7.5YR7/6 器内面：にぶい橙7.5YR7/4	①細砂：多量 ②粗砂：微量	硬質	底～高台	1/3	須恵器（酸化焼）（Ⅰ調研図12）	
第14図	715	天目茶碗	10.0	—	(5.0)	—	器外面：黒褐色5YR2/1 器内面：黒褐色5YR2/1	—	硬質	口辺～体	1/5	陶器	
第14図	表採１	碗		5.4	(3.2)		器外面：にぶい橙7.5YR6/4　90% 暗褐7.5YR3/3　10% 器内面：暗褐7.5YR3/3　90% 暗青灰5BP4/1　10%	①細砂：多量	硬質	体下～高台	1/3	陶器	（Ⅱ表採１）
第14図	表採３	カワラケ	4.0		(1.8)		器外面：浅黄橙7.5YR8/3.50% にぶい橙7.4YR7/4.50% 器内面：浅黄橙7.5YR8/3＋J27	①細砂：中量 ②粗砂：中量 ③小石：微量	硬質	体下～底	1/3	中世	

第２節　谷地Ｄ遺跡

藤岡台地の北縁を流下する一級河川温井川の沖積地に立地する縄文時代後晩期遺跡で、昭和56年に開始される温井川の河川改修に伴うＣ８谷地遺跡の調査において、配石及び埋設土器遺構が検出されている。その後、温井川を挟んだ南側の台地上の滝川Ⅱ遺跡の調査によって、大規模な後晩期の集落、列石遺構などが確認され、台地上にも同時期の遺跡が広がることが知られた。また、平成12年から行われた公立藤岡総合病院外来センター建設に伴う谷地Ｃ遺跡の調査で、谷地遺跡の西側及び北側にも同時期の遺跡の広がりが確認され、本地域に大規模な後晩期の集落遺跡が展開することが明らかとなった。本遺跡はこの谷地Ｃ遺跡から東に走る市道に伴う発掘調査である。

検出された遺構は住居址３、配石遺構２、集石２、土坑　、ピットで、縄文時代後晩期の遺物包含層を伴う。遺物は土器、土器片15,773点、石器類1,172点の合計16,945点である。ほとんどの遺物が縄文時代後期堀之内２式期後半～加曽利Ｂ式期に相当するもので、出土量的に本遺跡の中心となる時期は加曽利Ｂ式期と考えられる。遺構については土層の状況が非常に悪く、一部砂礫層上に存在するために遺構確認が困難であるため、住居址についても明確な炉址を伴わず、ピット等の状況的な根拠で遺構認定を行っている。また、包含層の遺物出土状況も面的で、土器などは廃棄された状態に近い状況で検出されるなど埋没状況において原位置に近い状況が看取されている。動物遺存体や炭化物なども多く検出されているので、巻末の分析を参照されたい。以下、遺構毎に記載する。遺物に関しては観察表に記載しているので併せて参照されたい。

１）住居址・配石遺構・集石遺構

JH－１号住居址（第15図）

位置　Ae-37・38・39／Af-37・38・39グリッド　**規模形状**　住居壁未検出。北側約１/２調査区外。　**覆土**　不明。　**炉址**　不明。

１号住居址は調査区を掘り下げ、プラン確認をおこなったが、炉址及び住居プランは確認されず、９箇所ピットが直径約５ｍの隅丸方形状に１ｍ～1.8m間隔でめぐることで、住居址の痕跡と判断したものである。主軸はＮ―43―Ｗ。

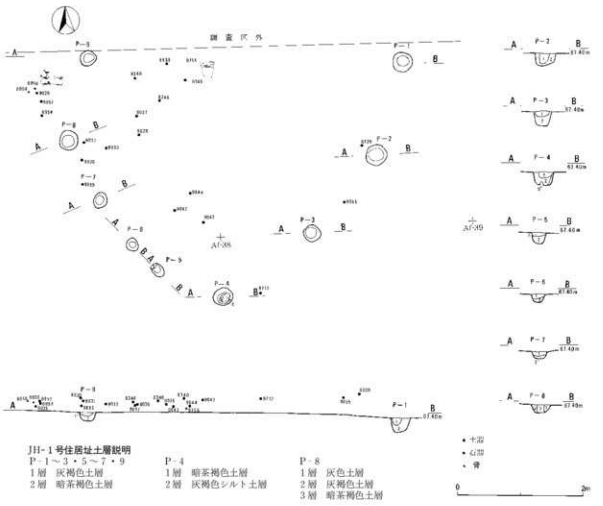
遺物分布　確認面上、標高67.40m付近に遺物の分布が面的に見られることから、恐らくその付近に住居床が存在していたものと想定される。包含層の遺物分布状況では、本住居付近の範囲で特に集中する傾向は見られず、全体に散漫な状況で遺物が分布しており、西側付近で石器、土器の分布が若干密になる。

出土遺物（第16図・第17図）

遺物の分布は住居址西側にやや偏った分布を示す。　9026は、１対の把手が付されたとみられ、１個のみ遺存。把手内側には沈線よる「の」字状文が施され、口唇部の沈線へと連続する。口唇部は１条の沈線を巡らし、薄く内側へ屈曲する。上端には刻目が施される。外面は把手部から連続して２条の隆帯を巡らす。下段隆帯に刻目が

第６表　JH－１号住居址出土土器観察表

図版番号	No.	器種	法量（cm） 口径	底径	器高	胴部最大径	色調	胎土	焼成	残存部位	残存率	時期・型式
第16図	9026	注口	(7.0)	7.5	(14.3)	—	器外面：橙　7.5YR7/6　80% 褐灰　10YR4/1　20% 器内面：褐灰　10YR6/1　100%	①細砂：中量白色粒・微量黒色粒 ②粗砂：認められず	硬質	口辺＋底	1/3	加曽利Ｂ1式
第16図	9055	深鉢	(18.2)	—	(20.0)	16.3	器外面：褐灰　10YR4/1　70% 明赤褐　5YR5/6　30% 器内面：灰黄褐　10YR4/2　90% にぶい黄橙　10YR7/2　10%	①細砂：多量石英・黒色粒・白色粒・海綿骨針 ②粗砂：少量チャート・結晶片岩	硬質	口辺～底	2/3	加曽利Ｂ1式

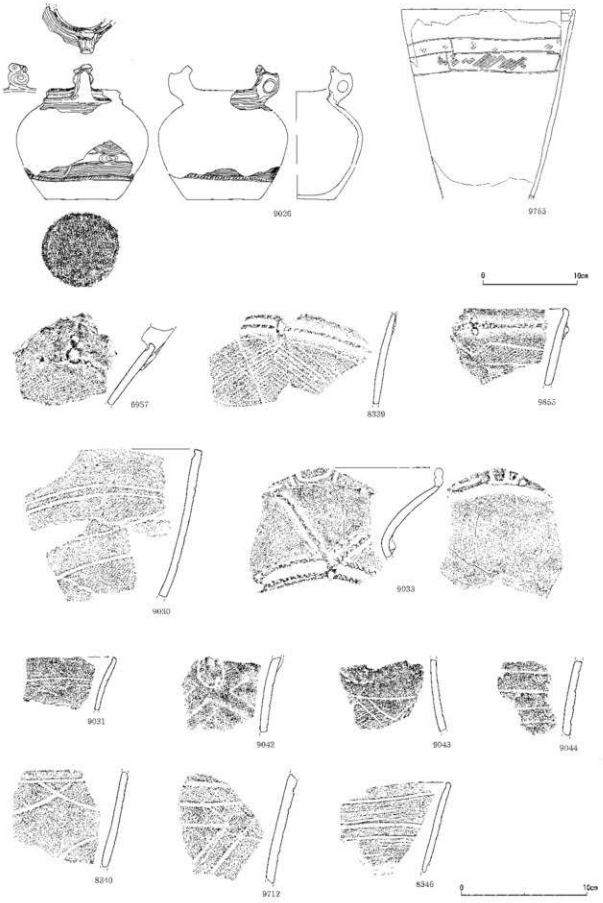


第15図　JH-1号住居址

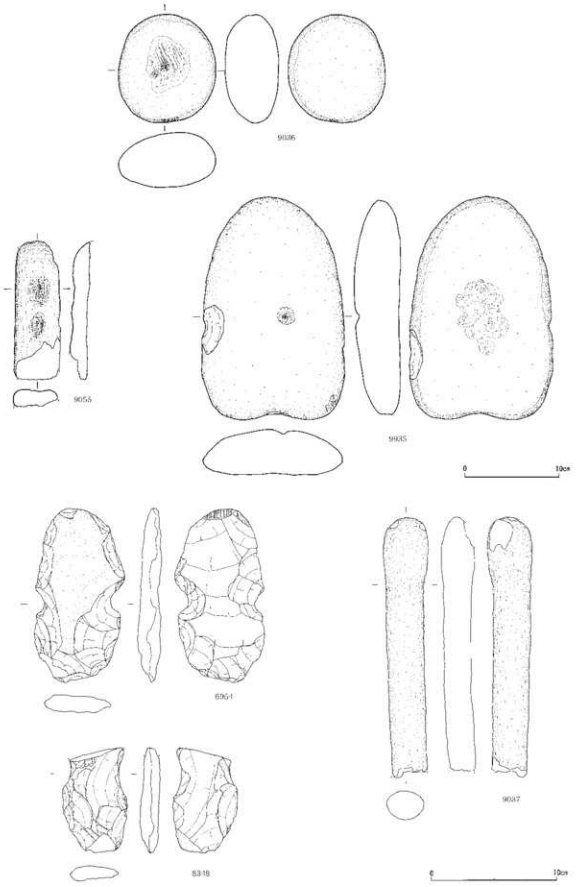
施される。胴部は多重沈線「の」字状文、沈線間の刻目によって文様が構成される。底面網代痕（一本越え、一本替え、一本送り）。内外面ともに磨き。胴部内面はナデ様。9755は、外面は3条の沈線による横位区画帯に単節ＬＲ縄文を充塡。縦位のＬ字状区切り文を4単位施す。沈線は所々途切れ、不安定である。内面は2条の横位沈線を巡らし、内面および外面胴部上半が磨かれている。6957・9855・9033は口縁部及び付近のもので、6957・8339・9855・9033紐状隆線に刺突刻目文。8339は沈線による菱形幾何学文。9030・9031・9042・9043・9044・8330・9712は幾何学区画文に充塡と磨消縄文で構成され、8346は縄文の代わりに櫛歯状工具による。大略堀之内2式期比定される。

第7表　JH-1号住居址出土石器観察表

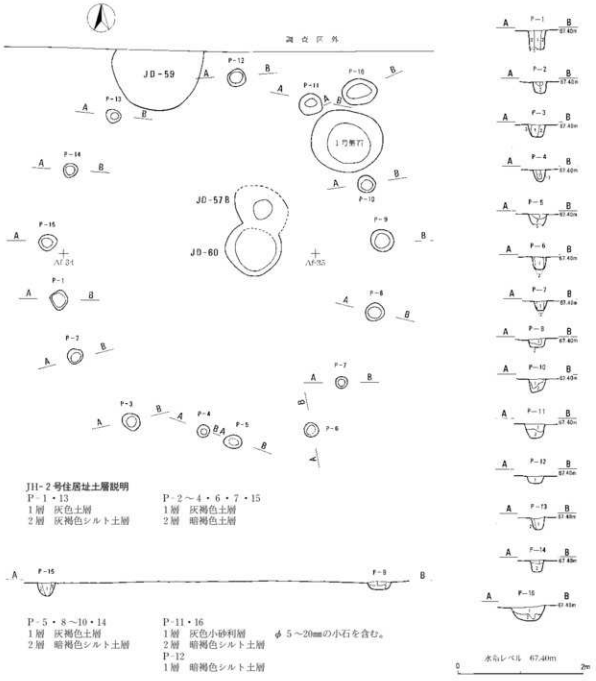
図版番号	遺物No	器　種	全　長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重　さ(g)	石　質	X	Y	H	備　考
第17図	9036	磨　石	11.4	10.4	5.9	980	安山岩	29665.686	−67333.227	67.490	
第17図	9055	凹　石	(14.7)	5.0	(2.1)	240	結晶片岩	29664.438	−67329.941	67.633	
第17図	9935	凹　石	23.8	15.2	4.9	2610	砂　岩	29666.793	−67332.691	67.506	
第17図	6954	打製石斧	14.8	7.2	1.9	200	安山岩	29666.136	−67334.664	67.527	
第17図	8348	打製石斧	(8.3)	5.2	1.6	70	安山岩	29666.583	−67333.308	67.576	
第17図	9037	石　棒	(20.7)	3.6	2.6	260	結晶片岩	29665.714	−67333.155	67.489	



第16図　JH－1号住居址出土遺物(1)



第17図　JH－1号住居址出土遺物(2)



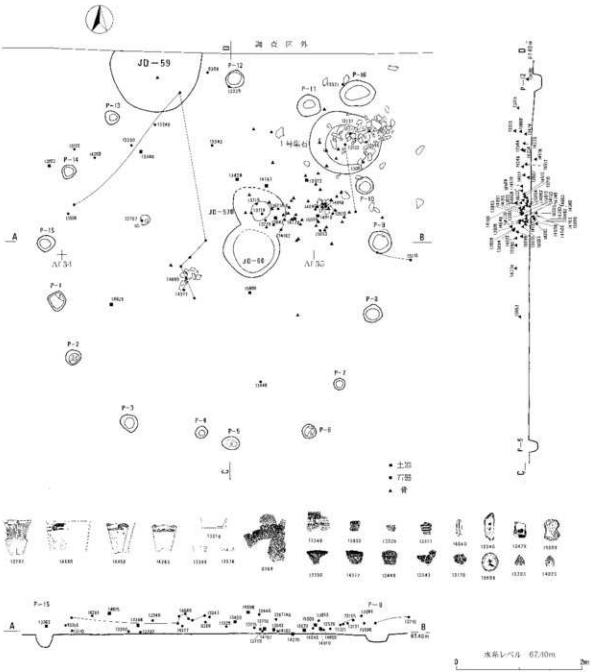
第18図 JH-2号住居址

JH-2号住居址（第18図）

位置 Ae-34・35／Af-34・35グリッド **規模形状** 住居壁未検出。 **覆土** 不明。 **炉址** 不明。JD-57B及び1号集石付近に動物骨片が集中する。

2号住居址は調査区を掘り下げ、プラン確認をおこなったが、炉址及び住居プランは確認されず、18箇所ピットが直径約5.7m～6.7mの環状に0.8m～1.2mの間隔でめぐり、遺物が集中することから、住居址の痕跡と判断したものである。関連する遺構としては中央付近には JD-57B、60、その北側に1号集石、JD-59がある。出土遺物等からは時期的に近接するが、直接本遺構に伴うか否かは不明である。

遺物分布 確認面上、標高67.50m付近に遺物の分布が上下差を以て見られ、特に住居址中央やや東寄りの JD-57B、60、1号集石付近に土錘、石錘、打製石斧、土器片などの集中が見られる。また、この周辺約2mの範囲に

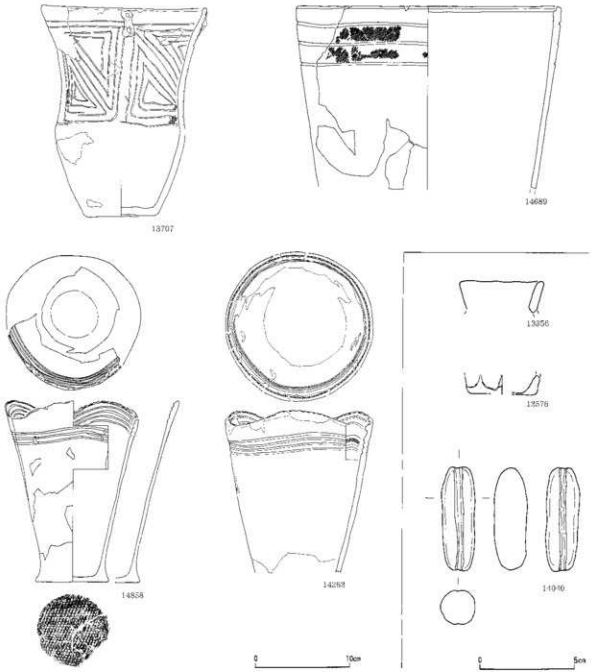


第19図　JH－2号住居址遺物分布図

獣骨片が集中分布する(第19図)。獣骨については同定分析結果では、ニホンジカ、イノシシ等であると同定されている。

出土遺物（第20図、第21図、第23図）

第20図13707は正位の状態で出土した。口縁端部内面はやや丸みを帯びる。外面は沈線文による4単位区画。長方形の区画内に、対称的な三角形文を施す。沈線間には、部分的に単節LR縄文が充填される。正面観が意識され、1ヶ所のみ「8」字状文が貼付される。口縁部内面に浅い沈線状の調整痕が残る。14689は平縁。口唇部内面に1条の沈線を巡らす。外面は細縄文LR施文後、3条の横位沈線を巡らす。内外面ともに磨き。14858は3単位の波状口縁。波状山部は小波状、谷部は沈線を施す。外面は口縁部形状に沿って3条の横位沈線を巡らし、「し」字状の区切り文を施文する。内面には4条の横位沈線を巡らす。底面網代痕(一本越え、一本替り、一本送り)。内外

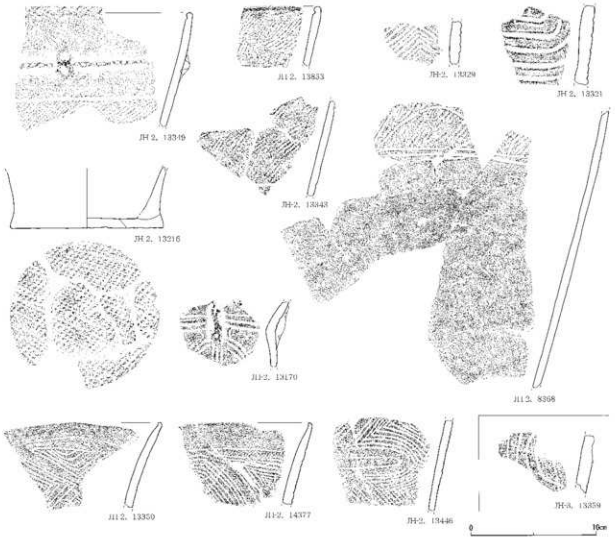


第20図　JH-２号住居址出土遺物

第８表　JH-２号住居址出土土器観察表

図版番号	No.	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	開口径	色調	胎土	焼成	残存部位	残存率	時期・型式
第20図	13707	深鉢	(17.4)	7.4	21.6	13.8	器外面：にぶい黄橙 10YR6/4 30%、灰 N4/ 25%、灰 7.5Y3/ 25% 器内面：にぶい黄橙 10YR5/4 60%、灰黄 2.5Y7/2 40%	①細砂：少量石英・白色粒定粗砂：多量石英・チャート・黒色鉱物及び小石：多量チャート・結晶片岩	硬質	口辺～底	ほぼ完形	縄之内２式
第20図	14689	深鉢	(27.3)	—	(19.4)	—	器外面：灰 5YR6/1 50%、にぶい黄橙 10YR7/3 50% 器内面：暗灰 10YR3/1 50%、にぶい黄橙 10YR7/3 50%	①細砂：多量チャート・多量黒色粒・多量赤褐色粒定粗砂・多量チャート・多量赤褐色粒・中量白色粒	硬質	口辺～胴中	2/3	加曽利 B1式？
第20図	14858	小形深鉢	(15.1)	7.8	19.2	—	器外面：浅黄橙 10YR8/3 30%、にぶい褐 60% 黒褐 7.5YR3/1 10% 器内面：にぶい黄橙 10YR7/2 80%、褐灰 10YR6/1 20%	①細砂：多量チャート・多量黒色粒・多量白色粒定粗砂：微量チャート	硬質	口辺～底	1/3	加曽利 B1式
第20図	14263	深鉢	(15.0)	—	(17.2)	14.2	器外面：灰黄褐 10YR5/2 50% 黒 10YR1.7/1 40% にぶい黄橙 10YR6/3 10% 器内面：黒褐 10YR3/2 70% にぶい黄橙 10YR7/3 30%	①細砂：多量石英・黒色鉱物・白色粒・結晶片岩定粗砂：微量チャート	硬質	口辺～底	2/3	加曽利 B1式
第20図	13556	ミニチュア	4.5		(1.6)		器外面：にぶい橙5YR7/3 器内面：灰白5YR8/2	①細砂：中量定粗砂：中量	硬質	口辺～胴	1/2	
第20図	13576	ミニチュア		(3.3)	(1.0)		器外面：明褐灰5YR7/2 器内面：灰白5YR8/2	①細砂：多量	硬質		ほぼ完形	

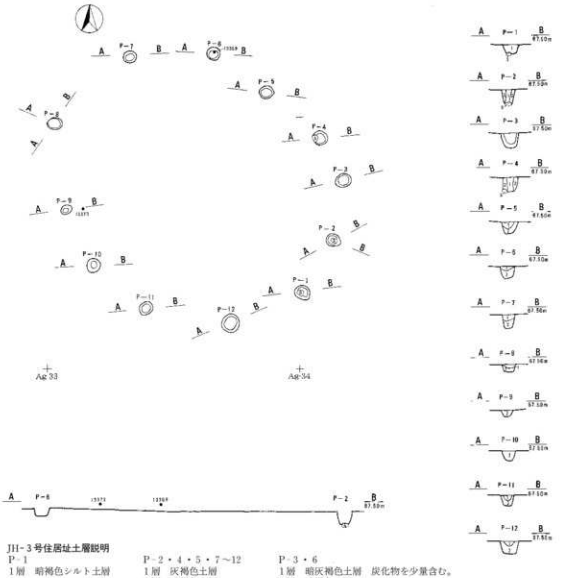
図版番号	No.	器種	全長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	備考
第20図	14040	土錘	5.5	1.8	1.8	21.7	



第21図　JH－２・３号住居址出土遺物(1)

面ともに磨き、外面は荒れている。14263は３単位の波状口縁。口縁端部は内湾し、口唇部に刻みを施す。外面は４条の横位沈線を巡らす。沈線は幅広でやや深め。口縁内側に庇状の張り出しをもつ。庇の上の部分に連続円形刺突文。内面は３条の横位沈線を巡らす。沈線間は平坦である。上から１条目と２条目の沈線間に斜めの刻みが施される。内外面ともに磨き。第21図13349は口縁部破片。口唇に矢羽根状刻目文、内側に沈線が１条、横位の紐状隆線に刺突刻目文、８字貼付文。13349・13343・8368・13853は沈線で弧状に区画され、縄文が充塡される横帯区画文。13329は菱形幾何学文。13170・13350・14377・13446は幾何学文。何れも堀之内２式の新段階期に包括されるものと思われる。13216は底部片。底面に網代痕（一本越え、一本替り、一本送り）。

JH－２号住居出土遺物は、13707や土器片など堀之内２式新段階のものが多いが、14858・14263など３単位波状口縁の加曽利Ｂ１式期の小形深鉢が混在している。出土レベルもやはり、堀之内２式のものが下位で、加曽利Ｂ１式のものが上位から出土する傾向が看取され、上下に幅を持って遺物が分布している状況から、分離できる可能性がある。しかしながら、どちらが遺構に伴うものであるかは判別できない。



第22図　JH-3号住居址

JH-3号住居址（第22図）

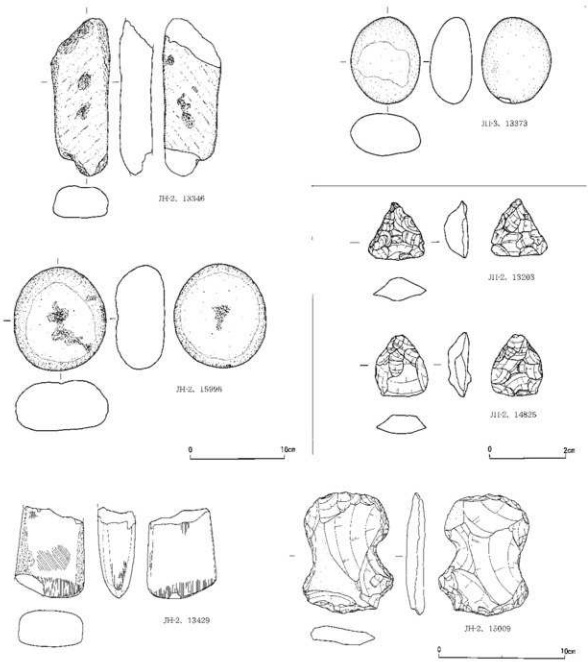
位置　Ae-33・34／Af-33・34グリッド　**規模形状**　住居壁未検出。　**覆土**　不明。　**炉址**　不明。

3号住居址は調査区を掘り下げ、プラン確認をおこなったが、炉址及び住居プランは確認されず、12箇所ピットが直径約3.7m～4.8mの長円形に0.8m～1.4mの間隔でめぐることから、住居址の痕跡と判断したものである。JH-2と東側1/3が重複するが、切り合い関係等は不明である。

遺物分布　確認面上、標高67.40m付近に遺物の分布が見られるが、遺物は少なく。図示できたものは2点である。

出土遺物（第21図下13359、第23図上13373）

13359は胴部片。沈線で弧状区画文を施す。充塡縄文は見られない。厚手で余り屈曲がみられないことで、頸部に括れを持つ堀之内2式期の深鉢形土器と思われる。



第23図　JH－2・3号住居址出土遺物(2)

第９表　JH－２・３号住居址出土石器観察表

図版番号	遺物№	器　種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重　さ(g)	X	Y	H	石　材	備　考
第23図	13346	凹　石	(16.6)	6.3	3.6	570	29665.646	−67346.739	67.487	結晶片岩	
第23図	15996	磨　石	11.0	9.9	5.3	880	29663.432	−67344.997	67.517	安　山　岩	被熱
第23図	13373	磨　石	9.2	7.4	4.5	430	29665.550	−67351.432	67.478	凝灰質砂岩	JH－3
第23図	13203	石　鏃	1.5	1.5	0.6	1.0	29665.423	−67348.192	67.482	黒　曜　石	
第23図	14825	石　鏃	1.7	1.4	0.6	1.2	29662.502	−67346.882	67.499	黒　曜　石	
第23図	13429	磨製石斧	(7.2)	5.5	3.0	200	29665.311	−67345.275	67.564	安　山　岩	
第23図	15009	打製石斧	9.6	7.2	1.5	120	29664.627	−67343.927	67.311	硬質泥岩	

1号配石遺構（第24図）

位置　Ae-13・14グリッド　**規模形状**　大きな人頭大の礫を中心に不整列であるが約2.8m×1.2m方形様に拳大礫が集中する。1/4程度が調査区外。　**覆土**　約15cm～20cmの不整形の掘り方を持つ。詳細不明。

1号配石遺構では整然と礫を配列するのではなく散漫に礫を配した状態を呈している。礫の大きさや形状も不揃いである。中央の人頭大の長方形礫は、シンボリックな観を与え、立石の可能性もあるが、明確でない。

遺物分布　遺物は配石に混入した敲石・凹石（第27図上）2点のみである。

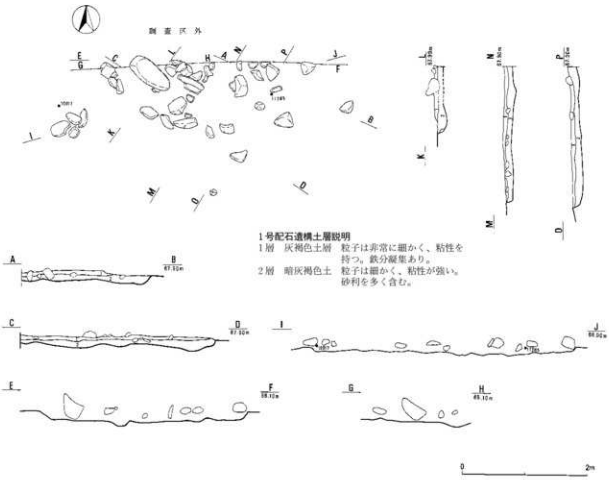
出土遺物（第27図11385・10917）

11385は両端に顕著な敲き痕を持つ円形の敲石。10917は細長く、杓子形の礫の中央表裏面に敲き凹があり、表面大小2箇所、裏面大1箇所小2箇所で、下端部に敲きつぶれが見られる。検出層位や周辺の状況からでは縄文後期堀之内2式期の所産と推測される。

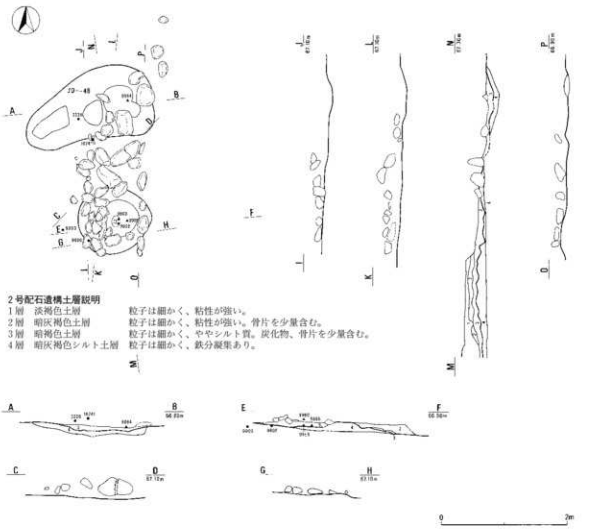
2号配石遺構（第25図）

位置　Ae・Af-54グリッド　**規模形状**　幅約1m×長さ3mの方形に拳大の礫の長軸を南北に揃えるように配される。配石の内側は礫が西側に偏り、北側にはやや大形の礫が散漫に配される。　**覆土**　3層を覆土とする不整形の掘り方を持つ。底面は凹凸があり、しっかりとした堀り方を伴わないが北側と南側にやや深い掘り込みを持つ。

遺物分布　遺物は配石に混入した土器片（第26図）と石核（第27図下27）。北側及び南側の深くなる部分に骨片が数片確認されている。骨片については分析では人骨ではなく、一部ニホンジカという同定結果を得ている。



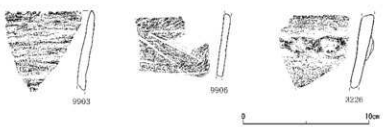
第24図　1号配石遺構



第25図　2号配石遺構

出土遺物（第26図9903・9906・3226・第27図27・29）

27は大形の板状礫の縁辺を交互剝離するもので、上部及び左側縁にかけてやや微細な石核調整が行われる。9903は平縁、口唇部に刻みを持つ無紋土器片。9906はZ字状幾何学文。3226は紐線文。堀之内2式期の範疇で理解されると思われる。

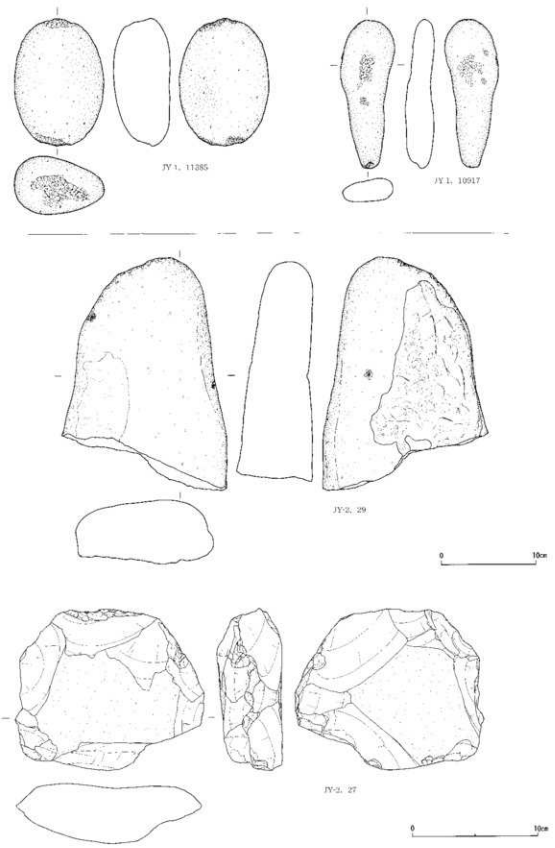


第26図　2号配石遺構出土遺物

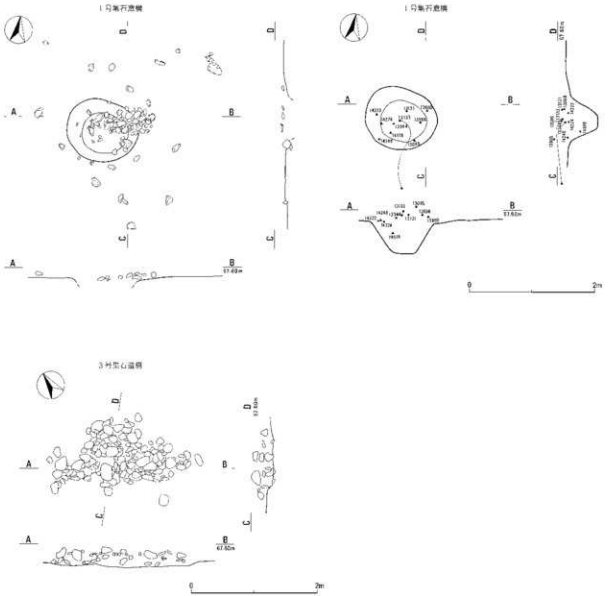
2号配石遺構は長方形の配石で、獣骨の出土など動物を供物とする儀礼祭祀的な性格が想定できると思われる。1号配石についても、同様な配石形態をもつものと考えられると思われる。

第10表　1・2号配石遺構出土石器観察表

図版番号	遺構名	遺物No.	器種	全長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	X	Y	H	石質	備考
第27図	JY-1	11385	敲石	13.5	9.6	6.2	1020	29667.176	−67425.453	67.388	流紋岩	
第27図	JY-1	10917	凹石	15.8	5.8	3.2	340	29666.994	−67428.836	67.740	安山岩	
第27図	JY-2	29	凹石	(24.8)	17.5	8.1	4380	—	—	—	安山岩	
第27図	JY-2	27	石核	12.8	15.1	5.2	1200	—	—	—	硬質泥岩	



第27図　1・2号配石遺構出土遺物



第28図　1・3号集石遺構

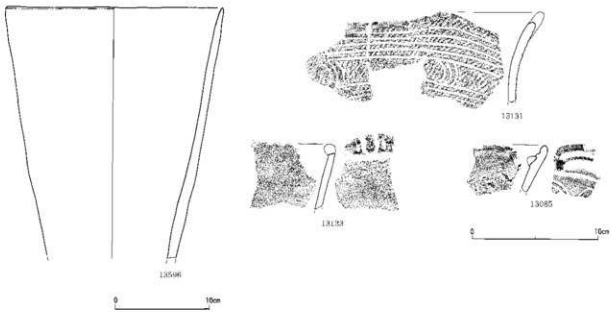
1号集石遺構（第28図上）

位置　Ae-35グリッド。JH-1号住居址内。　**規模形状**　集石は約0.25m×0.6m範囲に集中し、周囲に散漫に礫が分布する。礫集中の中心からずれて直径約1mの円形の深い掘り込みが確認されている。　**覆土**　不明。

1号集石遺構では、集石の礫は円礫で被熱赤化、はじけ、割れは余り見られない。集石に混在する遺物は加曽利B1式期、土坑内下では堀之内2式期の土器片が出土している点で、集石部分と土坑部分とでは近接するが時期差があり、それぞれ別の遺構である可能性がある。その点で、土坑については JH-1号住居址に伴う可能性も視野に入れる必要があると思われる。

出土遺物（第29図）

13596は平縁。無文粗製土器の大破片で集石中央部から出土している。13131は外反する波状口縁で地文縄文に平行沈線を5条巡らし、3本の弧状文で区切る。13133・13085は波状口縁破片。口唇内側に沈線による玉抱き文等が施文される。13596・13131は加曽利B1式期に比定されると思われる。土坑内からは獣骨片（▲）が出土している。



第29図　1号集石遺構出土遺物

第11表　1号集石遺構出土土器観察表

図版番号	実測No.	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	胴部最大径	色調	胎土	焼成	残存部位	残存率	時期・型式	備考
第29図	13596	深鉢	23.0	—	(26.4)	—	器外面：にぶい橙7.5YR7/3　50%，褐灰7.5YR5/1　50% 器内面：にぶい褐7.5YR6/3　20%，明褐灰7.5YR7/2　80%	①細砂：少量 ②粗砂：多量 ③小石：少量	硬質	口辺～胴下	1/4		無紋

3号集石遺構（第28図下）

位置　Ae・Af-32グリッド。　**規模形状**　集石は半円形の範囲に集中分布する。　**覆土**　不明。

3号集石遺構では、集石の構成礫は円礫で大きさは様々で、被熱赤化、はじけ、割れは見られない。遺物が見られず、礫が半円形に集中すること、堀り方が明確でないことを考慮すると集石遺構として報告するが、確認面下に礫層があり、浮礫、倒木痕の可能性が高いと思われる。

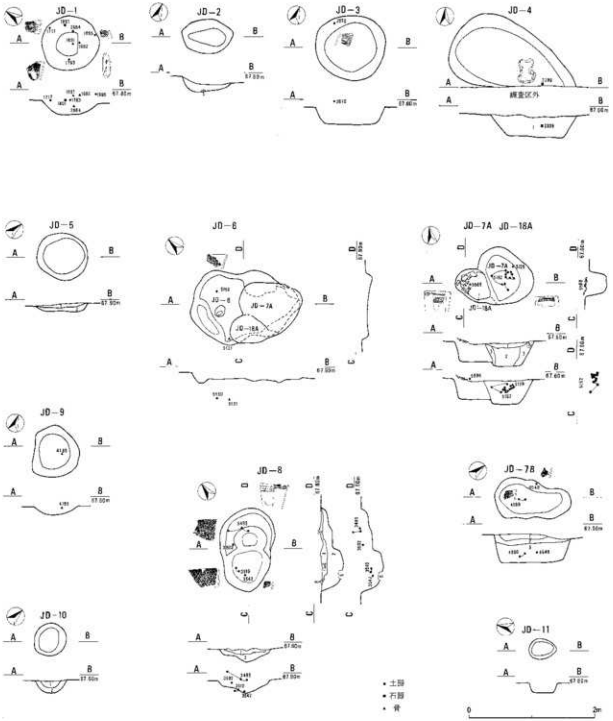
出土遺物　なし。

2）土坑・ピット

検出された土坑は75基で、住居址に関係する土坑も含まれる。遺構の検出状況が困難な部分が多いため、覆土の状況などから、遺構相互を関係づけることは困難である。出土遺物によって時代時期をある程度予測することは可能であるが、多の遺構や包含層の状況と同じく大凡、縄文時代後期堀之内２式期～加曽利Ｂ１期までの遺構に集約される。

第12表　土坑計測表(1)

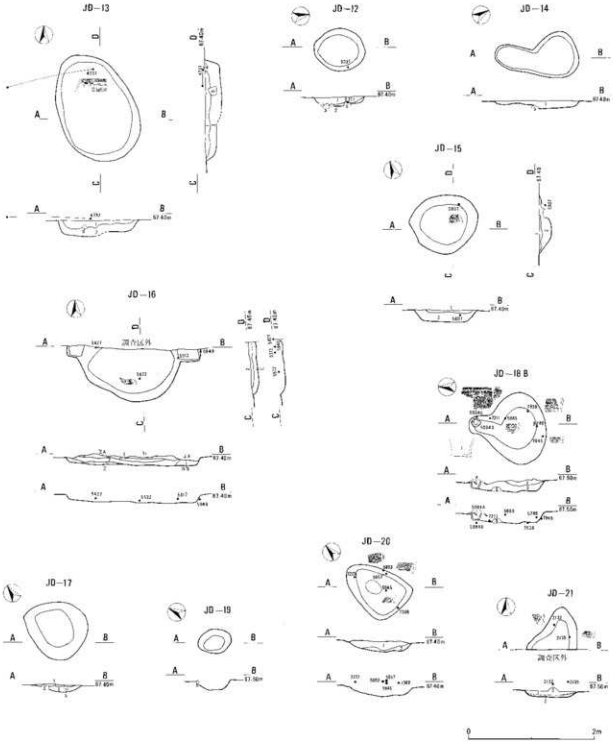
図版番号	遺構名	グリッド	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)
第30図	JD-1	Ag・Ah-19	91	85	22
第30図	JD-2	Ah-19	80	51	24
第30図	JD-3	Ag・Ah-16	110	102	28
第30図	JD-4	Ag・Ah-15	200	104	36
第30図	JD-5	Ag-10	81	72	14
第30図	JD-6	Ag-9・10	(175)	(100)	16
第30図	JD-7A	Ag-9・10	97	65	40
第30図	JD-18A	Ag-9・10	78	45	33
第30図	JD-7B	Ah-9	122	62	44
第30図	JD-8	Ag-33	132	80	36
第30図	JD-9	Ah-19	82	72	15
第30図	JD-10	Ag-34	52	50	22
第30図	JD-11	Ag-35	45	32	15
第31図	JD-12	Af-4	80	68	16
第31図	JD-13	Ae・Af-3・4	180	120	27
第31図	JD-14	Ag-6・7	133	75	12
第31図	JD-15	Ae-4・5	109	93	20
第31図	JD-16	Ae-4・5	210	83	12
第31図	JD-17	Ae-4	102	90	10
第31図	JD-18B	Ag-4	124	114	20
第31図	JD-19	Ag-4	54	40	16
第31図	JD-20	Ag-5	102	70	16
第31図	JD-21	Ag-3	89	51	11
第32図	JD-22	Ae-5	37	33	29
第32図	JD-23	Ag-5・6	44	34	25
第32図	JD-24	Ag-4	141	81	13
第32図	JD-25	Ag-4	30	28	9
第32図	JD-30	Af-35・36	133	128	16
第32図	JD-31	Ae-11・12	72	67	50
第32図	JD-32A	Af-1	73	66	20



土坑土層説明

JD－3
覆土　暗褐色土層　小石を含む。炭化粒を少量含む。
JD－4
1層　暗褐色土層　小石を含む。炭化粒を少量含む。
JD－5
1層　灰色粘質土層
2層　灰褐色シルト土層
JD－6
覆土　灰色粘質土層
JD－7A
1層　暗緑灰色土層　粒子細かい。粘性非常に強い。鉄分凝集がみられる。
2層　暗褐色土層　炭化物を少量、小砂利を含む。
3層　暗褐色土層　砂利を多く含む。しまりはなし。
JD－7B
1層　灰色粘質土層
2層　灰色砂質土層
3層　灰褐色粘質土層
JD－8
1層　黒褐色土層　炭化物を多量に含む。
2層　暗褐色土層　炭化物を含まない。
JD－10
1層　黒褐色土層　炭化物を多量に含む。
2層　暗褐色土層　炭化物を含まない。
JD－11
1層　暗褐色土層　炭化物を含まない。

第30図　土坑(1)



土坑土層説明

JD-12
1層　灰色粘土層　炭化物を含む。

JD-13
1層　灰色粘土層　　炭化物を少量含む。
2層　褐色砂質土層　小石を多く含む。炭化物をやや多く含む。

JD-14
1層　灰色粘土層

JD-15
1層　暗赤褐色土層　　焼土。
2層　暗褐色粘質土層

JD-16
1層　赤褐色土層　　焼土。
2層　暗褐色粘質土層

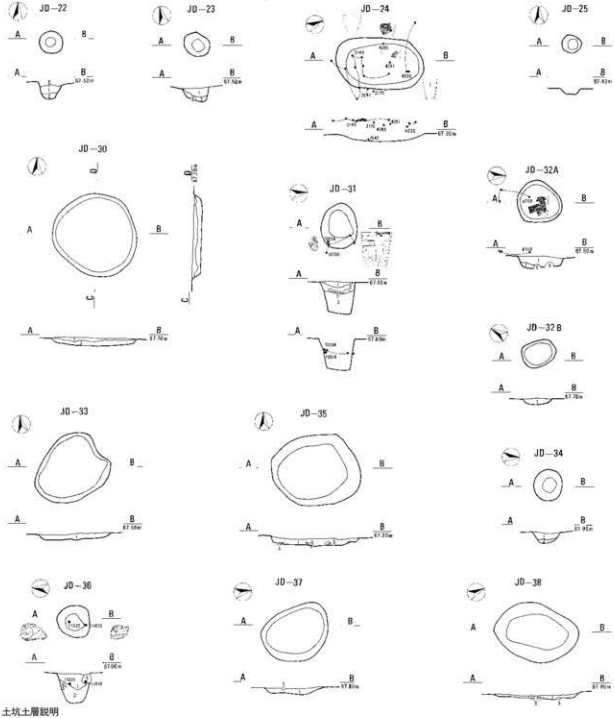
JD-17
1層　暗赤褐色土層　焼土。
2層　灰色粘質土層　炭化物を極少量含む。

JD-18 B
1層　黒灰色粘土層　炭化物を多量に含む。
2層　暗褐色粘土層　炭化物を少量含む。

JD-20
1層　黒灰色粘土層　炭化物を多く含む。
2層　灰色粘土層　　炭化物を少量含む。

JD-21
1層　灰色粘質土層　炭化物を少量含む。
2層　褐色粘質土層

第31図　土坑(2)



土坑土層説明

JD-22
1層　暗灰褐色土層　炭化物を僅かに含む。
2層　暗褐色シルト土層

JD-23
1層　暗灰褐色土層　炭化物を僅かに含む。
2層　暗褐色シルト土層

JD-30
1層　暗灰褐色土層
2層　暗褐色シルト土層

JD-31
1層　灰褐色土層　粒子は細かく、炭化物を僅かに含む。粘性あり。
2層　暗灰褐色土層　粒子は細かく、炭化物を少量含む。鉄分凝集あり。粘性あり。
3層　暗褐色土層　粒子は粗く、砂利を含む。粘性なし。

JD-32A
1層　灰褐色土層　粒子は細かく、炭化物を少量含む。鉄分凝集あり。粘性あり。
2層　暗褐色土層　粒子は細かく、炭化物を僅かに含む。鉄分凝集あり。粘性あり。

JD-32B
1層　暗褐色土層　粒子は細かく、焼土・炭化物を少量含む。粘性あり。

JD-33
1層　灰褐色土層　粒子は細かく、炭化物を少量含む。鉄分凝集あり。粘性あり。

JD-34
1層　灰褐色粘質土層　粒子は細かい。
2層　暗褐色土層　粒子はやや粗く、上部に炭化物を含む。

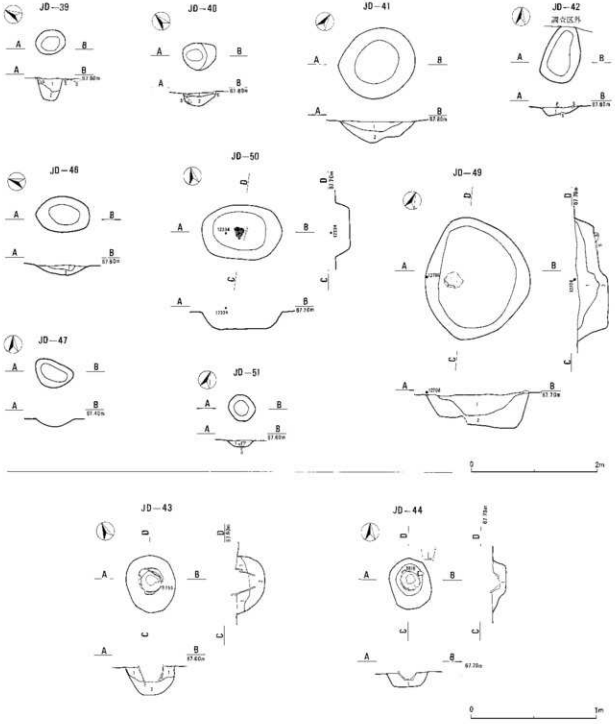
JD-35
1層　暗灰褐色土層　炭化物を少量含む。

JD-36
1層　灰褐色土層
2層　暗灰褐色土層　炭化物を少量含む。

JD-37
1層　暗灰褐色土層　炭化物を僅かに含む。

JD-38
1層　暗灰褐色土層　炭化物を僅かに含む。

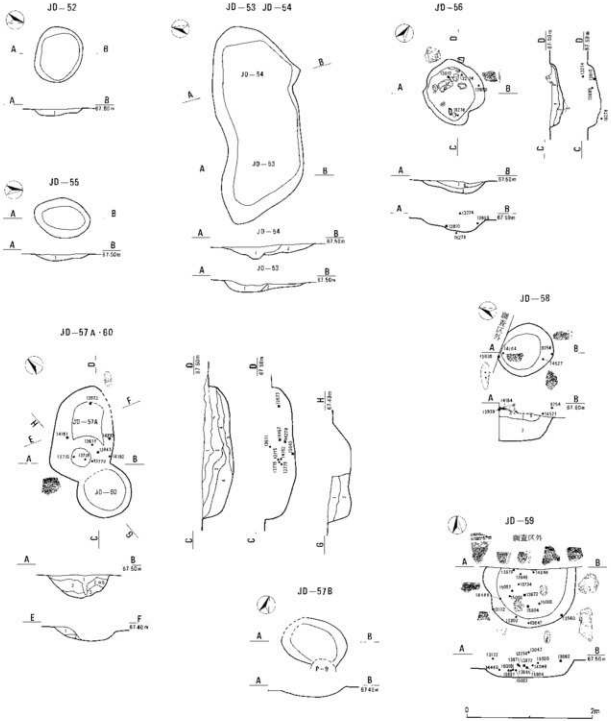
第32図　土坑(3)



土坑土層説明

JD-39
1層　灰褐色土層　　炭化物を僅かに含む。
2層　暗灰褐色土層　炭化物を少量含む。
JD-40
1層　灰褐色土層　　炭化物を僅かに含む。
2層　暗灰褐色土層　炭化物を少量含む。
JD-41
1層　暗灰褐色粘質土層　炭化物を僅かに含む。
2層　暗褐色土層　　炭化物を僅かに含む。
JD-42
1層　暗褐色土層　炭化物を少量含む。
JD-43
1層　灰褐色粘質土層
2層　暗褐色粘質土層
JD-44
1層　暗褐色土層
JD-46
1層　灰褐色土層　炭化物を僅かに含む。
2層　暗褐色土層
JD-49
1層　黄灰褐色粘土層　小砂利を含む。炭化物を少量含む。
2層　暗褐色土層　　砂利を含む。炭化物を少量含む。
JD-50
覆土　黄灰褐色粘土層
JD-51
1層　黄灰褐色粘土層

第33図　土坑(4)



土坑土層説明

JD-52
1層　黄灰褐色粘土層

JD-53
1層　灰褐色粘質土層
2層　暗褐色土層　　砂利を含む。

JD-54
1層　灰褐色粘質土層
2層　暗褐色土層　　砂利を含む。

JD-55
1層　灰褐色粘質土層

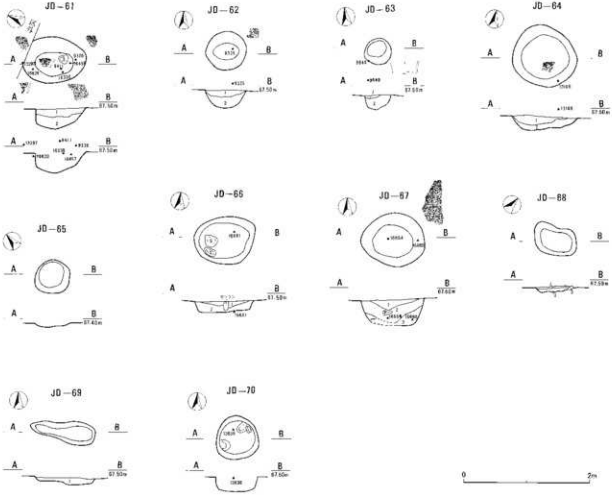
JD-56
1層　黒褐色土層　炭化物を少量に含む。
2層　暗褐色土層　炭化物を若干含む。

JD-57A
1層　灰褐色粘質土層
2層　暗褐色土層　　炭化物、骨片を多量に含む。
3層　暗褐色シルト土層
4層　黒褐色土層　　炭化物、骨片を少量含む。
5層　暗褐色シルト土層　炭化物、骨片を僅かに含む。

JD-58
1層　暗褐色土層　炭化物を少量含む。
2層　灰褐色土層　炭化物を僅かに含む。

JD-60
1層　黒褐色土層　炭化物をやや多く含む。
2層　暗褐色土層　炭化物を僅かに含む。

第34図　土坑(5)

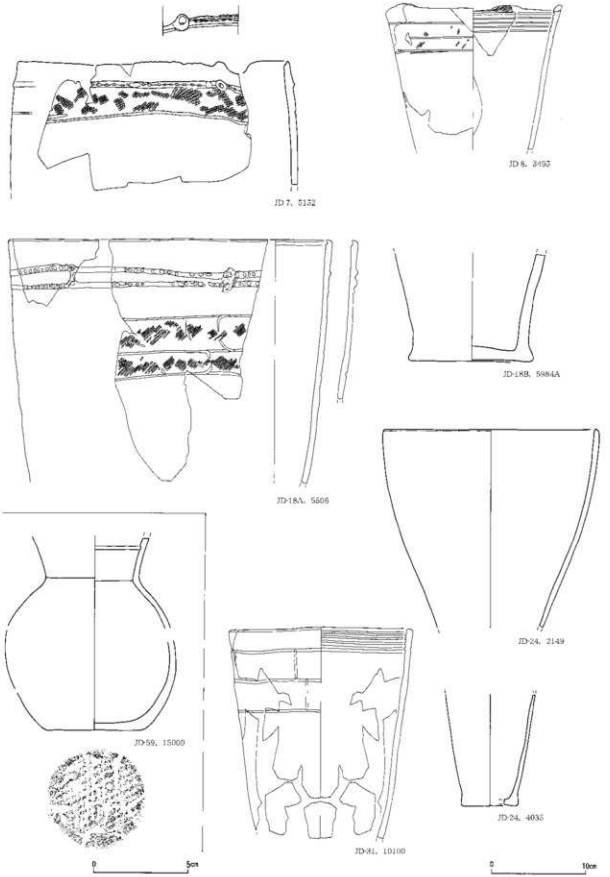


土坑土層説明

JD-61
1層　暗灰褐色土層　　炭化物を少量含む。やや粘性あり。
2層　暗褐色シルト土層　炭化物を僅かに含む。
JD-62
1層　暗灰褐色土層　　炭化物を少量含む。やや粘性あり。
2層　暗褐色シルト土層　炭化物を僅かに含む。
JD-63
1層　暗灰褐色土層　　炭化物を少量含む。やや粘性あり。
2層　暗褐色シルト土層　炭化物を僅かに含む。
JD-64
1層　暗灰褐色土層　　炭化物を少量含む。やや粘性あり。
2層　暗褐色シルト土層　炭化物を僅かに含む。
JD-65
覆土　黒灰褐色土層　炭化物をやや多く含む。

JD-66
1層　黒褐色土層　炭化物を少量含む。
2層　暗褐色土層　炭化物を僅かに含む。
JD-67
1層　黒褐色土層　炭化物をやや多く含む。
2層　暗褐色土層　炭化物を少量含む。
3層　灰褐色土層　炭化物を僅かに含む。
JD-68
1層　灰色粘質土層　　炭化物を少量含む。
2層　灰褐色粘質土層　炭化物を僅かに含む。
JD-69
1層　灰色粘質土層　　炭化物を少量含む。
2層　灰褐色粘質土層　炭化物を僅かに含む。

第35図　土坑(6)



第36図　土坑出土遺物(1)

第13表　土坑計測表(2)

図版番号	遺構名	グリッド	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)
第32図	JD-32B	Af-9	54	41	10
第32図	JD-33	Af-1	108	95	12
第32図	JD-34	Af-11	50	45	19
第32図	JD-35	Ae-9・10	145	120	17
第32図	JD-36	Af-11・12	55	51	49
第32図	JD-37	Ae-10	110	85	11
第32図	JD-38	Ae・Af-10・11	135	94	12
第32図	JD-39	Af-10	47	39	34
第33図	JD-40	Af-10	52	43	24
第33図	JD-41	Af-11	120	107	33
第33図	JD-42	Ae-10	90	56	14
第33図	JD-43	Ae-37	45	38	23
第33図	JD-44	Af-36	40	31	13
第33図	JD-46	Ae-10	85	56	15
第33図	JD-47	Ag-2	59	41	14
	JD-48	欠番			
第33図	JD-49	Af-19・20	193	165	56
第33図	JD-50	Af-21・22	126	85	27
第33図	JD-51	Ag-24	41	37	10
第34図	JD-52	Ah-23	87	72	14
第34図	JD-53	Af・Ag-25・26	314	126	18
第34図	JD-54	Af・Ag-25・26			23
第34図	JD-55	Af-25	90	63	10
第34図	JD-56	Af-36	100	97	20
第34図	JD-57A	Ae・Af-34	152	96	38
第34図	JD-60	Ae・Af-34	85	75	47
第34図	JD-57B	Af-35	102	70	16
第34図	JD-58	Ae-35・36	85	82	39
第34図	JD-59	Ae-34	147	95	27
第35図	JD-61	Ae-35	100	72	33
第35図	JD-62	Ae-35	65	60	28
第35図	JD-63	Ae-36	45	40	24
第35図	JD-64	Af-36	100	93	22
第35図	JD-65	Ae-37	60	53	6
第35図	JD-66	Af・Ag-32・33	100	75	20
第35図	JD-67	Af-32	101	82	44
第35図	JD-68	Ag-27	75	45	8
第35図	JD-69	Ag-26	104	35	12
第35図	JD-70	Af-33	69	65	24
第35図	JD-71	Af-27・28	102	70	21
第35図	JD-72	Af-28	150	60	28
第35図	JD-73	Af・Ag-41	56	54	23

土坑出土遺物（第36図～第42図）

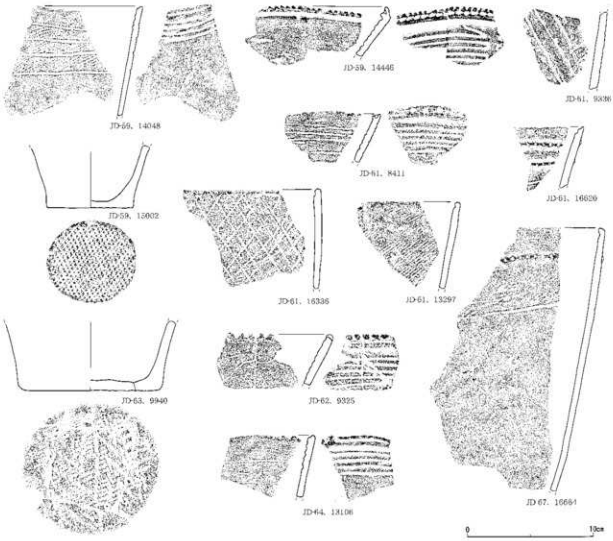
第36図 JD-7，5152は平縁で、胴がやや張る器形を呈する。口唇に沈線を巡らす。器体表面に環状貼付をもつ一条の刻目隆帯と沈線を巡らし、充填縄文を施文する。堀之内２式。JD-8，3495は口縁に２個突起を有する。突起内面に沈線による斜目が施文される。口唇部に１条の沈線を巡らせる。外面は縄文ＬＲを施文後３条の沈線で区画する。（縄文は荒れて不明瞭）。内面は５条の沈線を巡らせる。内外面ともにかなり荒れている。部分的に磨きの痕跡が認められる。加曽利Ｂ１式。JD-18A，5506は平縁。外面は口縁部に押圧を加えた２本の横位隆帯を巡らし、「８」字状貼付文を付す。中位は２条の横位沈線を巡らし、「し」字状の区切り文を施す。その後、縄文ＬＲを充填している。内面は１条の横位沈線を巡す。内外面ともに磨き。堀之内２式。JD-18B，5984Aは底部。無文。JD-31，10100は平縁。外面は３条の横位沈線を巡らし、縦位沈線の区切り文を施文する。内面は５条の横位沈線を巡らす。内面磨き。外面ナデ、磨き。加曽利Ｂ１式。JD-24，2149は無文で胴がやや張りながら開く器形の粗製土器。加曽利Ｂ１式。JD-24，4035は小形深鉢。加曽利Ｂ１式。JD-59，15000は小形壺。口縁内側に沈線を

第14表　土坑出土土器観察表

図版番号	No.	遺構名	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	胴最大径	色調	胎土	焼成	残存部位	残存率	時期・型式	備考
第36図	5152	JD-7	深鉢	(28.4)		(13.0)		器外面：にぶい橙7.5YR5/3 器内面：にぶい橙7.5YR6/3	①細砂：多量②粗砂：中量③小石：微量	硬質	口辺～胴	1/4	堀之内２式	
第36図	3495	JD-8	深鉢	(18.2)	—	(15.4)	—	器外面：橙 暗赤褐 5YR2/3 60%、明赤褐 5YR5/6 30% 器内面：橙 暗赤褐 5YR2/3 70%、明赤褐 5YR5/6 30%	①細砂：多量 赤褐色粒・中量チャート・黒色粘物質細砂：多量白色粒・多量赤褐色粒	硬質	口辺～胴中	1/3	加曽利B1式	
第36図	5506	JD-18A	深鉢	(41.2)	—	(26.0)	—	器外面：にぶい黄橙 10YR2/2 60%、灰白 10YR7/1 30%、褐灰 10YR4/1 20% 器内面：褐灰 10YR6/1 80%、灰黄 2.5YR8/2 20%	①細砂：多量チャート・中量黒色粒・少量白色粒②粗砂：少量白色粒・少量黒色粒・少量石英	硬質	口辺～胴	1/3	堀之内２式	
第36図	5984A	JD-18B	深鉢	—	(13.0)	(11.6)	—	器外面：にぶい橙7.5YR6/4 器内面：にぶい橙7.5YR7/3	①細砂：多量②粗砂：少量	硬質	胴下～底	1/3		
第36図	10100	JD-31	深鉢	(19.5)	—	(22.2)	—	器外面：明赤褐 7.5R5/2 20%、赤 10R6/4 20%、赤黒 2.5YR2/1 10% 器内面：暗赤灰 10YR3/1 90%、赤褐 10YR4/4 10%	①細砂：中量チャート・中量白色粒②粗砂：多量チャート・中量白色粒・中量黒色粘物・中量赤褐色粒	硬質	口辺～胴	1/3	加曽利B1式	
第36図	2149	JD-24	深鉢	22.4	—	(21.0)	—	器外面：灰褐 7.5YR5/2 50%、褐灰 2.5YR5/1 50% 器内面：褐灰 5YR4/1	①細砂：多量②粗砂微量	硬質	口辺～胴下	1/2		
第36図	4035	JD-24	小形深鉢	—	(6.2)	(12.0)	—	器外面：明褐7.5YR5/6 10%、黒褐7.5YR3/1 90% 器内面：褐7.5YR4/4	①細砂：多量②粗砂多量	硬質	口辺～胴	1/4	加曽利B1式	
第36図	15000	JD-59	ミニチュア	—	5.0	(10.3)	(9.0)	—	—	—	口辺～胴	1/3		

第37図　土坑出土遺物(2)

第38図　土坑出土遺物(3)



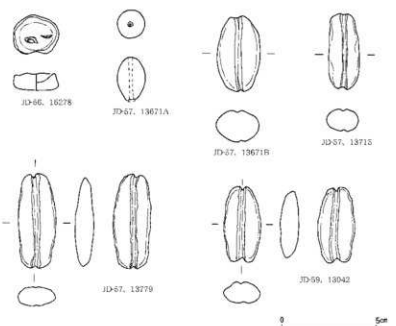
第39図　土坑出土遺物(4)

1条巡らす。底部網代痕。

第37図 JD-1，1695は注口土器片、平行及び斜行沈線文、刺突文で構成される。1717は口縁部破片。内側に1条、表面は2条の平行沈線を巡らし、斜行する沈線で連続三角文を施文する。1783は波状口縁破片。内側に5条沈線を巡らし、表面は平行沈線文。いずれも加曽利B1式期。JD-3，2670は表面無文。内側に沈線と刻目を持つ隆線文。加曽利B1式期。JD-6，5150は「8」字貼付文と沈線による幾何学文。堀之内2式期。JD-7B，4080は刻目を持つ隆線と沈線を巡らし、内側に充填縄文。4546は沈線で囲む渦巻き状文に充填縄文。堀之内2式期。JD-8，3502は鉢形土器片口唇に刻目文。内側に刻目を持つ隆線と沈線を巡らす。加曽利B1式期。3510・3542は沈線斜行・斜格子文加曽利B1～2式期。JD13，4737は口唇に刻目文。内側に連続刺突文と刻目を持つ隆線と沈線を巡らす。加曽利B1式期。JD-15，5807は平行沈線と連続する重弧文。加曽利B1式期。JD-16，5522は沈線と「8」字貼付文。堀之内2式期。JD-18B，5665・5786は地文縄文に平行沈線をめぐらす。7045は地文縄文に斜格子沈線文。5984Bは表面に1条の沈線巡らす。堀之内2式～加曽利B2式期。JD-20，5845は厚手で弧状沈線文。堀之内2式期。5853は段違いや弧状沈線に充填縄文。加曽利B2～3式期。5852は平行沈線を巡らす。JD-21，2132・2135は平行沈線に充填縄文。7439は口縁くの字状に玉抱き沈線文。堀之内2式期。JD-24，4265は弧状沈線に充填縄文。4261は平行沈線に刻目文。堀之内2式～加曽利B1式期。

第38図 JD-32，8759は耳状把手と刻目を持つ隆線を巡らし、「８」字貼付文。弧状沈線の区画文に充填縄文。堀之内２式期。JD-44，9816は底部網代痕。加曽利Ｂ１式期。JD-50，12334は波状口縁破片。内側に波状沈線を巡らす。加曽利Ｂ１式期。JD-56，13809は沈線、充填縄文による幾何学文。堀之内２式期。JD-57，７・14162は沈線、充填縄文による幾何学文。堀之内２式期。JD-58，１は平縁口縁部破片。内側に沈線を巡らし、表面は隆線と沈線、充填縄文。加曽利Ｂ１式期。9754は口唇に連続刺突による穿孔。内側には沈線を巡らし、表面は２条の刻目を持つ隆線が施文される。14164は斜格子文。14527は沈線と充填縄文による幾何学文。堀之内２式～加曽利Ｂ２式期。JD-59，13172は無文。13734は平行沈線にＣ字状区画文、充填縄文。13871は表裏、平行沈線。13945は平行沈線と横位の櫛歯状工具による充填文。15007は口唇刻目文。内側に連続刺突文と平行沈線、その間に微細な刻目文。15009は刻目を持つ隆線に環状貼付文。沈線、充填縄文による幾何学文。堀之内２式～加曽利Ｂ１式期。

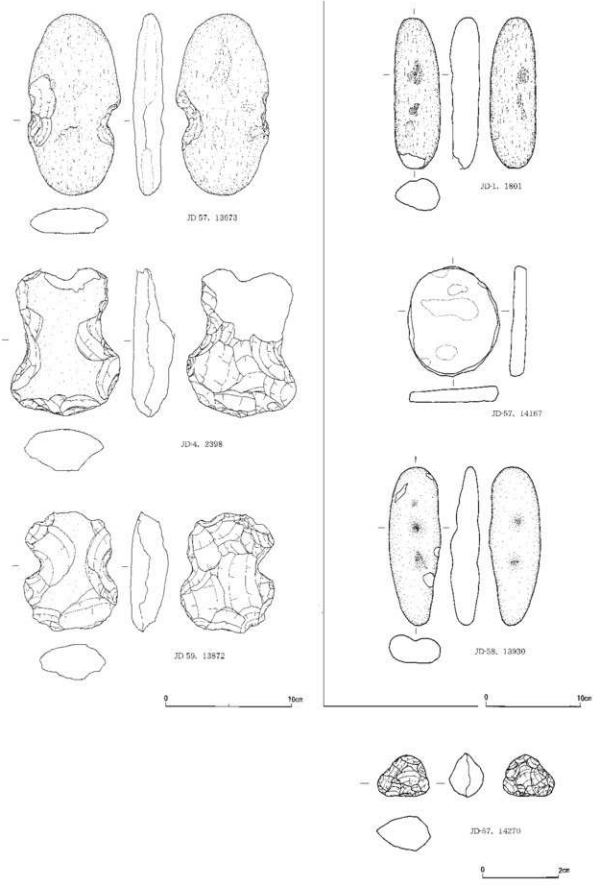
第39図 JD-59，14048は波状口縁破片。内側は口唇に微細な刻目文、平行沈線。表面は平行沈線に充填縄文。14446は口唇に刻目文。内側は沈線による幾何学文に細原体の充填縄文。15002は底部。網代痕。加曽利Ｂ１式期。JD-61，8411は口唇に沈線を巡らし、表面は不規則な平行沈線。裏面は連続刺突文と平行沈線、微細な刻目文を充填。9336は矢羽根状沈線。16620は口唇に沈線、表面に刻目を持つ隆線。16336は斜格子目文。13297はＬＲ縄文。加曽利Ｂ１～Ｂ２式期。JD-62，9325は口唇に刻目文。内側に平行沈線と細刻目文。加曽利Ｂ１期。JD-63，9940は底部。網代痕。JD-64，13106は内側は平行沈線と細刻目文。表面は平行沈線。加曽利Ｂ１式期。JD-67，16664は刻目を持つ隆線に沈線、充填縄文。堀之内２式期。



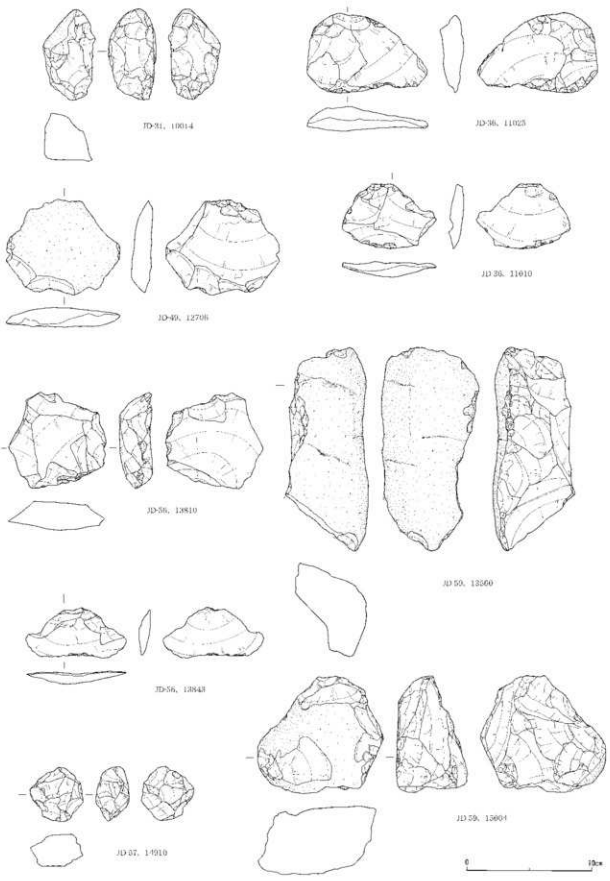
第40図　土坑出土遺物(5)

第15表　土坑出土土製品観察表

図版番号	遺物No.	遺構名	器　種	全　長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重　さ(g)	色　調	胎　土	焼成	残存率
第40図	16278	JD-56	ミニチュア	2.2	2.0	0.9	2.4	器外面：橙7.5YR7/6 器内面:橙7.5YR7/6	①細砂：多量	硬質	完形
第40図	13671A	JD-57	土　玉	2.3	1.5	1.6	4.7	橙7.5YR6/6	①細砂：多量	硬質	完形
第40図	13671B	JD-57	土　錘	4.0	2.3	1.6	14.2	橙7.5YR6/6	①細砂：多量③小石：多量	硬質	完形
第40図	13715	JD-57	土　錘	4.0	1.7	1.1	9.1	にぶい褐7.5YR5/4	①細砂：多量②粗砂：少量	硬質	完形
第40図	13779	JD-57	土　錘	5.0	2.0	1.0	11.8	橙7.5YR6/6	①細砂：多量	硬質	完形
第40図	13042	JD-59	土　錘	4.0	2.0	1.2	9.1	橙7.5YR6/6	①細砂：多量	硬質	完形



第41図　土坑出土遺物(6)



第42図　土坑出土遺物(7)

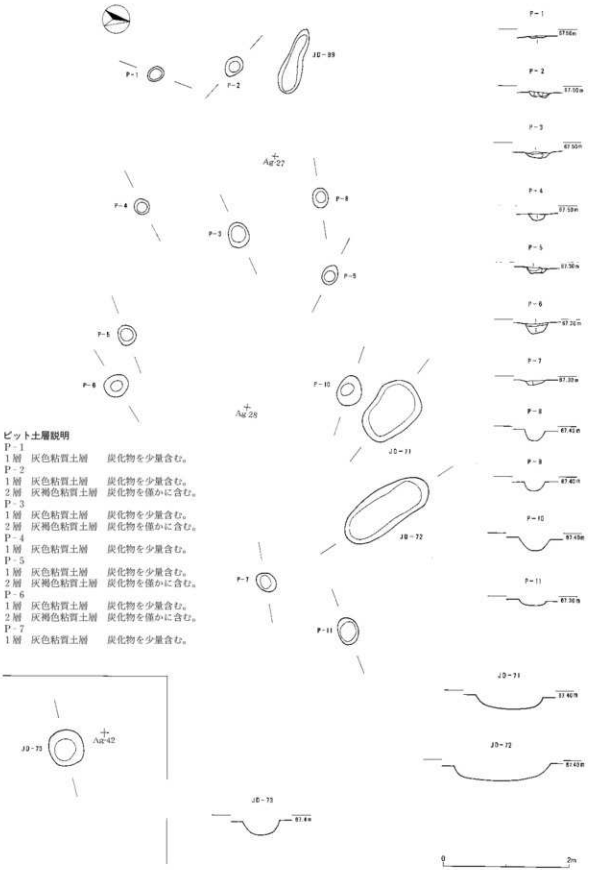
第16表　土坑出土石器観察表

図版番号	遺構名	遺物No.	器　種	全　長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重　さ(g)	X	Y	H	石　質	備　考
第41図	JD-57	13673	石　錘	14.4	7.4	2.4	320	29665.234	−67344.039	67.425	結晶片岩	
第41図	JD-1	1801	凹　石	15.9	5.0	3.4	430	29657.118	−67406.485	67.633	結晶片岩	
第41図	JD-4	2398	打製石斧	(11.8)	8.7	3.3	320	29656.493	−67420.611	67.489	頁　岩	
第41図	JD-57	14167	砥　石	11.7	9.9	1.9	305	29665.120	−67344.741	67.437	閃　緑　岩	
第41図	JD-59	13872	打製石斧	9.5	7.5	3.0	230	29666.821	−67346.592	67.334	硬質泥岩	
第41図	JD-58	13930	凹　石	16.8	5.5	3.1	220	29667.213	−67340.065	67.507	凝灰質砂岩	
第41図	JD-57	14270	石　鏃	1.1	1.4	0.9	1.2	29664.636	−67344.329	67.355	黒　曜　石	
第42図	JD-31	10014	石　核	7.2	4.2	3.8	120	29666.278	−67435.530	67.231	赤　玉	
第42図	JD-36	11025	スクレイパー	6.3	9.6	2.0	100	29663.601	−67435.927	67.367	硬質泥岩	
第42図	JD-49	12706	スクレイパー	7.6	9.0	1.6	120	29662.865	−67405.056	67.659	硬質泥岩	
第42図	JD-36	11010	スクレイパー	5.2	7.5	1.3	40	29663.371	−67435.959	67.416	黒色頁岩	
第42図	JD-56	13810	石　核	7.6	7.8	2.7	180	29661.810	−67337.187	67.303	硬質泥岩	
第42図	JD-57	13843	スクレイパー	4.0	8.0	1.0	20	29664.649	−67344.655	67.221	砂　岩	
第42図	JD-59	13560	石　核	16.2	6.6	7.8	760	29666.523	−67346.091	67.402	頁　岩	
第42図	JD-57	14910	石　核	4.3	4.2	7.7	45	29664.758	−67343.855	67.432	赤　玉	
第42図	JD-59	15004	石　核	9.3	10.0	5.7	595	29666.582	−67346.579	67.298	安　山　岩	

ピットはAf・Ag-26～28グリッドに集中分布する。ピットの配列は等間隔、直線的な規則的配置ではなく、P1～10まではばらつきのある台形様な位置関係にある。調査区の特定の範囲に集中することでは遺構と関連付けることができるが、その意味ではピットは浅く掘立柱建物址よりは囲いのような柵列をイメージする方が適当のように思われる。遺物は検出されていない。ピット群の周辺は遺物分布も希薄であり、ピットに関係する遺物は検出されていない。

第17表　ピット計測表

図版番号	遺構名	グリッド	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)
第43図	JP-1	Ag-26	28	22	4
第43図	JP-2	Ag-26	35	26	10
第43図	JP-3	Ag-27	40	33	8
第43図	JP-4	Ag-27	25	24	10
第43図	JP-5	Ag-27	34	29	10
第43図	JP-6	Ag-27・28	39	35	17
第43図	JP-7	Af-28	35	26	7
第43図	JP-8	Af-27	31	24	17
第43図	JP-9	Af-27	32	24	14
第43図	JP-10	Af-27	49	39	20
第43図	JP-11	Af-28	43	32	10



ピット土層説明

P-1
1層　灰色粘質土層　　炭化物を少量含む。

P-2
1層　灰色粘質土層　　炭化物を少量含む。
2層　灰褐色粘質土層　炭化物を僅かに含む。

P-3
1層　灰色粘質土層　　炭化物を少量含む。
2層　灰褐色粘質土層　炭化物を僅かに含む。

P-4
1層　灰色粘質土層　　炭化物を少量含む。

P-5
1層　灰色粘質土層　　炭化物を少量含む。
2層　灰褐色粘質土層　炭化物を僅かに含む。

P-6
1層　灰色粘質土層　　炭化物を少量含む。
2層　灰褐色粘質土層　炭化物を僅かに含む。

P-7
1層　灰色粘質土層　　炭化物を少量含む。

第43図　土坑・ピット(7)

3）遺構外出土遺物の分布

本遺跡の縄文時代包含層での土器出土状況が直立正位のまま出土したり、潰れた状況で、比較的個体がまとまって出土したり、包含層内でも面的に出土している状況が看取され、遺物点数は土器、土器片15,773点、石器類1,172点の合計16,945点である。河川に沖積地であるにも関わらず、遺物も流水ローリングなどで摩滅しているようなものはなく、土坑や住居址などの遺構も確認できるなど、当時の状況がある程度台地上の集落遺跡のように残されているものと考えられる。この点に注目して、調査区内の遺物出土状況を視覚的に捉えやすいような図面の作成を行った。

本遺跡では遺構外出土土器、住居址・土坑などの遺構内出土土器では堀之内２式期の新段階から加曽利Ｂ１式期までの遺物が多数を占め、特に加曽利Ｂ１式期のものが大多数を占めている。出土層位では若干堀之内２式期の遺物が上位から出土する傾向が見られるが、特に分離できるような上下差は看取できない。

遺物の分布では、遺物は濃淡はあるが、調査区のほぼ全面から出土している。特に遺構周辺では遺物が集中分布する。（第44図）その傾向は石器分布において顕著に反映されており、調査区内で大きく３つのブロックに集中している。以下、グリット毎に概括記載する。

Ae～Ag-１～９グリッド（第45図）

この地点では土器の接合関係で南北方向へ２～５ｍの動きが見られる。Ae～Ag-１～３グリッドの遺物分布は横の遠距離接合を含まない状況で、独立した接合関係、遺物分布を示している。注意されるのは底部穿孔の小形舟形土器（第55図10845）と表示されていないが円盤状特殊石器（第106図11350）が出土している。DJ-32号土坑周辺南には磨石４点、打製石斧は JD-47号土坑周辺及びその南に３点と多く見られる。また、4811、5621、11495、11499が大きく東西で接合し、他は大きな動きは見られない。南側の土坑周辺、特に東側での遺物出土が多く見られる。このような大きく東西で接合する動きは、Ae～Ag-３～７グリッド土坑群を取り巻く遺物分布と Ae～Ag-16～18グリッドの遺物分布と関係していることが看取できる。

Ae～Ag-10～18グリッド（第45図）

この地点では深鉢形土器（第52図12142）が Ae-11グリッド～16･17～22グリッドまでの東西で長い距離で接合している。深鉢形土器（第52図10025）南北方向での接合。注口土器（第57図7931）はほぼ完形に近い形での出土。この地点では東西方向４ｍ前後の接合と南北方向３～６ｍの接合が交叉する。ここでも Ae～Ag-10～11グリッドの土坑群の遺物と Ae～Ag-16～18グリッドの遺物分布と関係していることが看取できる。Ae～Ag-16～18グリッドの遺物分布は遺構とは直接絡まない遺物の分布で、何らかの場を想定することができると思われる。ここでは深鉢形土器を中心に凹石、打製石斧などが出土している。分布や接合の傾向では、Ae～Ag-33～35グリッドの住居付近の分布と Ae～Ag-31～32グリッドとの接合関係に類似する。

Ae～Ah-18～33グリッド（第46図）

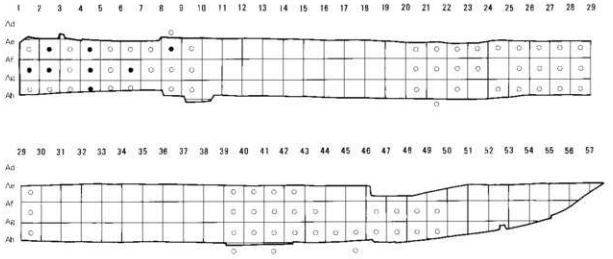
Ag･Ah-19の土坑群周辺では、磨石類が多く出土しており、穿孔された特殊石皿（第104図）が出土している。一方、Ae-18では土偶（第81図12203）が出土している。JD-50号土坑の東側に遺物の集中があり、注口土器（第56図12410）が東西に約９ｍで接合している。

Ae～Ah-33～49グリッド（第47図）

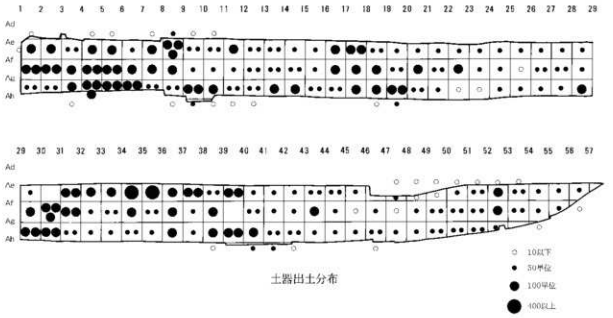
この地点は JH-２･３号住居址、JH-１号住居址の遺物分布と Ae～Ah-29～33グリッド周辺との接合関係、またその西のピット･土坑群周辺との接合関係が看取され、住居址と土坑群との関連性が看取される。また、Ag-46･47グリッドでは小形深鉢と小形鉢がセットの様に出土している。Ae～Ag-40･43グリッドで南西-北東方向約７ｍの接合で、遺構が関係していない。

Ae～Ah-50～57グリッド（第48図）

調査区の東端に近い地区で、遺物の集中が見られるが、遺構との関連が薄い地区である。斜方向約２～４ｍの範囲での接合が多い。

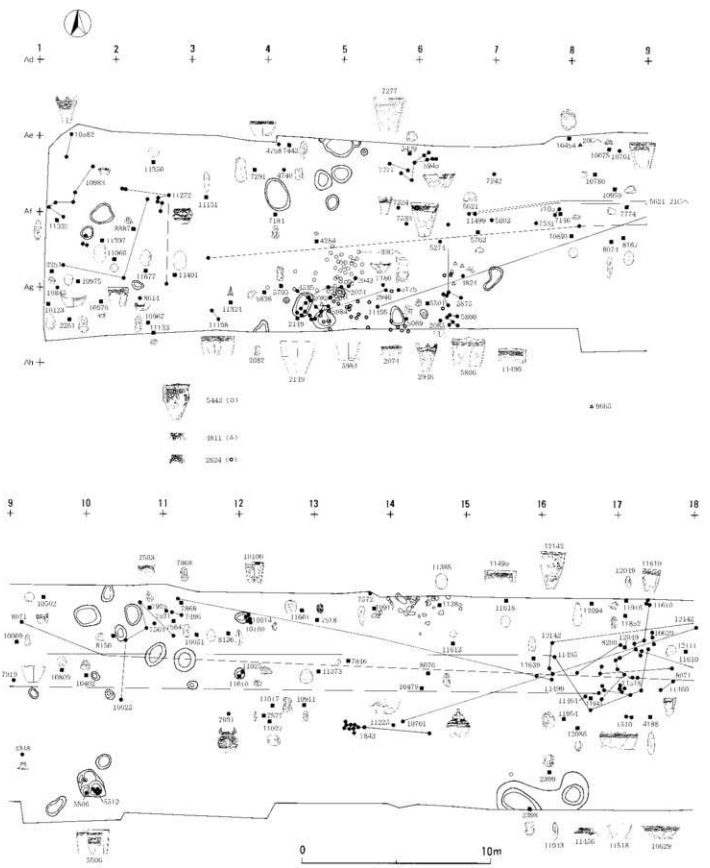


石器出土分布

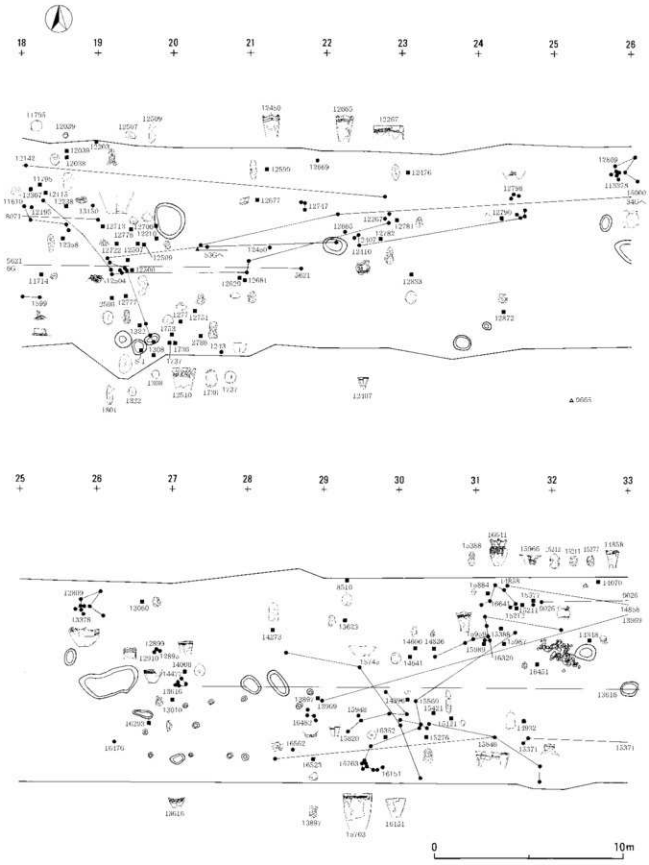


土器出土分布

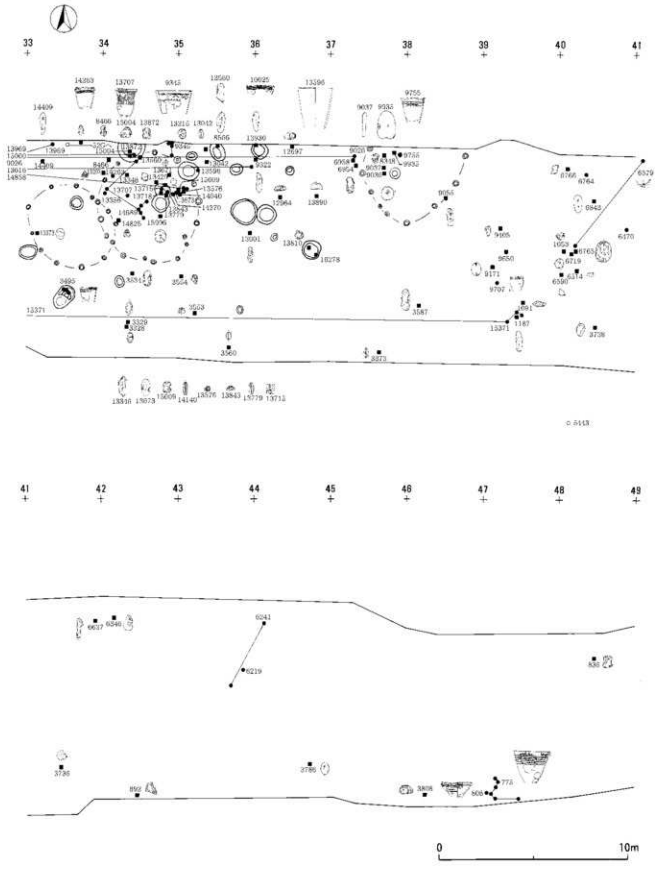
第44図　遺構外遺物出土分布図



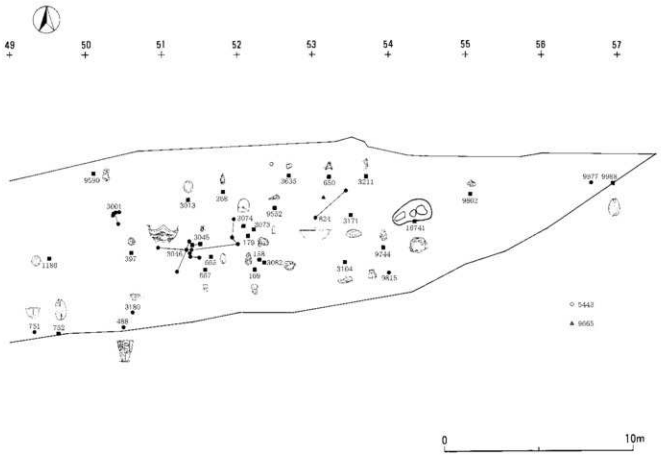
第45図　遺構外遺物分布図(1)



第46図　遺構外遺物分布図(2)



第47図　遺構外遺物分布図(3)



第48図　遺構外遺物分布図(4)

以上のように遺構周辺では縦や斜め方向の短い接合関係がみられ、特に土坑の周辺に遺物が集中し、内容も墓壙的な特殊遺物やミニチュア土器、注口土器、土製品、磨石、打製石斧が多い。住居址周辺では個体になるような土器、磨石、打製石斧をはじめに石錘、土錘などが出土しており、生活感のある分布状況と言えるかもしれない。それぞれの場の機能を考える上で、遺構と遺物の関係を有機的に関連付けられるような状況として注意すべきであろう。また、住居址と土坑との横方向の接合は比較的遠距離で、住居と土坑との関係が明確に把握される点は興味深い。しかし、視覚的な接合についての検討だけでなく、接合内容を十分に検討した上で、破片の動きに注目しなければならない。このような接合関係が果たして考古学的にどのように理解できるかは今後検討の余地があると思われる。

4）遺構外出土遺物

本遺跡で検出された遺構覆土等に直接関係しない遺物（所謂包含層遺物）について、概括する。本遺跡では前節の遺物の分布接合の状況のとおり、単に廃棄された状況とは異なる状況が看取されるため併せて前節を参照されたい。

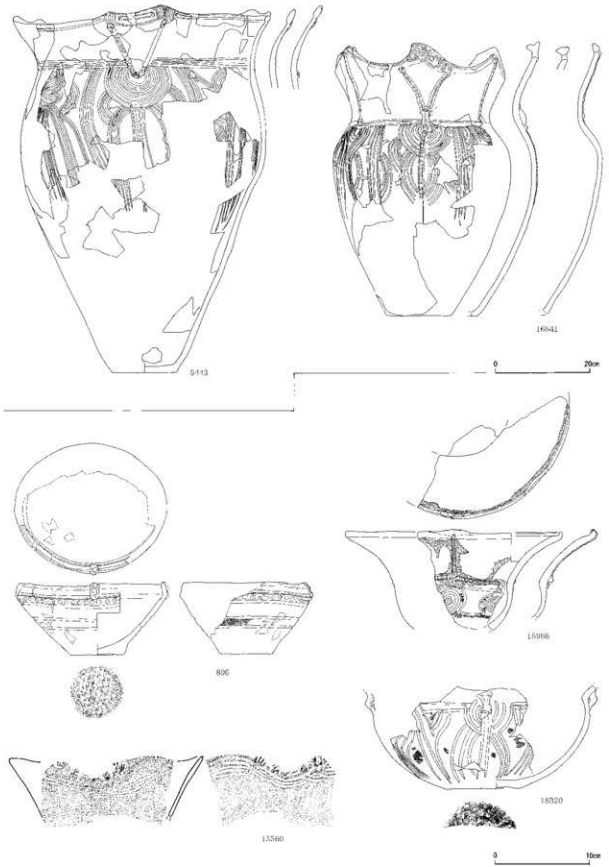
本遺跡から出土した遺物は、縄文時代後期を主体に晩期までのものに集約される。縄文時代前期や中期など、周辺に集落遺跡が知られる時期も存在してるにもかかわらず。地理的立地要件や生業領域が異なるためであるかは不明だが、本遺跡から縄文前期、中期の破片等は僅かしか検出されていない。特に本遺跡では後期堀之内式期後半～加曽利B式期前半の遺物が全体の９割以上を占め、中でも加曽利B１式期を所産とする遺物群に集約される。

近接する谷地C遺跡では、同様に後期堀之内式期が主体的である点で同一集落の範疇で考えることができるかもしれないと思われる。また、谷地遺跡、滝川II遺跡では晩期安行、大洞式系土器群が多く、本遺跡に後続する様相が看取できる。しかしながら、現状では具体的に遺跡間の関係について研究されていないので、傾向指摘に止める。

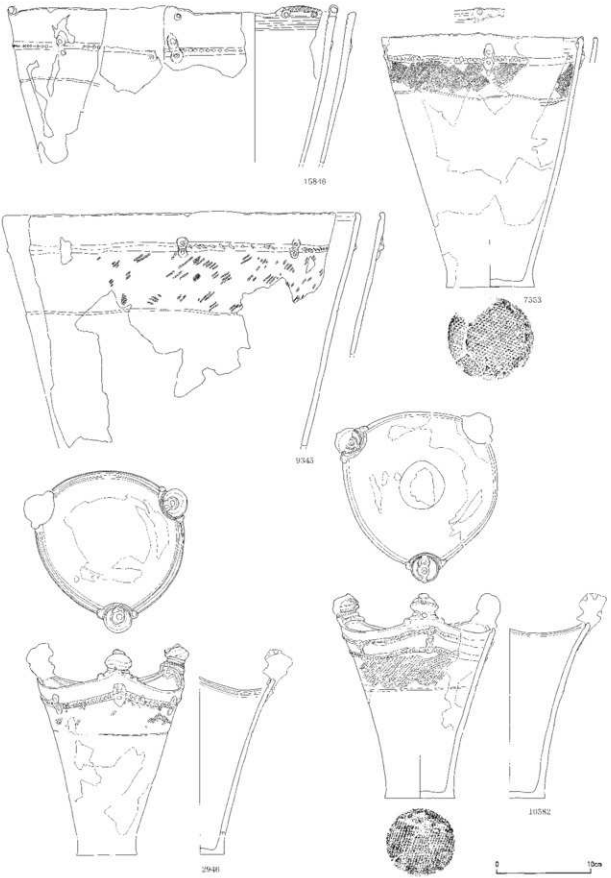
以下、遺構外出土遺物として記載し、個体に復元された土器、石器については観察表を付して記載とする。また、破片については文様で大別し、概括する。

第18表　遺構外出土土器観察表(1)

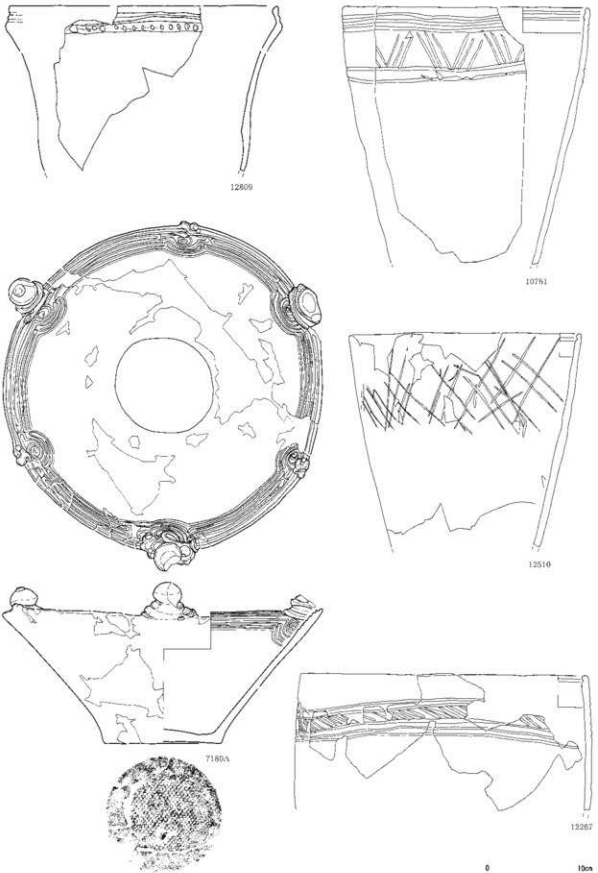
図版番号	№	器種	法量（cm）				色調	胎土	焼成	残存部位	残存率	時期・型式	備考
			口径	底径	器高	胴部最大径							
第49図	5443	大形深鉢	(53.2)	13.6	77.0	(51.8)	器外面：浅黄　2.5Y8/3　60%、にぶい黄橙　10YR7/4　30%、褐灰　10YR4/1　10% 器内面：浅黄　2.5Y8/3　80%、にぶい黄橙　10YR7/4　15%、褐灰　10YR4/1　5%	①細砂：多量チャート・中量黒色粒・中量白色粒・少量赤褐色粒 ②粗砂：少量チャート・少量黒色粒	硬質	口辺～胴	1/3	堀之内１式	大小２つの高部を１単位とする３単位の波状口縁。波状高部は弧状沈線や円形刺突によって構成される。外面は胴部上部のくびれに２条の横位沈線を巡らし、文様施文部が区画される。上部文様帯は波状高部から、押圧を加えた「V」字状の隆帯を付し、くびれ部の２条の横位沈線よりさらに下方に垂下させる。隆帯上端および、最上部に円形刺突を施す。下部文様帯は波状山部下方では「V」字状隆帯貼付下部から「U」字状の沈線を６条を巡らし、外辺にはさらに１条の沈線を巡らし、中央で下方に向かい垂下する。この屈曲部の上方には円形刺突が施される。沈線間にさらに「U」字状の沈線を施す。波状谷部は「C」字状沈線を組み合わせ、文様を構成し、波状山部の文様と同様な胴部下方へ垂下する沈線を施す。これらの文様にさらに４条１単位とする弧状沈線が施文される。内外面ともに磨き。底部欠損。
第49図	16641	大形深鉢	(35.5)	(14.0)	(57.9)	(37.5)	器外面：橙　7.5YR6/6　70%、にぶい黄橙　10YR7/2　20%、黒　7.5YR2/1　10% 器内面：にぶい黄橙　10YR7/3　60%、橙　5YR7/6　40%	①細砂：多量チャート・多量黒色粒 ②粗砂：中量チャート・中量赤褐色粒	硬質	口辺～底	1/3	堀之内１式	大小３単位ずつの計６単位の突起を有する波状口縁。大突起には円孔が１つ穿れ、これを中心として「U」字状、さらに外側に弧状の沈線が施される。側面には６条の横位沈線が施され、装飾性を増している。小突起には縦位に２つの刺突が施される。外面は胴部のくびれに２条の横位沈線を巡らし、文様施文部が区画される。上位文様帯は、大突起下方に押圧を加えた隆帯を「V」字状に付し、小突起の下方では同じく押圧を加えた隆帯を１条縦位に付している。それぞれの隆帯端部には、円形刺突が施される。「V」字状の隆帯下には文様帯を区画する２条の沈線をまたぎ、把手が付される。下位文様帯は、大突起下方では把手からさらに押圧を加えた隆帯が垂下する。これを中心として弧状の沈線が施され、対弧文を形成している。小突起下方では円形の沈線を中心に「U」字状沈線、その外辺では下方へ垂下する沈線が、これに弧状の沈線などが施されている。内外面ともに磨き。
第49図	806	小形鉢	(15.0)	6.5	7.8	—	器外面：橙7.5YR6/6　50%、にぶい橙7.5YR6/4　50% 器内面：褐灰7.5YR6/4	①細砂：多量 ②粗砂多量	硬質	口辺～底	1/3	加曽利B1式	平縁。緩やかに広がりながら口縁部で「く」の字に内向する。「８」字状貼付。横位の沈線を巡らして区画し、連続刺突文。胴中央では充填縄文を施文する。底部網代痕。
第49図	16320	鉢	—	(8.0)	(10.8)	—	器外面：浅黄橙　10YR8/3　30%、にぶい黄橙　10YR7/2　30%、黒褐　10YR3/1　40% 器内面：灰黄　2.5Y7/2　50%、黒　10YR1.7/1　50%	①細砂：多量チャート・多量白色粒・多量片岩・少量黒色粒 ②粗砂：中量チャート・少量白色粒 ③礫：中量チャート	硬質	胴～底	1/3	堀之内１式	外面は胴部のくびれに２条の横位沈線を巡らし、上下の文様施文部が区画される。くびれ部に橋状把手で付され、下方に２条の沈線が垂下する。これを中心に沈線による弧線文を対弧文を形づくる。わずかに地文縄文RL（？）が認められる。底部と胴部の一部に黒色漆（？）が付着。底面網代痕なし。内外面ともに磨き。
第49図	15966	広口鉢	(22.2)	—	(10.6)	—	器外面：黒　2.5Y2/1　80%、浅黄　2.5Y7/3　20% 器内面：黒　2.5Y2/1　100%	①細砂：中量白色粒・少量黒色粒・少量片岩 ②粗砂：認められず	硬質	口辺～胴	1/3	堀之内１式	平縁。黒色処理。遺存部位で小突起が１個確認できる。内側側に２つの刺突が施される。球形の胴部から口縁部は広く外反して開く。口唇部は薄く肥厚する。外面はくびれ部に押圧を加えた横位隆帯を巡らし、文様帯を区画している。口縁部は突起下方に押圧を加えた縦位隆帯を付し、横位隆帯と接する位置には「８」字状貼付文が付させる。胴部は上方と下方にそれぞれ１条ずつ横位沈線を巡らし、この中に円形やひし形（？）を基調とした沈線文が施される。文様の外側の沈線間と下方の横位沈線間に、縄文LRが施される。内外面ともに磨き。内外面ともに炭化物付着。
第49図	15560	深鉢	(20.4)		(6.4)		器外面：黒褐5YR3/1 器内面：暗赤褐5YR3/2	①細砂：多量 ③小石：微量	硬質	口辺～胴上	1/5	加曽利B１～２式？	口縁が開く波状口縁。外面は３条１組の不規則な沈線を２段巡らす。２組２対の瘤目瘤を貼付し、その間の口唇部に沈線。内側には瘤貼付下部に刺突穿孔。それらを結ぶように３条１組または、３条＋１条の沈線で不規則な単位で施文する。



第49図　遺構外出土土器(1)



第50図　遺構外出土土器(2)



第51図　遺構外出土土器(3)

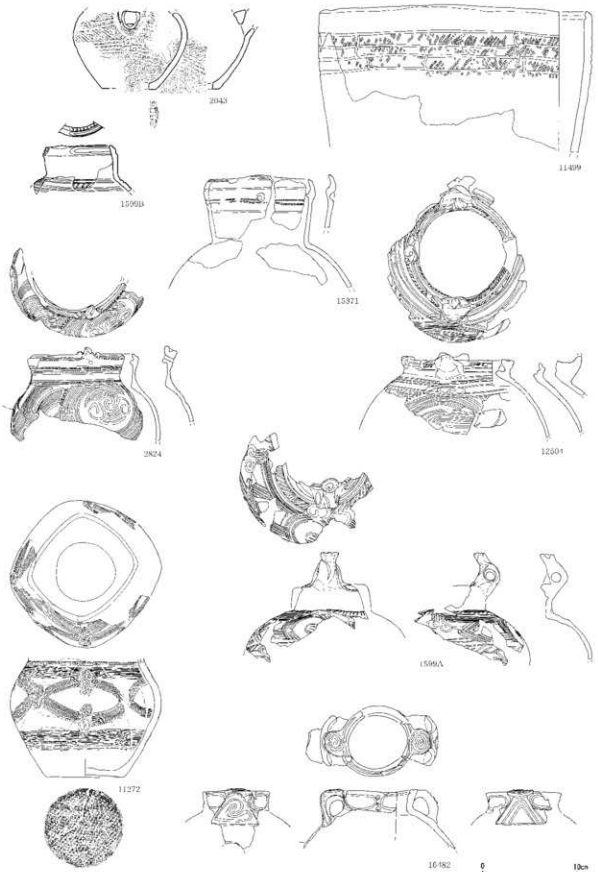
第19表　遺構外出土土器観察表(2)

図版番号	№	器種	法量(cm)				色調	胎土	焼成	残存部位	残存率	時期・型式	備考
			口径	底径	器高	胴部最大径							
第50図	15846	深鉢	(33.7)	—	(16.6)	—	器外面：にぶい橙 7.5Y7/4 50%、褐灰 10YR4/1 50% 器内面：にぶい橙 7.5Y7/4 80%、褐灰 10YR5/1 20%	①細砂：多量チャート・中量黒色粒・中量白色粒・中量赤褐色粒②粗砂：少量チャート	硬質	口辺～胴	1/3	堀之内2式	4単位の突起を有する平縁。突起部には上面及び内面に刻目が施される。突起の下部には2個の孔が穿たれる。外面は1条の刻目のある横位隆帯を巡らせる。上述の孔下方には横位隆帯上に「8」字状貼り付け文を付している。内面は3条の沈線を巡らす。内外面ともに器面はかなり荒れている。両面にわずかながら磨きの痕跡が認められる。
第50図	7553	深鉢	(21.4)	(9.2)	26.7	18.2	器外面：黒 7.5Y2/1 50%、明黄褐 10YR6/6 50% 器内面：にぶい黄橙 10YR6/4 50%、オリーブ黒 5Y3/1 50%	①細砂：多量石英・黒色粒・白色粒・海綿骨針②粗砂：少量チャート・結晶片岩・赤褐色粒	硬質	口辺～底	2/3	堀之内2式	外面は1条の刻みのある紐線文と沈線による横位区画帯。単節LR縄文を充填。沈線は断続的に引かれ、所々途切れる。紐線文上に6単位の「8」字状貼付。口縁端部はやや内湾し、内面には浅い沈線状の調整痕が残る。正面観が意識され、1ヶ所だけ「8」字状貼付部分の口縁部に小突起を設け、内面には円形の刺突が加えられる。この小突起から、正面に向かって左隣の貼付までの1区画分のみ、口唇部に切り込みを施し、内面には2条の横位沈線を引く。底部網代痕。外面胴部上半および内面磨き。
第50図	9345	深鉢	(37.0)	—	(22.0)	—	器外面：にぶい橙 7.5YR6/4 30%、にぶい橙 7.5YR7/4 10% 器内面：橙 7.5YR6/6 35%、灰白 10YR7/1 5%	①細砂：多量白色粒・多量チャート②粗砂：多量チャート・多量黒色粒	硬質	口辺～胴中	1/4	堀之内2式	平縁。外面は刻みを加えた横位隆帯と、胴部中位の横位沈線によって区画された中に縄文LRが施文される。荒れていて不明瞭だが、おそらくは充填とみられる。隆帯上に「8」字状貼付文が付される。内面は1条の横位沈線を巡らせる。内外面ともに磨き。かなり荒れている。
第50図	2946	小形深鉢	(17.1)	(4.6)	(20.0)	12.2	器外面：黒褐 2.5Y3/1 90%、暗褐 7.5YR3/4 10% 器内面：黒褐 2.5Y3/1 95%、明褐 7.5YR5/6 5%	①細砂：多量石英・結晶片岩・白色粒 ②粗砂：少量チャート	硬質	口辺～胴	2/3	堀之内2式	上面形は丸みを帯びた三角形。3単位の波状口縁で、波頂部に突起を有する。突起頂部に「8」字状の貼付。波状部内面には、円形の刺突が加えられる。外面は、刻みのある紐線文と沈線による横位区画帯。単節LR縄文を充填。縄の粒は均一の大きさではなく、大小混在する。沈線は浅く不安定である。紐線文上には、各突起の下とその間に6単位の「8」字状貼付。口縁内面は2条の横位沈線を巡らす。内外面ともに丁寧な磨き。
第50図	10582	深鉢	(17.4)	7.4	21.6	13.4	器外面：黒褐 2.5Y3/1 80%、にぶい黄橙 10YR6/4 10%、にぶい橙 7.5YR6/4 10% 器内面：黒褐 2.5Y3/2 80%、にぶい黄橙 10YR6/4 15%、黒 2.5Y2/1 5%	①細砂：多量石英・黒色鉱物・結晶片岩・白色粒②粗砂：少量チャート・赤褐色粒	硬質	口辺～底	2/3	堀之内2式	上面形は丸みを帯びた三角形。3単位の波状口縁で、波頂部に突起を有する。突起頂部に「8」字状の貼付。外面は、刻みのある紐線文が2条巡る。紐線文間に6単位の変形「8」字状文貼付。突起部分の下は3孔の貼付文。突起の中心ではなく、正面から見てやや右側にずれた場所に貼付される。正面観が意識され、1ヶ所のみ4孔の貼付文となっている。紐線文と1条の沈線による横位区画帯。無節L縄文充填後、一部を磨り消し。口縁部内面に1条の横位沈線を巡らす。底部網代痕。内外面ともに丁寧な磨き。
第51図	12809	深鉢	(28.2)		(17.4)		器外面：暗褐7.5YR3/3 器内面：褐7.5YR4/4	①細砂：多量②粗砂：中量	硬質	口辺～胴	1/4	加曽利B2式？	平縁。緩やかに広がりながら口縁部で「く」の字に内向する。横位の沈線を巡らして区画し、区切りながら刻目を持つ隆帯を巡らす。胴部無文。
第51図	10761	深鉢	(26.1)	—	(26.9)	—	器外面：にぶい黄橙 10YR7/2 20%、浅黄橙 10YR8/3 30%、灰黄褐 10YR5/2 45%、黒褐 10YR5/2 5% 器内面：浅黄橙 10YR8/4 30%、灰黄褐 10YR5/2 70%"	①細砂：多量チャート・中量石英・少量片岩②粗砂：少量チャート・少量白色粒	硬質	口辺～胴	1/5	加曽利B2式	平縁。外面は上位に3条の横位沈線、下位に2条の平行沈線によって区画された中に3本1単位の平行沈線によって山形文が施文される。内面は2条の沈線を巡らせる。内外面ともに磨き。胴部下方にケズリ様の整形痕が認められる。
第51図	7180A	浅鉢	33.9	12.2	(17.1)	27	器外面：明黄褐 2.5Y7/6 60%、黄灰 2.5Y5/1 30%、黒 N2/ 10% 器内面：浅黄 2.5Y7/3 60%、黄灰 2.5Y4/1 40%	①細砂：少量石英・白色粒・海綿骨針 ②粗砂：多量チャート・結晶片岩・黒色鉱物・赤褐色粒	硬質	口辺～底	ほぼ完形	堀之内2式	大小3単位ずつの計6単位の突起をもつ。大突起の形状は全て異なる。大突起部分の下には円孔が穿たれる。孔は2つあくもの、1つで中央にあくもの、1つで中央より端に片寄るものと、全て位置が異なる。外面無文。口唇部に沈線を1条巡らせる。内面は5条の横位沈線が施され、突起の下部分には沈線による渦巻文が施される。沈線間には部分的に斜めの刻みが確認される。正面観が意識され、大突起部分の内面渦巻文は1ヶ所のみ隆帯で作り出している。底部網代痕。内外面ともに磨耗が著しい。
第51図	12510	深鉢	(24.5)	—	—	—	器外面：浅黄橙 10YR8/3 40%、黒 10YR2/1 40%、灰白 2.5Y8/2 20% 器内面：浅黄橙 10YR8/3 30%、黒 10YR2/1 30%、灰白 2.5Y8/1 40%	①細砂：多量白色粒・中量黒色粒②粗砂：中量チャート・中量白色粒・中量片岩・多量赤褐粒	硬質	口辺～胴中	2/3	加曽利B3式？	平縁。外面は斜位の沈線を交差させて施文される。内面は1条の横位沈線を巡らせる。内外面ともに荒れている。両面ともにわずかに磨きの痕跡が認められる。
第51図	12267	深鉢	(30.0)	—	(14.4)	—	器外面：褐灰 10YR4/1 90%、暗灰 N3/ 10% 器内面：黄灰 2.5YR5/1 100%	①細砂：中量白色粒・少量黒色粒②粗砂：少量白色粒・少量石英	硬質	口辺～底	1/5	加曽利B1式	平縁。外面は5条の沈線を巡らし、上方より2段、3段間に斜位の沈線が充填される。口縁内側に1条の横位沈線を巡らせる。内外面ともに磨き。
第52図	10025	鉢	(28.6)	—	(9.4)	—	器外面：暗灰黄 2.5Y5/2 80%、黒 2.5Y2/1 20% 器内面：灰黄 2.5Y6/2 50%、黄灰 2.5Y4/1 50%	①細砂：中黒色鉱物・中量チャート・少量白色粒②粗砂：中量チャート・中量白色粒・少量黒色鉱物	硬質	口辺～胴	1/3	加曽利B1式	平縁。口縁端部は内湾。外面は地文縄文LRを5本の横位沈線で区画し「し」字状の沈線区切り文を施文する。内外面ともに磨き。
第52図	11198	深鉢	(33.8)	—	(19.4)	—	器外面：黒褐 10Y2/1 30%、にぶい橙 7.5YR7/4 30% 器内面：灰褐 7.5YR4/2 40%	①細砂：多量チャート・少量赤褐色粒・少量石英②粗砂：多量チャート・中量黒色鉱物・少量白色粒	硬質	口辺～底	1/4	加曽利B1式	平縁。口縁部はやや内湾。外面は地文縄文LRを5条の横位沈線で区画する。内外面ともに磨き。 ＊焼成後穿孔1ヶ所あり。
第52図	12142	深鉢	(26.0)	(10.0)	(38.1)	—	器外面：灰黄褐 10YR4/2 30%、橙 5YR6/6 10%、暗灰 N3/ 10% 器内面：黒褐 10YR3/1 45%、明黄褐 10YR6/6 5%	①細砂：多量白色粒・多量チャート・中量黒色粒②粗砂：少量白色粒・少量チャート	硬質	口辺～底	2/3	加曽利B1式	平縁。外面は2条の横位沈線が施され、胴部は縄文LRを横位に施文。内面磨き。外面下端は磨き。

第52図　遺構外出土土器(4)

第20表　遺構外出土土器観察表(3)

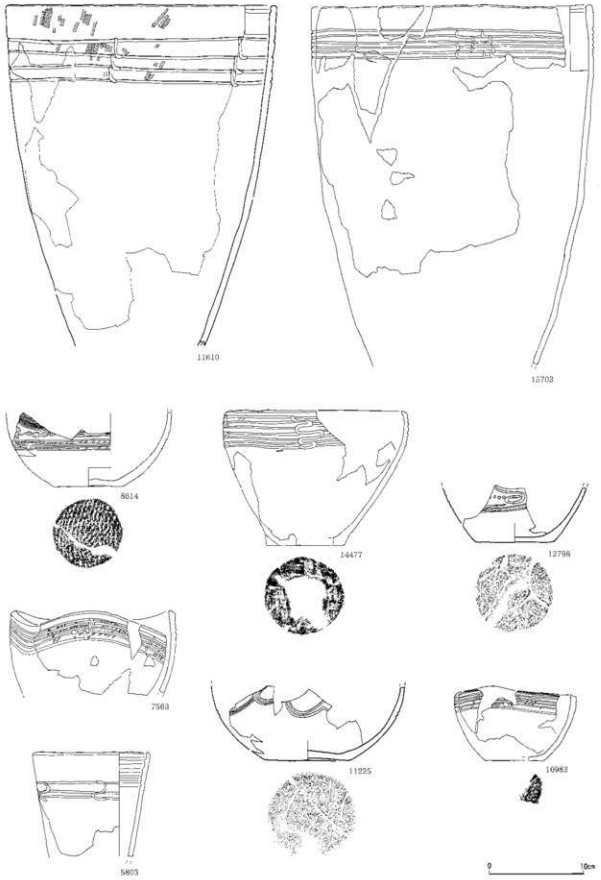
図版番号	№	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	胴最大径	色調	胎土	焼成	残存部位	残存率	時期・型式	備考
第52図	488	深鉢	16.9	18.1	22.7	—	器外面：明黄褐 10YR7/6 10%、浅黄 2.5Y7/4 80%、黄灰 2.5Y5/1 10% 器内面：浅黄 2.5Y7/4 80%、黄灰2.5Y6/1 20%	①細砂：多量チャート・多黒色粒・少量石英②粗砂：多量チャート・中量白色粒	硬質	口辺～底	2/3	加曽利B1式	3単位の波状口縁。外面はケズリ様のナデ後、一部に横位の磨き（指ナデ？）が認められる。内外面ともに無文。底面に荒い目の網代痕？を残し、磨きを施す。内面ナデ後、磨き。
第52図	11460	小形深鉢	(13.9)	(6.5)	(19.3)	—	器外面：灰黄褐 10YR4/2 80%、橙 7.5YR6/6 20% 器内面：褐灰 7.5YR4/1 40%、黒褐 7.5YR3/1 60%	①細砂：多量チャート・多量白色粒②粗砂：多量チャート・多量黒色鉱物	硬質	口辺～底	1/3	加曽利B1式	3単位の波状口縁。外面には口縁の形状に沿ってゆるい波状となる3本の横位沈線を巡らせる。口縁部内面に浅い沈線を巡らせる。底面網代痕。内外面ともに磨き。
第52図	6764	鉢	(14.0)	7.0	9.3	—	器外面：浅黄橙 10YR8/3 80%、褐灰 10YR6/1 20% 器内面：にぶい黄橙 10YR7/2 100%	①細砂：中量白色粒・少量黒色粒②粗砂：中量チャート・中量黒色粒・白色粒	硬質	口辺～底	2/3	加曽利B1式	平縁口縁。口縁部は内湾。口唇部外端は外削ぎ状で1条の沈線を巡らす。外面は3条の横位沈線による縄文帯を施し、上位1段の沈線は口唇部へ向かって「し」字状となる。縄文帯の区切り文はこの位置で階段状に縦位の沈線が施されている。底面網代痕（一本越え、一本潜え、一本送り）。内外面ともに磨き。
第52図	12910	小形深鉢	(13.8)	—	(12.4)	—	器外面：黒 7.5YR2/1 45%、浅黄橙 10YR8/3 35%、にぶい橙 5YR6/3 20% 器内面：にぶい橙 7.5YR6/4 60%、明褐灰 7.5YR7/2 30%、褐灰 10YR4/1 10%	①細砂：多量チャート・多量白色粒・中量黒色粒②粗砂：小量チャート	硬質	口辺～底	1/4	加曽利B1式	3単位の波状口縁。口唇部内面に刻目。外面は口縁の形状に沿って3～4条の横位沈線を巡らす。内面は口縁部の形状に沿って幅広の横位沈線を巡らす。内外面ともに磨き。
第52図	12895	小形深鉢	(15.7)	—	(13.4)	—	器外面：にぶい褐 7.5YR6/3 30%、黒褐 5YR3/1 70% 器内面：にぶい黄橙 10YR6/4 5%、黒 7.5YR2/1 95%	①細砂：中量チャート・中量白色粒・中量黒色粒②粗砂：中量チャート・中量白色粒	硬質	口辺～胴	1/4	加曽利B1式	平縁。口縁端部は内湾。外面は縄文施文後、4本の横位沈線を巡らす。縄文は荒れているため不明瞭。内面は匠状の横位隆帯を巡らし、下位に3条の沈線を巡らす。内外面ともに磨き。
第52図	12407	小形深鉢（コップ型）	(12.6)	4.8	13.2	—	器外面：明黄褐 10YR 70%、暗灰 N3/ 30% 器内面：にぶい黄褐 10YR6/4 100%	①細砂：多量白色粒・多量チャート・中量片岩②粗砂：少量チャート	硬質	口辺～底	1/3	加曽利B1式	口唇部は内湾。内面に段を有す。外面は4条の横位沈線を巡らす。内面に1条の沈線を巡らす。底面網代痕（一本越え、一本潜え、一本送り）。底部外径部に粘土帯貼付。内外面ともに磨き。かなり荒れている。
第52図	15620	小形深鉢	11.3	—	(10.6)	—	器外面：黒褐 5YR3/1 90%、灰褐 7.5YR4/2 10% 器内面：黒褐 5YR2/1 80%、にぶい赤褐 5YR5/3 20%	①細砂：多量白色粒②粗砂：少量白色粒	硬質	口辺～胴下	2/3	加曽利B1式	平縁。口唇部に刻みを施す。外面は2条の横位沈線を施文後、縄文LRを充填。内面には2条の横位沈線を巡らす。内外面ともに磨き。黒色処理。
第53図	3043	注口		(12.4)	(8.4)	—	器外面：褐灰5YR4/1 器内面：褐灰5YR4/1	①細砂：多量	硬質	口～底	1/3	加曽利B1式	内面漆付着
第53図	1599B	注口	(6.6)	—	(5.0)	—	器外面：にぶい橙7.5YR7/4 器内面：にぶい橙75.YR7/4	①細砂：多量	硬質	口辺～肩	1/3	加曽利B1式	
第53図	15371	注口	(10.6)	—	(12.0)	—	器外面：黄灰 2.5Y6/1 70%、橙 7.5YR7/6 30% 器内面：にぶい黄橙 10YR7/4 80%、灰黄褐 10YR5/2 20%	①細砂：中量チャート・中量黒色粒・中量白色粒・中量赤褐色粒②粗砂：少量チャート・中量黒色斑	硬質	口辺～胴	1/5	加曽利B1式	口唇部内湾。外面は上下2条の横位沈線文様帯を区画し、この間には2条の横位沈線を施文後、連続刺突が施文される。内面には匠状の横位隆帯を巡らせる。内外面ともかなり荒れている。わずかに磨きの痕跡が認められる。焼成後の穴あり。
第53図	11499	深鉢	(27.8)	—	(15.4)	—	器外面：灰黄褐 10YR6/2 100% 器内面：にぶい黄橙 10YR6/3 100%	①細砂：中量白色粒②粗砂：微量白色粒	硬質	口辺～胴	1/5	加曽利B1式	平縁。外面は縄文LR施文後4本の横位沈線により区画。この縄文帯は下方の沈線から連続する「し」字状の区切り文が施される。内面口唇部下に1条の横位沈線を巡らせる。内外面ともに磨き。
第53図	2824	注口	(10.8)	—	(9.8)	—	器外面：淡黄 2.5Y8/3 50%、黄灰 2.5Y5/1 50% 器内面：黄灰 2.5Y4/1 100%	①細砂：少量赤褐色粒・少量白色粒・微量黒色粒②粗砂：微量白色粒	硬質	口辺～胴中	1/3	加曽利B1式	小突起1個が遺存、下方に孔あり。口唇部は内側に屈曲し、外削ぎ状を呈する。1条の沈線を巡らし、外縁に段を作り出す。口唇部上端に刻目を施す。外面は口縁部中位に3条、下位に2条の横位沈線を巡らし、各沈線には刻目が施される。胴部は「S」字状の沈線文を中心に繊細な多重沈線による渦巻文が施される。各多重沈線が、接する箇所は浅い円形の刺突が加えられる。内面は1条の匠状の張り出しがあり、突起部に孔が穿たれる。外面は丁寧な磨き、胴部はナデ様の調整が認められる。
第53図	12504	注口	(10.4)	—	—	—	器外面：にぶい橙 7.5YR7/4 80%、橙 5YR6/6 10%、褐灰 7.5YR4/1 10% 器内面：橙 5YR6/6 100%	①細砂：多量チャート・多量白色粒②粗砂：少量チャート	硬質	口辺～底	2/3	加曽利B1式	1対の把手、1対の小突起を有する。突起には内面に断面三角垂状の円穴を施す。口唇部は外側に1条の沈線を巡らし、外縁に段を作り出す。口唇部は薄く内側に屈曲する。外面は口縁部2条の横位沈線を巡らす。胴部上位は4条の横位沈線を巡らし、「し」字状の区切り文が施される。その下方に多重沈線と刺突により文様構成している。磨きが施されていたとみられるがかなり荒れている。
第53図	1599A	注口	(11.0)	—	(11.9)	—	器外面：にぶい黄橙 10YR7/3 80%、にぶい橙 7.5YR7/4 20% 器内面：にぶい黄橙 10YR7/2 90%、にぶい橙 5YR6/4 10%	①細砂：中量チャート・中量黒色粒・少量白色粒②粗砂：微量チャート	硬質	口辺～胴	1/3	加曽利B1式	1箇所の把手が遺存、口唇部は内側に粘土貼り付けにより張り出しを作る。外面は口縁部上方に沈線の施文がみられるが遺存が不良で不明瞭。胴部上端は2条の横位沈線を巡らし、その間に斜位の沈線が施される。上位から中位にかけては、5条からなる多重沈線「の」字状文、刺突文から文様が構成される。内外面ともに磨き。
第53図	11272	注口	—	8.2	(12.6)	16.0	器外面：にぶい黄橙 10YR6/4 55%、オリーブ黒 5Y3/1 45% 器内面：黒 7.5Y2/1 100%	①細砂：多量石英・白色粒・結晶片岩、②粗砂：少量チャート③小石：微量石英・チャート	硬質	頸～底	2/3	加曽利B1式	注口部欠損。上面形は丸みを帯びた菱形。外面は4単位の文様構成。8～10条を1単位とする横位沈線文。沈線の交点にS字文。S字内および胴部下半の横位区画内に単節RL細縄文を充填。底部網代痕。
第53図	16482	注口	7.2	—	—	—	器外面：灰 5Y6/1 90%、暗灰 N3/1 10% 器内面：暗灰 3/ 90%、灰 N6/ 10%	①細砂：多量チャート・多量白色粒②粗砂：小量白色粒	硬質	口辺～胴	1/4	堀之内2式	一対の把手が付され、上面は相方ともに沈線による渦巻文、側面は、一方は　三角形を基調とした2条の沈線、もう一方では渦巻から外側三角形となる沈線文が施される。外面は、口縁部に沈線による横位に並ぶ楕円が施され、各楕円間に3個の刺突が施される。内外面ともに磨き。両面ともに荒れている。



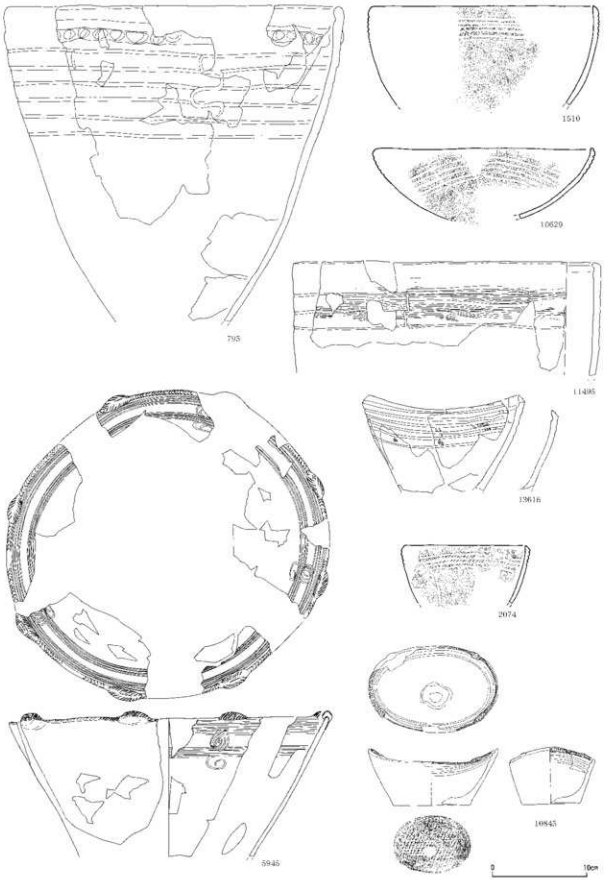
第53図　遺構外出土土器(5)

第21表　遺構外出土土器観察表(4)

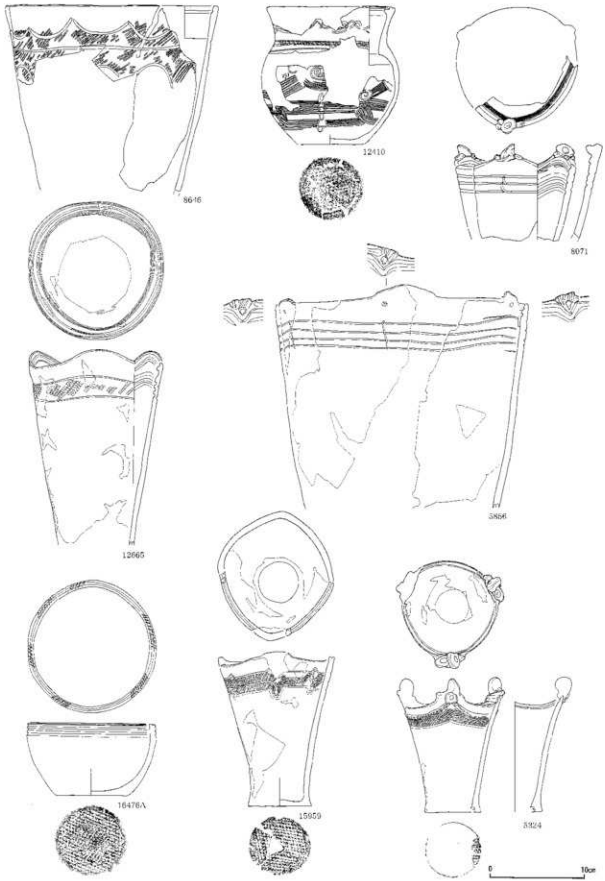
図版番号	№	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	胴最大径	色調	胎土	焼成	残存部位	残存率	時期・型式	備考
第54図	11610	深鉢	(28.7)	—	(35.9)	26.9	器外面：黒褐 10YR3/2 80%、橙 7.5YR6/6 15%、黒 5Y2/1 5% 器内面：灰 5Y4/1 50%、明黄褐 10YR7/6 20%、にぶい黄橙 10YR6/4 20%、明赤褐 5YR5/8 10%	①細砂：多量石英・結晶片岩・黒色鉱物・褐色粒・白色粒、②粗砂：チャート	硬質	口辺～底	2/3	加曽利B1式	外面は4条の横位沈線を巡らし、最下位の沈線から口縁端部まで単節LR縄文を施文する。口縁端部のみ磨り消し。横位沈線間にL字状の縦位区切り文を加える。縄の粒は均一の大きさではなく、大小混在する。口縁部内側は1条の横位沈線を巡らす。
第54図	15703	深鉢	(30.0)	—	(38.0)	—	器外面：橙 5YR6/8 80%、暗灰 N3/ 20% 器内面：明赤褐 5YR5/6 100%	①細砂：中量チャート粒・中量白色粒・少量黒色粒・少量石英 ②粗砂：少量チャート	硬質	口辺～胴中	2/3	加曽利B1式	平縁。外面は6条の横位沈線を巡らし、「L」字状の区切り文を施文する。内面は1条の横位沈線を巡らす。内外面ともに磨き。
第54図	8614	注口	—	7.3	(7.8)	—	器外面：にぶい黄橙 10YR7/2 20%、黄灰 2.5Y6/1 70%、灰 N4/ 10% 器内面：灰 7.5Y5/1 100%	①細砂：中量白色粒・少量黒色粒 ②粗砂：認められず	硬質	胴～底	1/3	加曽利B1式	外面中位は多条沈線と横位の連続「S」字状文、中位下部は4本の横位沈線が施文され、上から2段以下の各沈線間には浅い斜位の押圧を施文する。下端は無文となる。底面網代痕。内外面ともに磨き。内面に棒状工具の痕跡が認められる。
第54図	14477	鉢	(19.6)	(8.2)	14.2	—	器外面：にぶい橙 5YR6/6 90%、明褐灰 5YR7/2 10% 器内面：灰褐 7.5YR7/2 80%、明赤褐 5YR6/5 20%	①細砂：多量チャート・中量白色粒・少量黒色粒②粗砂：中量チャート・中量白色粒	硬質	口辺～底	2/3	加曽利B1式	平縁。口唇部は内湾。外面は7条の横位沈線を巡らし、蛇行する縦位の区切り文を施文する。内外面ともかなり荒れている。両面ともわずかに磨きの痕跡を残す。底面は幅の広い網代痕。
第54図	12798	注口		8.2	(6.0)		器外面：橙7.5YR7/6 70%、褐灰7.5YR5/1 30% 器内面：灰褐7.5YR6/2	①細砂：多量	硬質	胴～底	1/4	加曽利B1式	
第54図	7563	鉢	(16.4)	—	(9.0)	—	器外面：にぶい黄橙 10YR7/3 80%、オリーブ黒 5Y2/2 20% 器内面：にぶい黄橙 10YR7/3 50%、灰黄褐 10YR5/2 50%	①細砂：少量白色粒・少量黒色粒②粗砂：少量チャート・少量赤褐色粒	硬質	口辺～胴	1/3	加曽利B1式	3単位の波状口縁。わずかに内湾する。口唇部外端は外削ぎ状を呈する。外面は5本の横位沈線を巡らし、その後縄文LRを施文したとみられる。波状口縁高位の下部分と低位の下部分には「し」の字状の沈線が施される。内外面ともに磨き。
第54図	5803	小形深鉢	12.3	—	(11.0)	—	器外面：褐灰 10YR4/1 80%、黒 2.5Y2/1 20% 器内面：黄灰 10YR4/1 90%、にぶい黄橙 10YR6/4 10%	①細砂：中量黒色粒・中量白色粒②粗砂：微量白色粒	硬質	口辺～胴	1/3	加曽利B1式	平縁。外面に3条の沈線を巡らし、縦位の蛇行沈線の区切り文を施文。内面に5条の横位沈線を巡らす。内外面ともに磨き、黒色処理。
第54図	11225	注口		8.8	(7.8)		器外面：にぶい赤褐5YR5/3 40%、灰褐5YR4/2 60% 器内面：褐灰5YR5/1	①細砂：多量②粗砂：少量③小石：微量		胴～底	1/3	加曽利B1式	
第54図	10983	鉢	(12.8)	(6.0)	6.8	—	器外面：黄灰 2.5Y5/1 50% 器内面：灰 5Y5/1 50%	①細砂：多量チャート・中量黒色粒 ②粗砂：少量赤褐粒	硬質	口辺～底	1/3	加曽利B1式	3単位の波状口縁から口唇部1条の沈線。LRの細縄文施文後、5条の横位沈線で区画。各沈線間に「L」字状の区切り文を施文。底面網代痕。内外面ともに磨き。
第55図	795	深鉢	(35.0)	—	(33.2)	—	器外面：橙 5YR6/6 80%、褐灰 5YR5/1 20% 器内面：橙 5YR6/6 100%	①細砂：多量チャート・多量白色粒 ②粗砂：中量黒色粒・中量白色粒	硬質	口辺～底	1/4	加曽利B1式	平縁。外面は指頭状の押圧を加えた太い隆帯、6条の横位沈線を巡らせる。蛇行する縦位沈線の区切り文が施文される。内面には1条の沈線を巡らせる。内外面ともに磨き。
第55図	1510	鉢	23.2		(10.6)	—	器外面：にぶい褐7.5YR5/3 器内面：灰褐7.5YR6/2	①細砂：多量②粗砂：少量	硬質	口辺～胴	1/4	加曽利B1式	平縁。多条沈線に区切り文が施文される。
第55図	10629	鉢	23.0		(7.6)		器外面：にぶい黄褐10YR5/3 器内面：灰黄褐10YR6/2	①細砂：少量②粗砂：多量	硬質	口辺～胴	1/4	加曽利B1式	平縁。多条沈線に区切り文が施文される。
第55図	11495	深鉢	(32.0)	—	(12.0)	—	器外面：にぶい橙 7.5YR6/4 30%、褐灰 10YR4/1 70% 器内面：灰黄褐 10YR4/2 80%、にぶい黄橙 10YR6/4 20%	①細砂：中量白色粒・少量チャート②粗砂：少量チャート	硬質	口辺～胴	1/3	加曽利B1式	平縁。外面は櫛歯状工具による横位条線を施文後、3条の横位沈線による区切り文を施文。口縁部内面にやや幅広の1条の横位沈線を巡らせる。内外面ともに磨き。
第55図	13616	鉢	(17.0)		(10.1)	—	器外面：橙 5YR6/6 90%、にぶい赤褐 5YR5/6 50% 器内面：橙 5YR6/6 50%、赤褐5YR5/6 50%	①細砂：多量黒色粒・やや多量白色粒 ②粗砂：中量チャート・多量黒色粒	硬質	口辺～底	2/3	加曽利B1式	2単位の波状口縁。口唇部内面に刻目。外面は口縁の形状に沿って5条の沈線を巡らす。上位より2段、3段、4段の沈線間に部分的に斜位の刻目が認められる。上位より4段、5段の沈線間に、わずかに縄文RLが施された痕跡が認められる。内面には幅広の横位沈線を巡らす。内外面ともに磨き。
第55図	2074	鉢	12.6	—	(6.0)	—	器外面：明褐灰7.5YR7/2 器内面：明褐灰7.5YR7/1	①細砂：多量	硬質	口辺～胴下	1/3	加曽利B1式	平縁。多条沈線に斜位の刻目文。「し」字状区切り文。
第55図	5945	浅鉢	(33.4)	—	(17.4)	—	器外面：褐灰 10YR5/1 80%、にぶい黄橙 10YR7/2 20% 器内面：褐灰 10YR5/1 20%、にぶい黄橙 10YR7/2 80%	①細砂：中量白色粒・中量黒色粒②粗砂：微量黒色粒	硬質	口辺～胴	2/3	加曽利B1式	8単位の突起を有する。口唇部に刻みが施されている。突起には内外面ともに斜位の刻みが施され遺存している。7個のうち3個には上面に1条の刻み、1個には4条の刻みが施されている。外面無文。内面には上方に5条の横位沈とやや間をあけて4条の横位沈線が巡り、この間の無文帯には縦位対弧文の区切り切文が突起部下方に3ヵ所施される。さらにこの下方には「の」字状の沈線文が施される。内外面ともに磨き。



第54図　遺構外出土土器(6)



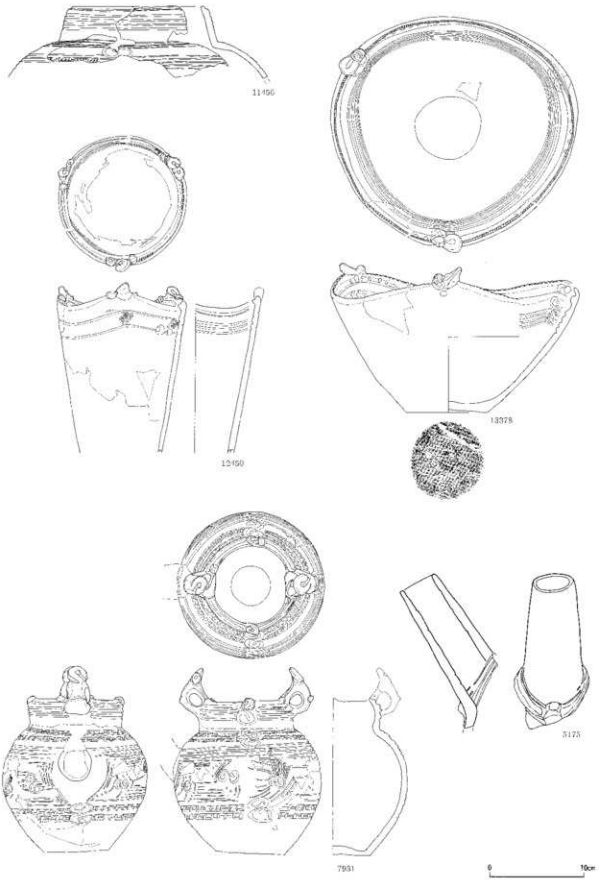
第55図　遺構外出土土器(7)



第56図　遺構外出土土器(8)

第22表　遺構外出土土器観察表(5)

図版番号	№	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	胴部径	色調	胎土	焼成	残存部位	残存率	時期・型式	備考
第55図	10845	小形舟形鉢	13.6	8.2	6.0		器外面：にぶい黄褐10YR5/3 50%、褐灰10YR4/1 50% 器内面：灰黄褐10YR6/2 50%、褐灰10YR4/1 50%	①細砂：多量	硬質	口辺～底	ほぼ完形	加曽利B1式	長軸両端が高くなる緩やかな波状口縁。口唇に細かい刻目文。四隅に刻目文を持つ瘤を配す。外面は無文。内面は多条沈線文を施文する。内外面とも良く磨かれている。底部網代痕、穿孔。
第56図	8646	深鉢	(22.2)	—	(19.5)	—	器外面：灰褐 7.5YR5/2 80%、明褐灰 7.5YR7/2 20% 器内面：明褐灰 5YR7/1 50%、赤灰 2.5YR4/1 50%	①細砂②粗砂	不良	口辺～胴	1/5	加曽利B2式	平縁口縁。地文には縄文LRを施文。その後中位に1条の沈線とこれらを中心に上位、下位に列点状となる沈線が施文されている。口縁内側に1条の沈線を巡らす。内外面ともに磨き。外面はケズリ様の磨き？砂粒の移動が認められる。
第56図	12410	注口	13.6	—	(14.5)	(14.5)	器外面：明黄褐 10YR7/6 100%、暗灰 N3/ 20%、灰 5Y5/1 70% 器内面：灰 5Y5/1 80%、明黄褐 10YR7/6 20%	①細砂：多量チャート・中量白色粒・少量片岩②粗砂：少量チャート・少量白色粒	硬質	口辺～底	2/3	加曽利B1式	口唇部に沈線を施し、外縁部に段を作りだす。外面は口縁部2条の波状沈線を横位に重ねて施文する。くびれ部に2条の横位沈線を巡らし、沈線内刺突列を加え、上下の刺突間を沈線でつなげている。胴部は多重沈線による渦巻文、下位では横位に巡らし「し」字状や弧状の区切り文によって文様を構成している。内面は庇状の張り出しを付す。底面網代痕(一本超え、一本潜え、一本送り？)。内外面ともに磨き。
第56図	8071	小形深鉢	(12.8)	—	(10.1)	—	器外面：黒褐 10YR3/1 60%、にぶい黄橙 10YR6/3 40% 器内面：にぶい褐 7.5YR6/3 20%、黒褐 7.5YR3/1 80%	①細砂：多量赤色粒・微量チャート・微量石英②粗砂：微量チャート	硬質	口辺～胴	1/3	加曽利B1式	上面形は丸みを帯びた二等辺三角形と想定される。3単位の突起を有する波状口縁。外面には3条の横位沈線を巡らし、口縁突起の下部分では「し」字状の区切りを施文する。口縁内側に段を有す。内面には3条の横位沈線を巡らし、上位1、2段の沈線間に細い斜位の刻目を施す。内外面ともに磨き、黒色処理。
第56図	12665	深鉢	(14.2)	—	(20.6)	12.7	器外面：黒褐 10YR3/2 90%、明赤褐 5YR5/6 10% 器内面：黒褐 7.5YR3/1 80%、明赤褐 5YR5/6 15%、にぶい黄橙 10YR6/3 5%	①細砂：多量石英・チャート・黒色粒②粗砂：微量チャート・結晶片岩	硬質	口辺～胴	2/3	加曽利B1式	3単位の波状口縁。口縁端部が内湾し、内側に庇状の張り出しをもつ。口唇部と庇に一部刻みを加えている。外面は2条の沈線による横位区画帯。区画内に単節LR縄文を充填。内面は3条の横位沈線を巡らす。内外面ともに丁寧な磨き。
第56図	5866	深鉢	(26.6)	—	(23.6)	25.2	器外面：黒褐 10YR2/2 90%、灰黄褐 10YR4/2 10% 器内面：黒褐 10YR3/2 50%、にぶい黄褐 10YR5/3 50%	①細砂：多量石英・黒色鉱物・白色粒②粗砂：少量チャート③小石：微量結晶片岩	硬質	口辺～胴	1/3	堀之内2～加曽利B1式	6単位の突起になると推定される。円孔を穿ち、突起内面に文様施文。正面観が意識され、1ヶ所の突起のみ半円形を呈し、円孔も2ヶ所穿たれている可能性がある。外面に4条の横位沈線。突起中央から、ややずれた場所に縦位の区切り文。内面は2条の横位沈線を巡らす。
第56図	16476A	鉢	12.6	7.6	7.6		器外面：橙 7.5YR6/8 70%、褐灰 7.5YR6/2 30% 器内面：黒褐 10YR3/2 50%、にぶい黄褐 10YR5/3 50%	①細砂：多量チャート・中量白色粒・少量片岩②粗砂：少量チャート・少量白色粒	硬質	口辺～底	完形	加曽利B1式	平縁。口唇に沈線及び細刻目文。外面は多条沈線を施文する。底部網代痕。内外面磨き。
第56図	5324	小形深鉢	(11.4)	(5.8)	14.2	8.4	器外面：暗灰黄 2.5Y4/2 55%、黒 N1.5/ 45% 器内面：黄褐 2.5Y5/3 50%、黒 5Y2/1 50%	①細砂：多量石英・黒色粒・白色粒・結晶片岩②粗砂：少量チャート	硬質	口辺～底	ほぼ完形	堀之内2～加曽利B1式	上面形は丸みを帯びた三角形。3単位の波状口縁で、波頂部に突起を有する。突起外面中央に円形の粘土塊を貼付し、円形の刺突を加える。刻みのある紐線文と沈線による横位区画帯。単節LR縄文を充填後、突起下の部分を一部磨り消す。口縁部内面に1条の横位沈線を巡らす。底部網代痕。内外面ともに丁寧な磨き。
第56図	15059	小形深鉢	(12.2)	6.0	(16.3)	9.8	器外面：黒 7.5Y2/1 90%、にぶい黄橙 10YR6/4 10% 器内面：黒褐 2.5Y3/1 90%、橙 7.5YR7/6 10%	①細砂：少量石英・結晶片岩・白色粒②粗砂：少量石英・チャート	硬質	口辺～底	2/3	加曽利B1式	上面形は丸みを帯びた菱形と推定される。4単位の波状口縁。口唇部に1条の沈線を巡らす。外面は、3条の横位沈線と縦位区切り文。単節LR縄文を充填。沈線は、一定の深さと幅で均一に引かれている。区切り文は、波状の下に4単位、波状間に4単位の計8単位である。区切り文部分の上下の沈線は「U」字状に屈曲する。底部網代痕。内外面磨き。
第57図	11456	注口	(13.6)	—	(7.6)	—	器外面：にぶい褐 7.5YR5/3 90%、にぶい赤褐 2.5YR5/4 10% 器内面：浅黄橙 7.5YR8/4 80%、灰褐 7.5YR5/2 20%	①細砂：多量チャート・中量白色粒②粗砂：中量チャート・中量白色粒	硬質	口辺～胴上	1/6	加曽利B1式	遺存部では把手、突起等はみられない。口唇部は外縁に1条の沈線を巡らし、外縁に段を作り出す。外面は口縁部に4条の横位沈線を巡らせる。胴部上位に4条、中位5条の横位沈線を巡らし、各沈線間には縄文LRが施される。上位と中位の沈線間に「の」字状の沈線文が施される。内外面ともに磨き。胴部内面はナデ様。
第57図	12450	小形深鉢	(13.7)	—	(17.9)	12.6	器外面：黒 2.5Y2/1 80%、明赤褐 5YR5/6 15%、黒 N2/ 5% 器内面：黒 N1.5/ 95%、明赤褐 5YR5/8 5%	①細砂：多量石英・黒色鉱物・結晶片岩・白色粒・赤褐色粒②粗砂：少量チャート	硬質	口辺～胴	1/2	加曽利B1式	3単位の波状口縁で、波頂部に突起を有する。口縁端部はやや内湾し、突起脇の口唇部に、部分的に刻みが確認される。口縁部内側に庇状の張り出しを持つ。外面は2条の横位沈線による横位区画と単節LR縄文充填。補修孔有り。内面は3条の横位沈線を巡らす。
第57図	13378	浅鉢	(25.9)	8.1	15.9	22.6	器外面：にぶい黄褐 10YR5/4 30%、灰黄 2.5Y7/2 30%、黒 N2/ 30% 器内面：明黄褐 10YR7/6 45%、黄橙 10YR8/6 45%、黒 N2/ 10%	①細砂：多量石英・結晶片岩・白色粒・海綿骨針②粗砂：少量チャート・赤褐色粒	硬質	口辺～底	ほぼ完形	加曽利B1式	上面形は丸みを帯びた二等辺三角形。3単位の突起を有する波状口縁。口縁端部は内湾。口唇部は連続切り込みにより小波状となる。外面無文。突起の下に円孔を穿つ。口縁内側に庇状の張り出しを持つ。庇の上の屈曲部には、突起ごとに円形の刺突が7～9個加えられる。内面は4条の横位沈線を巡らし、各突起の下部分には「し」字状の区切り文を施文する。底面網代痕。内外面ともに磨き。
第57図	7931	注口	10.1	(7.2)	(19.7)	15.5	器外面：橙 5YR6/8 90%、灰 N4/ 10% 器内面：暗灰黄 2.5Y5/2 90%、橙 7.5Y6/6 10%	①細砂：多量石英・結晶片岩・白色粒②粗砂：少量チャート・赤褐色粒	硬質	口辺～底	ほぼ完形	加曽利B1式	注口部欠損。2単位ずつの把手と小突起。外面は4単位の文様構成。横位沈線文、S字文、円形刺突。磨耗が著しい。口縁部はやや内湾する。底面に擦れ。
第57図	5175	注口	(16.2)	8.0			器外面：灰褐7.5YR5/2 器内面：にぶい橙7.5YR7/3	①細砂：多量②粗砂：少量③小石：少量	硬質	注口のみ	1/6		かなり大形の注口。

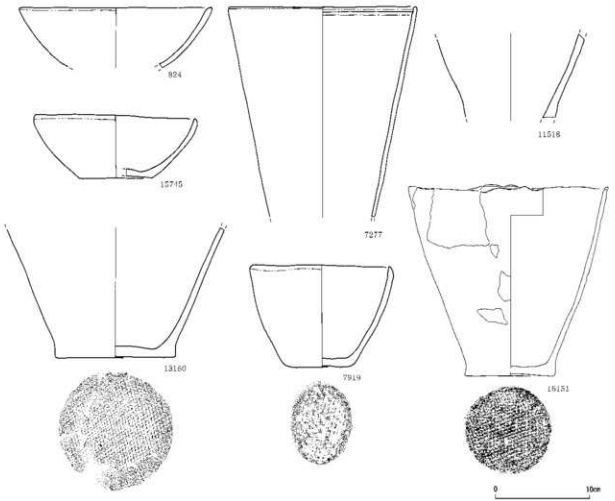


第57図　遺構外出土土器(9)

第58図　遺構外出土土器(8)

第23表　遺構外出土土器観察表(6)

図版番号	No	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	胴最大径	色調	胎土	焼成	残存部位	残存率	時期・型式	備考
図54(8)	4811	注口	(11.1)	—	(8.0)	—	器外面：浅黄 2.5Y8/3 95%、黒 10YR2/1 5% 器内面：灰黄 2.5Y7/2 98%、褐灰 10YR6/1 2%	①細砂：中量 チャート・中量黒色粒・中量白色粒(粗砂：混めるれず	硬質	口辺～胴	1/4	加曽利B1式	1列の肥手（刺方とも矢羽）と1列の突起を有する。突起下方に孔が穿たれる。口唇部は上端で張り出部に刻み、外縁部に段を作り出す。外縁刻部には刻目が施される。外面は口縁部や以下、下部にまるの横位沈線を巡らし、各沈線間には刻目が施される。胴部は多条沈線と粗雲により、文様が構成される。内面は口縁部と端に「屈」状の張り出しを有する。内外面ともに磨き。 ※口2次焼。肥手は施文や焼成の状況から口辺上方の口縁部に付されていた状況が与かがえる。
図54(8)	3646	深鉢	(30.3)	—	(19.6)	—	器外面：にぶい褐 7.5YR5/4 20%、灰黄褐 10YR4/2 80% 器内面：灰黄褐 10YR4/2 70%、黒褐 10YR3/1 30%	①細砂：多量 チャート・多量の色粒 ②粗砂：多量チャート	硬質	口辺～胴	1/3	加曽利B2～B3式	4単位の波状口縁。外面は刻目を加えた1条の横位沈線を口縁部の形状に沿って巡らせる。その下方には沈線による弧い楕子状文が施される。内外面ともに磨きの痕跡がみられるが、かなり荒れている。
図54(8)	10701	注口	(9.4)	—	(22.4)	18.3	器外面：橙 5YR6/8 50%、褐灰 10YR4/1 50% 器内面：灰褐 7.5YR6/2 80%、橙 5YR7/6 20%	①細砂：多量石英・白色粒 ②粗砂：少量 チャート・結晶片岩	硬質	口辺～胴下	2/3	加曽利B1式	注口部欠損。土単位肥手。口唇部は尾縁を1条巡らす。外面は4単位の文様構成になると推定される。横位沈線文。沈線間に「の」字状文。内外面ともに磨き。



第59図　遺構外出土土器(1)

第24表　遺構外出土土器観察表(7)

図版番号	No.	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	胴最大径	色調	胎土	焼成	残存部位	残存率	時期・型式	備考
第59図	824	鉢	20.2		(6.4)	—	器外面：灰褐5YR6/2 器内面：灰褐5YR6/2	①細砂：多量②粗砂少量	硬質	口辺～胴下	1/3	加曽利B1式	無紋
第59図	15745	鉢	17.0	(7.8)	6.6		器外面：にぶい橙7.5YR6/3 器内面：灰褐7.5YR5/2	①細砂：少量②粗砂：多量	硬質	口辺～底	2/3	加曽利B1式	無紋
第59図	13150	深鉢		12.6	(13.8)		器外面：明赤褐5YR5/8 器内面：褐灰10YR5/1 80%、褐灰5YR4/1 20%	①細砂：少量②粗砂：多量	硬質	胴下～底	2/3		胴下部無紋
第59図	7277	深鉢	19.6		(22.2)		器外面：灰褐7.5YR6/2 器内面：灰褐7.5YR6/2	①細砂：多量②粗砂少量	硬質	口辺～胴下	1/3	堀之内2式	無紋、内面に沈線を巡らす。外面ケズリ。磨り。
第59図	7919	鉢	14.6	9.2	10.8		器外面：にぶい橙7.5YR6/4 90%、褐灰7.5YR4/1 10% 器内面：にぶい橙7.5YR5/4	①細砂：多量②粗砂：中量	硬質	口辺～底	1/2推定		無紋
第59図	11518	深鉢			(9.2)		器外面：にぶい橙7.5YR6/4 器内面：にぶい橙7.5YR6/3	①細砂：多量②粗砂多量	硬質	胴下～底	1/3		無文
第59図	16151	深鉢	21.0	9.5	20.2	—	器外面：橙　5YR6/6　60%、黒　N2/　10%、灰褐　7.5YR5/2　20%	①細砂：多量チャート・中量白色粒②粗砂：少量チャート	硬質	口辺～底	2/3	加曽利B1式	不明瞭なゆるい波状。内外面無文。底面網代痕。内外面ともに磨き。外面は焼熱により荒れている。部分的にスス様の炭化の影響が認められる。

第１群土器　前期後半
第２群土器　後期前半
ａ類　称名寺式～堀之内１式期
ｂ類　堀之内２式期～加曽利Ｂ１式期
ｃ類　加曽利Ｂ１式期
ｄ類　加曽利Ｂ１式期～加曽利Ｂ２式期
第３群土器　後期後半～晩期

第１群土器

204・205は多条縄文を施文する。

第２群土器

ａ類　31は沈線の区画文に連続刺突文を施文する。８・44・47・52・55・67・65は頸部でくびれるキャリパー形の深鉢。胴部全面に縄文を施文し、頸部から垂下する沈線、刺突文と波状沈線の組み合わせで施文される。

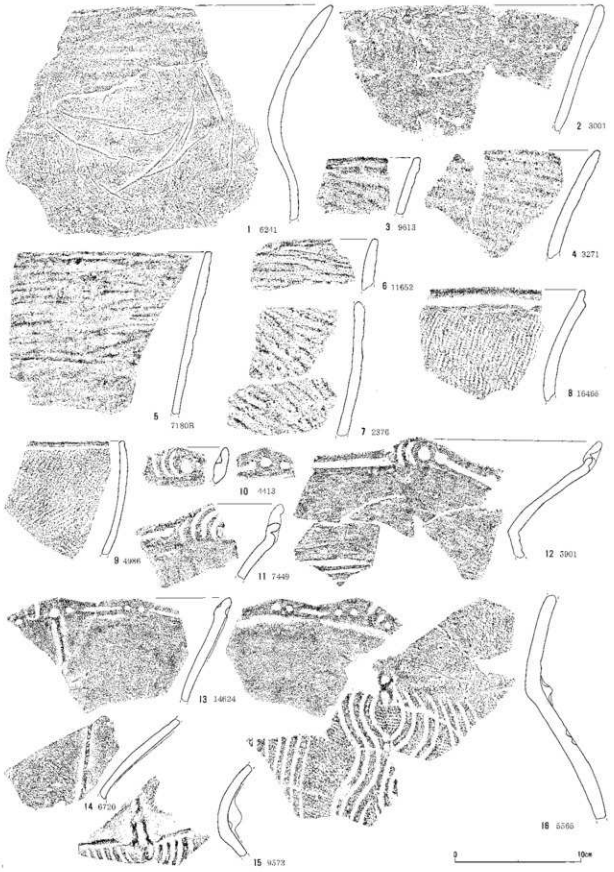
ｂ類　１～７、10～16は胴部の肩が張り、頸部がくの字に括れ、緩やかに外反しながら開く深鉢形。１～７の口縁部は無文で、10～13口縁部は高まりを持つ緩やかな波状口縁で、12・13では１条の沈線を巡らし、高まり部分は刺突文と弧状沈線で構成施文される。頸部は「８」字貼付、多重の弧状、波状沈線の組み合わせで施文される。13～15は口縁部から隆線が垂下する。16は地文縄文。32・33・49・50・53は同様の構成で、胴部に刻みを持つ隆線が垂下する。堀之内１式期。58・59・60～64・68・70～72は垂下する沈線、多重の弧状沈線で構成される。37は波状口縁で、細隆線がＸ字状に交叉する。９・69は緩やかに内向する鉢形。地文縄文。９は口縁部に沈線を巡らす。17・19～22口縁に向かって直線的に広がる器形で17・20は無文。口唇内側に沈線を巡らす。19・21・22は胴部に沈線を巡らし、斜行沈線で区画する。口縁に向かって外反しながら開く器形。26・29・30・36・66は多重の弧状沈線で胴部文様帯を構成する。38・42・43・52・54は胴部に幾何学文の区画文様帯を構成し、縄文を充填する。47は多重の平行沈線文を巡らす。76～80・84は平縁。87・96は波状口縁。２本の刻みを持つ隆線を巡らし、「８」字状の貼付文で結ぶ。その下部に横位の平行沈線と充填縄文の文様帯を構成する。81は波状口縁。高まりから隆帯が垂下する。90・93・94・109～112・115～119・121・122・297は平縁。刻みを持つ隆線を巡らし、「８」字貼付文。沈線と充填縄文による幾何学文を施文する。139・140・152・156は多重三角文などの幾何学文帯を施文する。142・154・161・165～180は沈線と充填縄文で三角形などの幾何学文帯を施文する。124～126・130・131・136・149・162・163は沈線と充填縄文による円弧文と三角形文などを中心に幾何学文帯を施文する。192・196・351は平縁。２条の沈線を巡らし、その間を２条１組の沈線で連続三角形文を施文する。196は地文縄文。412・413・414・429～431は注口土器片。412は突起のある環状の把手を有し、412・413・429は頸部に沈線を巡らし、沈線で区画文を施文する。414・426・430・431は沈線と充填縄文で幾何学文を構成する。

Ｃ類　73は口縁に穿孔を持ち高まりを持つ波状口縁。刻みを持つ隆線と充填縄文、沈線を巡らす。内側は多重沈線。82・83は口唇に刻みを持ち、刻目を持つ隆線を巡らす。内側は多重沈線。83は口唇に刻みを持つ突起と穿孔が施される。98～108・123は平縁。刻みを持つ隆線と充填縄文、沈線を巡らす。口唇部から垂下する刻みを持つ隆線、環状貼付文を付加する。

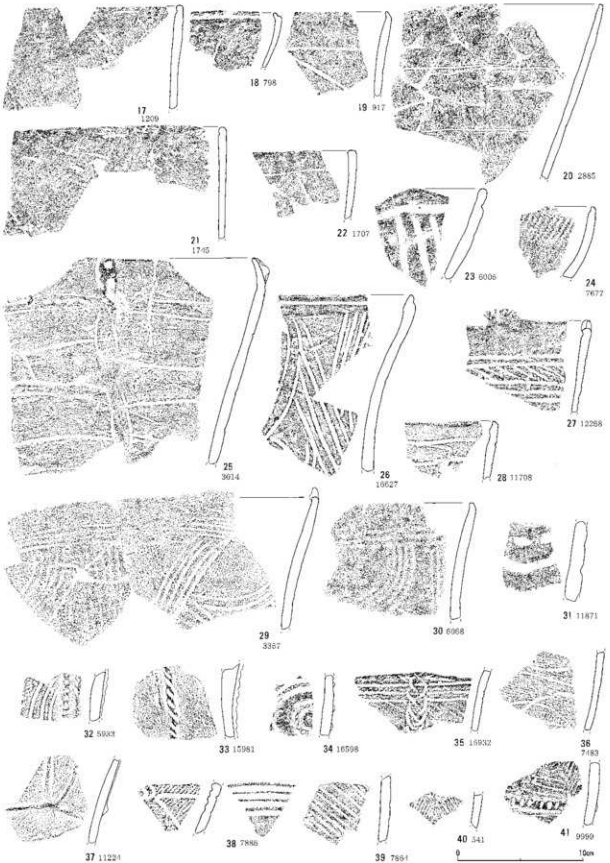
206は沈線を２条巡らし、沈線で弧状文を連続する。215・220・232も同様であるが、文様体内に縄文を充填する。

203は緩やかに膨らみながら立ち上がる鉢形。多重沈線と充填縄文で文様帯を構成する。補修穿孔。

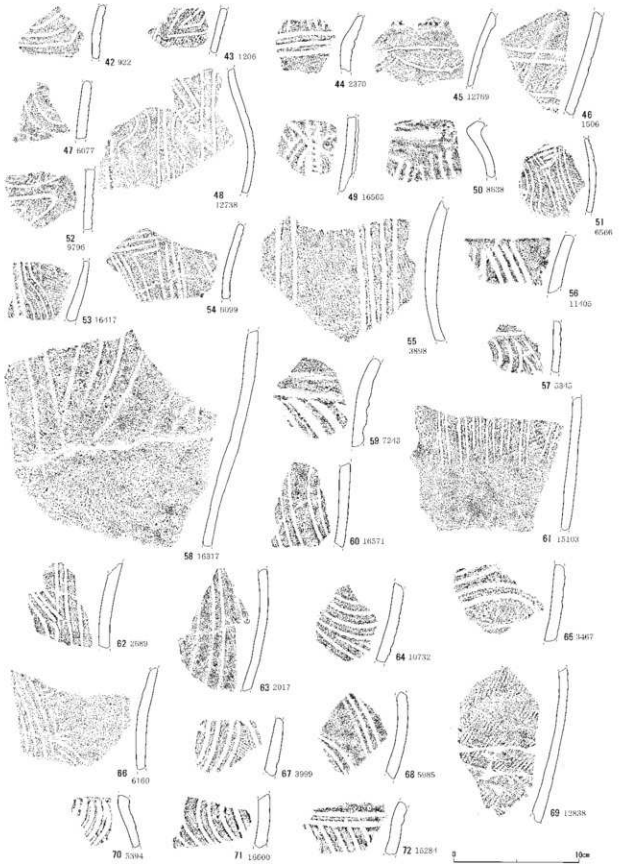
底部から直線的に立ち上がる平縁または波状口縁深鉢で、口縁部に刻みを持つものは内側に連続刺突文や多重



第60図　遺構外出土土器拓影図(1)

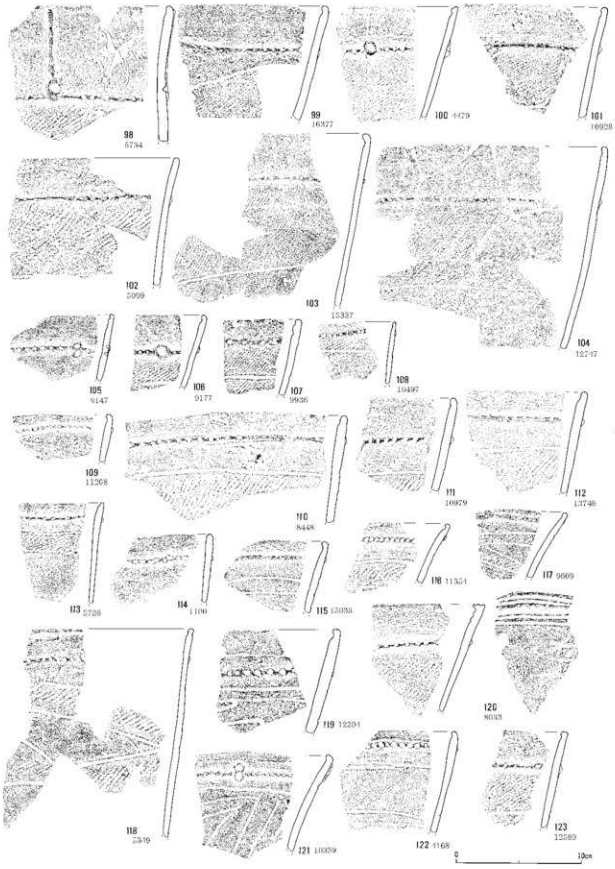


第61図　遺構外出土土器拓影図(2)

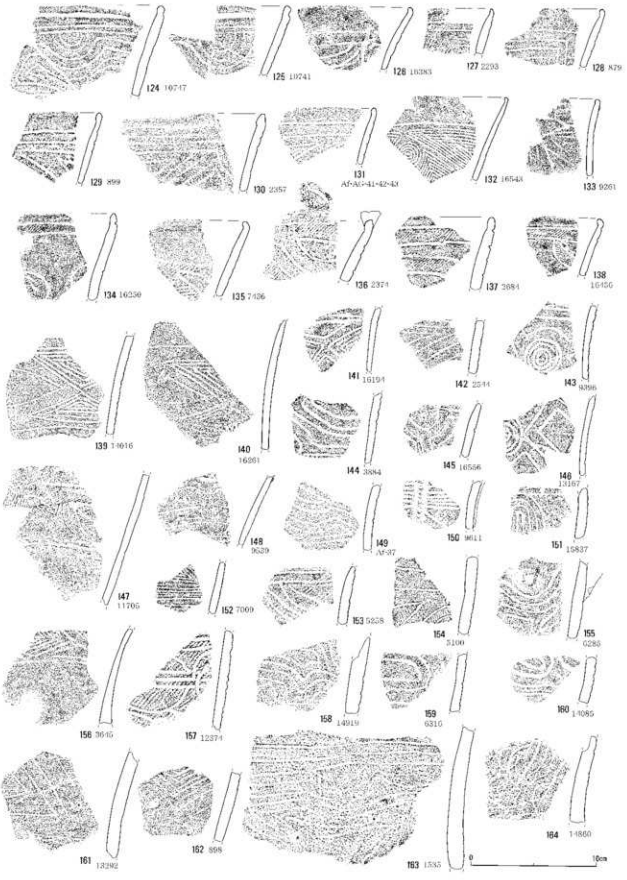


第62図　遺構外出土土器拓影図(3)

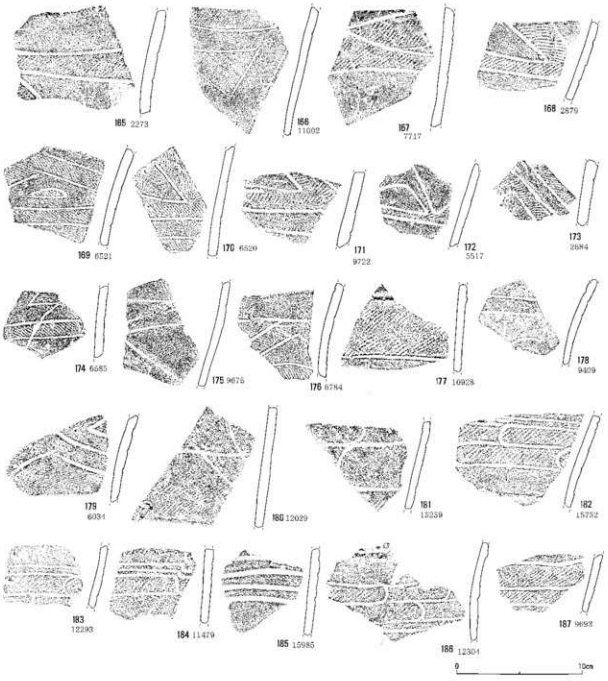
第63図　遺構外出土土器拓影図(4)



第64図　遺構外出土土器拓影図(5)



第65図　遺構外出土土器拓影図(6)

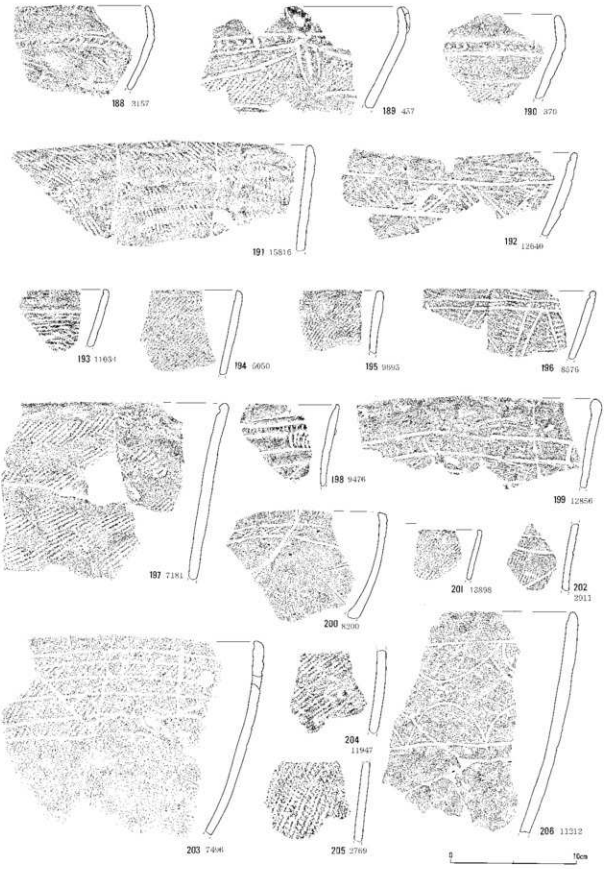


第66図　遺構外出土土器拓影図(7)

沈線文を施文する。刻みのないものは沈線、多重沈線が施文される。185は数条の沈線文が巡る。187・207・208は数条の平行沈線に充塡縄文の文様帯を構成する。274・275・280・283・284・308・310・311・330・334は平行沈線に充塡縄文、逆Ｌ字の区切り文。276・277・281・306は平行沈線にＬ字の区切り文。148・282・286・288・294・305～307は段違い状沈線文。181～183はＣ字状区切り文。186・279は逆Ｃ字区切り文。278は段違い状沈線と逆Ｃ字区切り文の構成。315・327・341は縦１条の区切り文。285・289・300・302・304はＳ字区切り文。

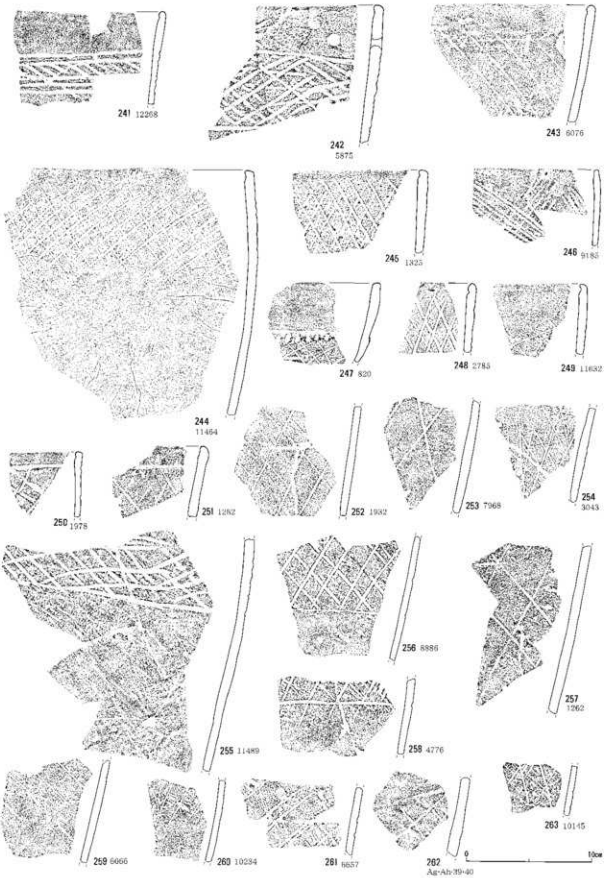
412～432は注口土器片。416・417・420・422・423は多重沈線を巡らし、渦巻き文などを施文する。427・428は多重沈線文に刻目文、刺突区切り文を施文する。432は平行沈線に充塡縄文。Ｃ字状区切り文が施文される。

379～385、386～411は浅鉢形。口唇に刻目文。内側に連続刺突文と多重沈線文が施文され、良く磨かれているものが多い。

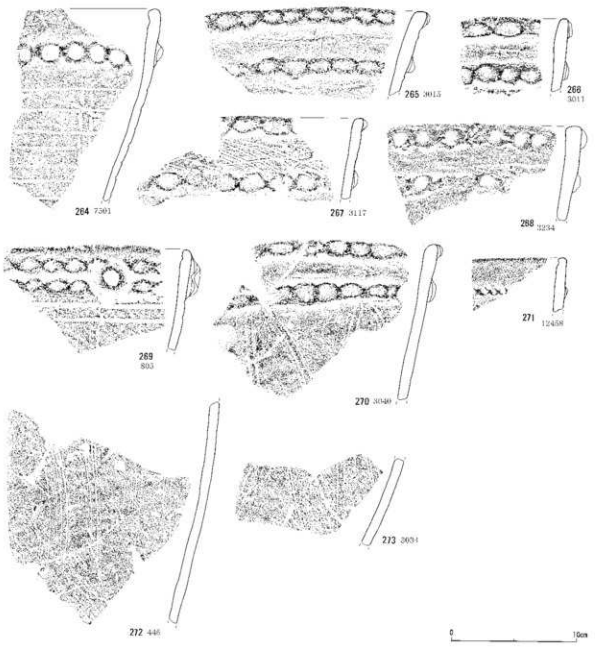


第67図　遺構外出土土器拓影図(8)

第68図　遺構外出土土器拓影図(9)



第69図　遺構外出土土器拓影図(1)



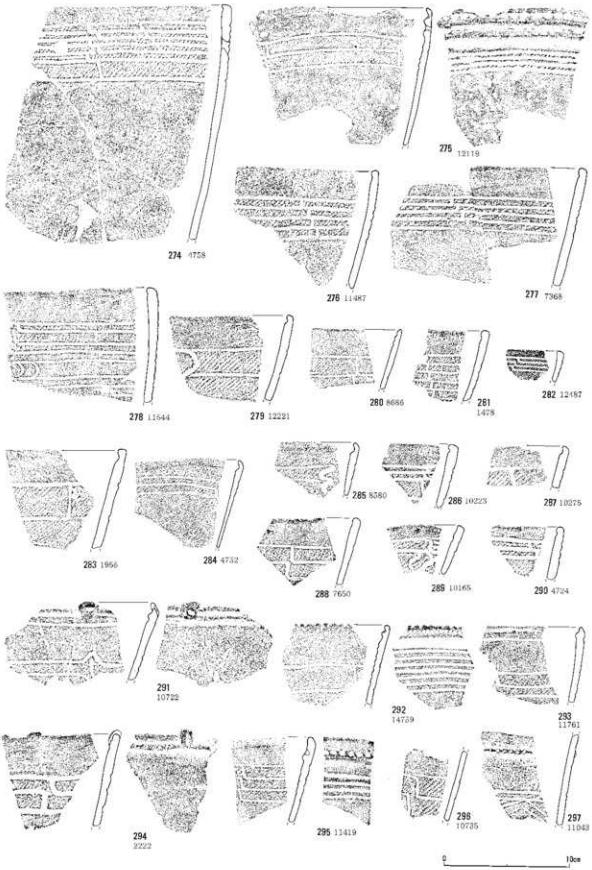
第70図　道構外出土土器拓影図(1)

d類　25・188～190は頸部がくの字状に内向する器形。屈曲部に平行沈線、連続刺突文。弧状の区画文で構成する。214は平行沈線と斜行沈線の構成。242・243・246～263は平行沈線に斜格子目文。244・245は斜格子目文。

264～273は組線文を巡らし、267は組線文間に斜行沈線を充填。胴部は多重平行沈線。区切り文。櫛状工具による簡略な弧状文。

第3群土器

433・434は大きな波状口縁で、口唇が内側へやや内向する。波状に沿って沈線文が施文され、434は高まり頂部から垂下する刻みを持つ隆線が施文される。435・437・438は折り返し口縁。435・438・439・440は条痕文。441～463は浮線網状文。441・445・447・450・452～456・460・461は深鉢形。442・444・457は壺形。445・446・448・449・451・458・459・462・463は鉢形。



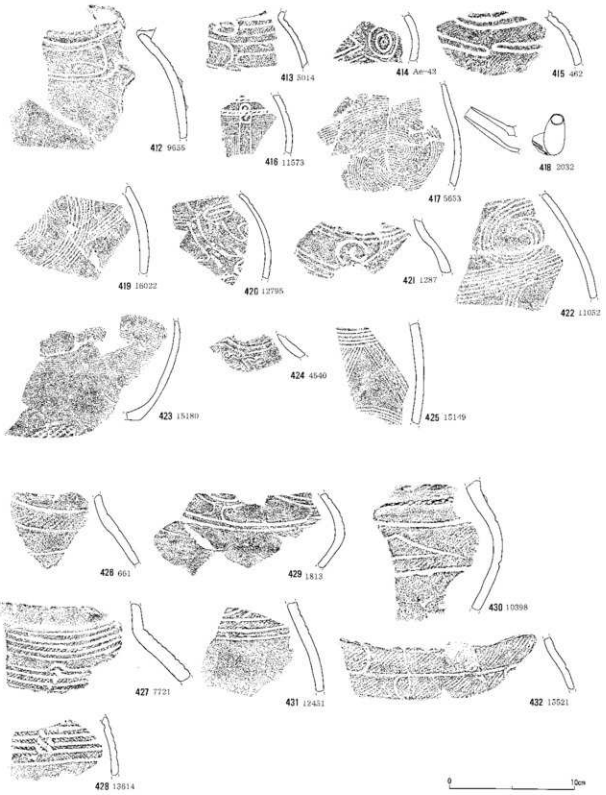
第71図　遺構外出土土器拓影図(2)

第72図　遺構外出土土器拓影図(3)

第73図　遺構外出土土器拓影図10

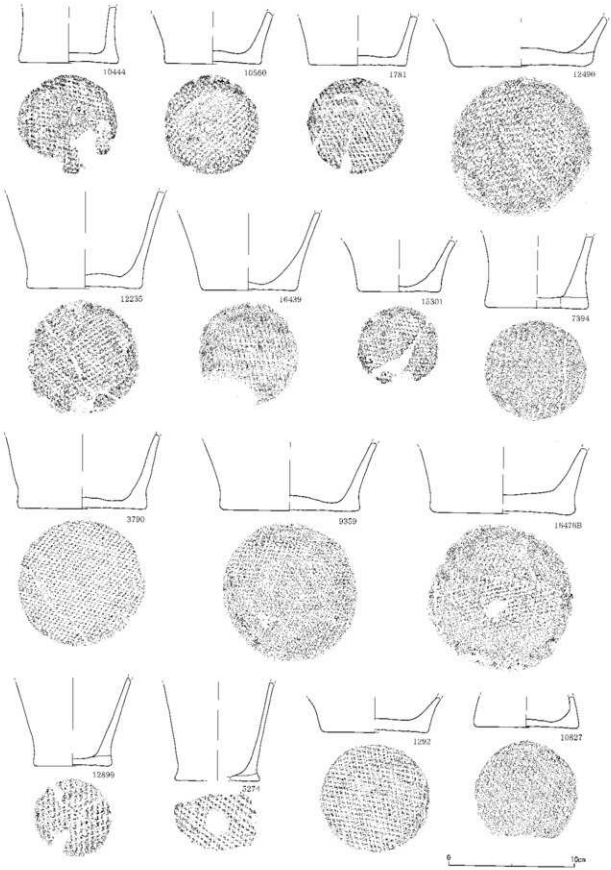
第74図　遺構外出土土器拓影図(5)

第75図　遺構外出土土器拓影図(10)

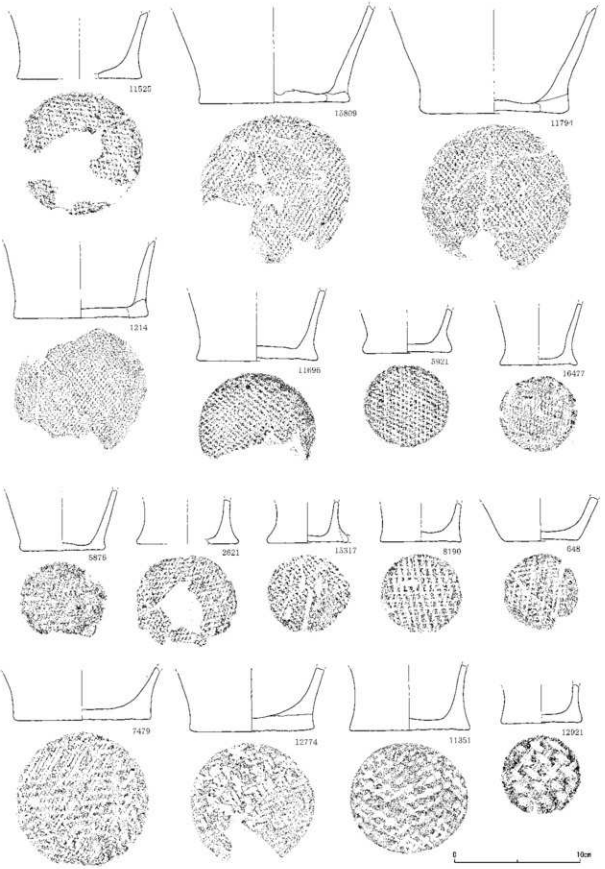


第76図　遺構外出土土器拓影図(1)

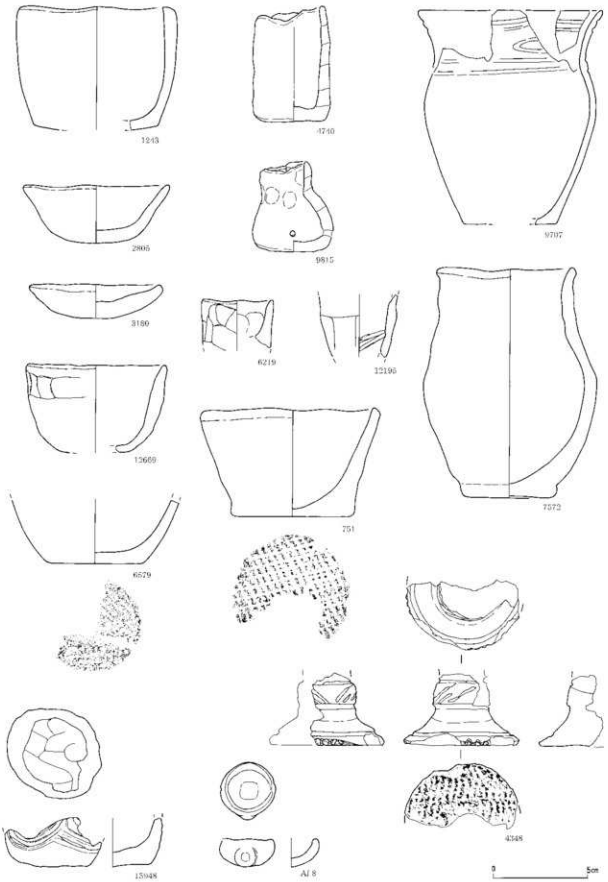
第77図　遺構外出土土器拓影図(8)



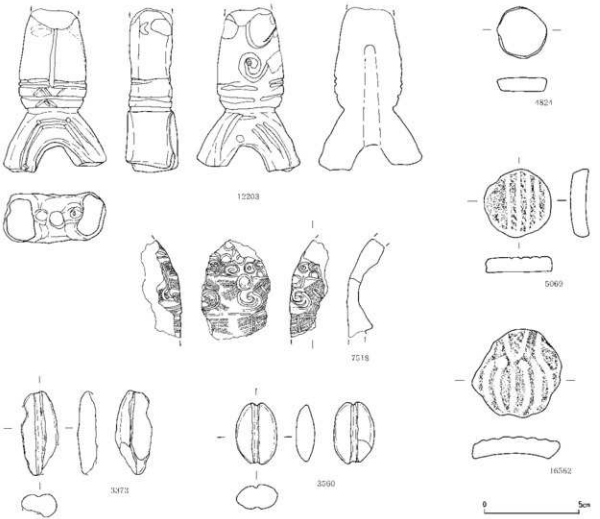
第78図　遺構外出土土器拓影図09



第79図　遺構外出土土器拓影図(2)



第80図　遺構外出土土器(2)



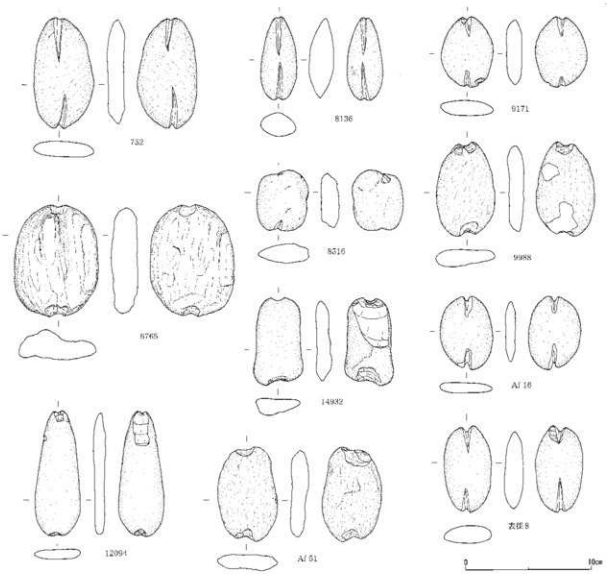
第81図　遺構外出土土器(3)

第25表　遺構外出土小形土器・土製品観察表(1)

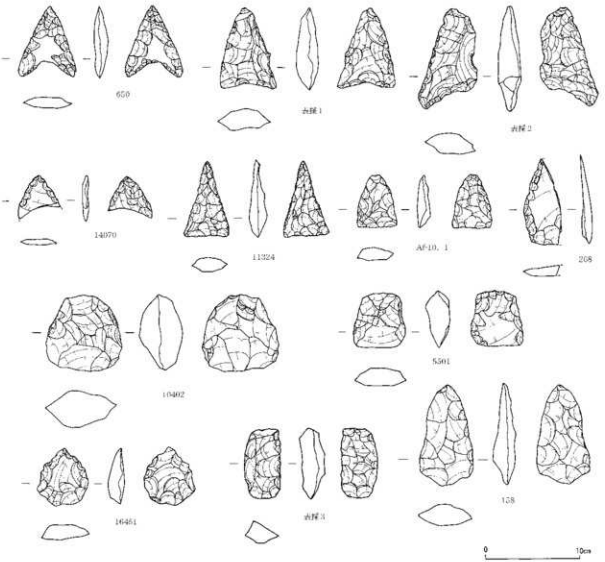
図版番号	No.	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	胴最大径	色調	胎土	焼成	残存部位	残存率	時期・型式	備考
第80図	1243	小形鉢(ミニチュア)	(7.3)	(6.5)	(6.5)	—	器外面：にぶい褐7.5YR6/3 60%、褐7.5YR4/3 40% 器内面：にぶい橙7.5YR6/4	①細砂：多量②粗砂：多量	硬質	口辺～底	2/3		不揃因な緩やかな波状口縁。無文。
第80図	4740	筒状鉢(ミニチュア)	3.4	3.5	6.0	4.1	器外面：灰褐7.5YR6/2 器内面：褐灰7.5YR4/1	①細砂：少量②粗砂：多量 ②小石：少量	硬質	口辺～底	完形		口縁はまるの状態。無文。
第80図	2985	小形鉢(ミニチュア)	7.5	—	3.0	—	器外面：橙7.5YR6/8 器内面：にぶい橙7.5YR6/3	①細砂：多量②粗砂：少量	硬質	口辺～底	1/3		口縁～頸く器形。無文。
第80図	9815	土製品	2.2	2.5	4.3	4.3	器外面：橙7.5YR6/6 器内面：にぶい橙7.5YR6/3	①細砂：多量②粗砂：少量	硬質	口辺～底	完形		口が窄まる壺形。頂部に指頭圧痕。底部に穿孔。
第80図	9097	小形鉢(ミニチュア)	(9.6)	(4.9)	11.3	9.0	器外面：明赤褐2.5YR5/6 50%、赤褐2.5YR2/1 50% 器内面：赤褐2.5YR2/1 90%、灰赤2.5YR4/2 10%	①細砂：少量②粗砂：多量	硬質	口辺～底	2/3	加曽利B1式	肩が張る器形。頂部に指頭圧痕。口縁に2個1対の貫通孔。口縁に「S」字状文。
第80図	3186	小形壺(ミニチュア)	7.0		1.8		器外面：橙7.5YR6/6 器内面：にぶい褐7.5YR6/3	①細砂：多量②粗砂：少量	硬質		ほぼ完形		無文。
第80図	6219	小形鉢(ミニチュア)	3.6	—	(2.7)	—	器外面：にぶい褐7.5YR6/2 器内面：にぶい褐7.5YR6/3	①細砂：多量	硬質	口辺～底	1/3		無文。
第80図	12195	小形鉢(ミニチュア)			(3.3)		器外面：にぶい橙7.5YR7/4 器内面：にぶい橙7.5YR7/4	①細砂：少量②粗砂：多量	硬質	口辺～胴	1/3		無文。
第80図	7572	小形鉢(ミニチュア)	7.0	4.7	12.1		器外面：にぶい橙5YR6/3 60%、明赤褐2.5YR5/8 20%、褐灰5YR4/1 20% 器内面：明赤褐5YR5/6	①細砂：少量②粗砂：多量	硬質	口辺～底	完形		無文。
第80図	12669	小形鉢(ミニチュア)	7.2		(4.2)		器外面：明褐灰7.5YR7/2 器内面：褐灰7.5YR6/1	①細砂：少量②粗砂：多量	硬質	口辺～底	1/3		無文。頂部横ナデ。
第80図	751	小形鉢(ミニチュア)	9.0	6.5	5.7	—	器外面：明赤褐5YR5/6 器内面：にぶい赤褐色5YR5/4	①細砂：多量②粗砂：少量。小石微量	硬質	口辺～底	完形		無文。底部網代痕。
第80図	6379	小形鉢(ミニチュア)	—	5.0	(3.5)	—	器外面：明赤褐 7.5R5/6 器内面：極暗赤褐2.5YR2/2	①細砂：少量②粗砂：多量 ②小石：少量	硬質	胴～底	2/3		無文。底部網代痕。
第80図	4348	高台脚		(6.0)	0.8		器外面：灰褐7.5YR6/2 器内面：灰褐7.5YR6/2	①細砂：多量②粗砂少量	硬質		2/3	加曽利B1式	沈線を巡らし、中央に縦沈線が2条引側状文。底部網代痕。
第80図	15948	小形鉢(ミニチュア)		(6.0)	(2.6)		器外面：褐灰7.5YR4/1 60%、明褐灰7.5YR7/2 40% 器内面：褐灰7.5YR5/1"	①細砂：多量②粗砂：少量	硬質	胴～底	2/3	加曽利B1式	多重沈線で弧状文を施文する。
第80図	Af-8	粘状土製品	2.6		1.5		器外面：にぶい褐7.5YR5/3 器内面：にぶい褐7.5YR5/3	①細砂：多量	硬質		完形？		小突起取付。

第26表　遺構外出土小形土器・土製品観察表(2)

図版番号	No.	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	色調	胎土	焼成	残存部位	残存率	時期・型式	備考
第81図	12203	土偶	(8.6)	5.4	2.6	外面：にぶい橙 7.5YR7/3	①細砂：多量	硬質	上部一部欠損	ほぼ完形	加曽利 B1式	体部中央に下部から差し込み穴。沈線で中央に平行沈線。渦巻き文で施文。
第81図	7518	土偶	(5.2)	(3.6)	(1.2)	外面：灰 褐7.5 YR6/2			肩 or 足	1/6	加曽利 B1式	地文縄文。沈線で渦巻き文や区画文？を施文。
第81図	4824	土製円盤		2.6	0.7			硬質		完形		
第81図	5069	土製円盤		3.6	0.8			硬質		完形		
第81図	16562	土製円盤	4.7	4.6	0.9	灰褐7.5YR4/2		硬質		完形	堀之内式	
第81図	3373	土錘	4.5	1.9	1.2							
第81図	3560	土錘	3.3	2.2	1.2							



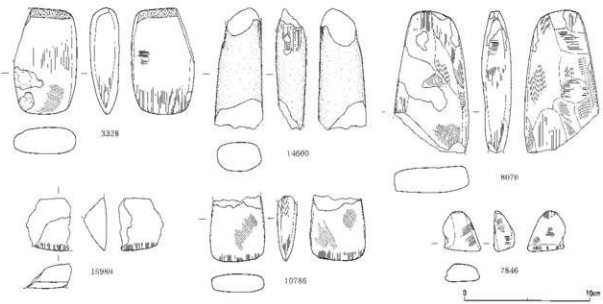
第82図　遺構外出土石器(1)



第83図　遺構外出土石器(2)

第27表　遺構外出土石器観察表(1)

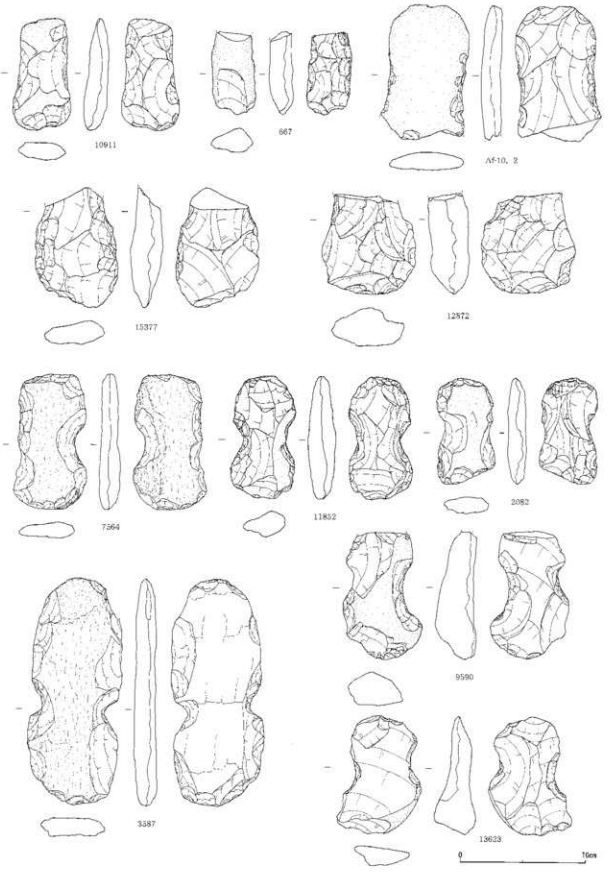
図版番号	器　種	遺物No	全　長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重　さ(g)	グリッド	X	Y	H	石　質	備　考
第82図	石　鏃	752	8.8	4.8	1.5	100	Ag-49	29657.309	−67286.575	67.391	結晶片岩	
第82図	石　鏃	6765	8.9	6.7	2.4	200	Ae-40	29665.532	−67323.203	67.568	結晶片岩	
第82図	石　鏃	8136	6.1	2.9	2.0	60	Ae-11	29665.722	−67436.516	67.721	緑色岩類	
第82図	石　鏃	8516	4.8	4.1	1.6	50	Ae-29	29667.769	−67366.733	67.492	砂　岩	
第82図	石　鏃	9171	5.1	4.2	1.2	50	Ae-39	29664.781	−67327.465	67.491	緑色岩類	
第82図	石　鏃	9988	7.5	4.7	1.4	80	Ae-56	29665.303	−67256.244	66.629	結晶片岩	
第82図	石　鏃	12094	10.0	3.7	1.0	60	Ae-16	29667.323	−67417.156	67.536	緑色岩類	
第82図	石　鏃	14932	7.0	3.9	1.4	60	Ag-31	29659.930	−67357.500	67.584	頁　岩	
第82図	石　鏃	グリッド一括	5.8	4.3	0.8	40	Af-16	—	—	—	結晶片岩	
第82図	石　鏃	グリッド一括	7.5	4.8	1.4	80	Ag-51	—	—	—	結晶片岩	
第82図	石　鏃	表採8	6.8	3.8	1.5	70		—	—	—	緑色岩類	
第83図	石　鏃	158	2.7	1.5	0.6	1.8	Af-52	29661.222	−67274.631	67.659	安　山　岩	
第83図	石　鏃	268	2.3	1.0	0.3	0.6	Ae-51	29664.414	−67276.619	67.768	安　山　岩	
第83図	石　鏃	650	1.9	1.5	0.3	0.6	Ae-53	29665.253	−67271.146	67.601	黒　曜　石	
第83図	石　鏃	5501	1.4	1.4	0.6	1.4	Ae-06	29659.292	−67459.590	67.498	赤　玉	
第83図	石　鏃	10402	2.0	2.0	1.1	4.7	Af-10	29663.665	−67443.957	67.581	赤　玉	
第83図	石　鏃	11324	2.0	1.2	0.4	0.6	Af-03	29659.056	−67469.989	67.368	チャート	
第83図	石　鏃	14070	1.1	1.2	0.2	0.2	Ae-32	29667.379	−67353.462	67.484	赤　玉	
第83図	石　鏃	16451	1.5	1.4	0.4	0.9	Af-31	29662.686	−67356.696	67.382	赤　玉	
第83図	石　鏃	1	1.4	1.1	0.4	0.5	Af-10付近	—	—	—	チャート	
第83図	石　鏃	表採1	1.8	0.9	0.6	1.4	—	—	—	—	赤　玉	
第83図	石　鏃	表採2	2.7	1.6	0.6	1.6	—	—	—	—	黒　曜　石	
第83図	石　鏃	表採3	2.2	1.5	0.6	1.1	—	—	—	—	黒　曜　石	
第84図	磨製石斧	3328	8.4	5.1	2.3	180	Ag-34	29657.684	−67346.682	67.629	緑色岩類	被熱
第84図	磨製石斧	7846	3.2	3.1	1.7	20	Ae-13	29664.228	−67430.196	67.637	蛇　紋　岩	研磨
第84図	磨製石斧	8076	(11.2)	(6.0)	2.4	240	Af-14	29663.421	−67425.829	67.627	蛇　紋　岩	
第84図	磨製石斧	10786	(5.2)	4.4	1.6	60	Ae-08	29666.014	−67450.761	67.551	蛇　紋　岩	
第84図	磨製石斧	14600	(9.6)	(3.8)	2.4	120	Af-30	29663.091	−67363.635	67.042	頁　岩	被熱
第84図	磨製石斧	15989	(4.2)	(3.6)	(2.0)	30	Af-31	29663.929	−67359.290	67.192	蛇　紋　岩	



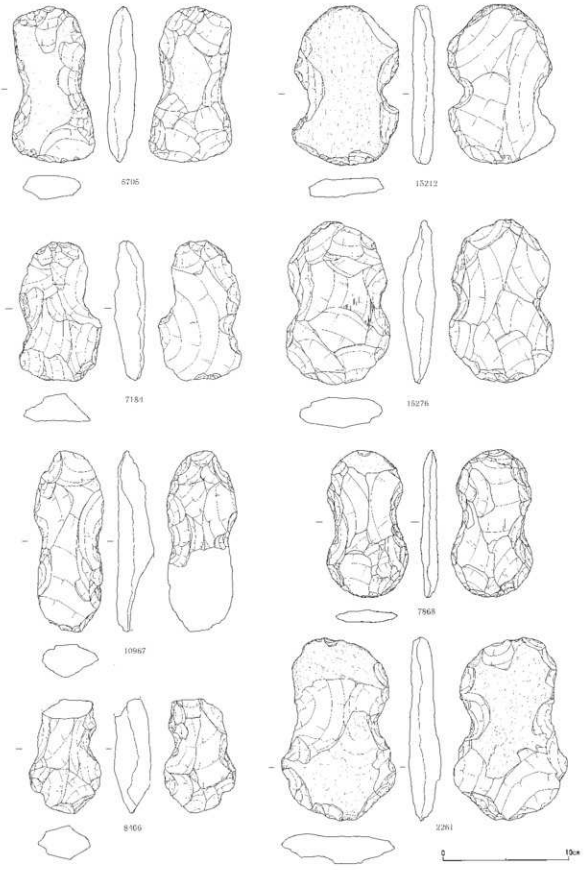
第84図　遺構外出土石器(3)

第28表　遺構外出土石器観察表(2)

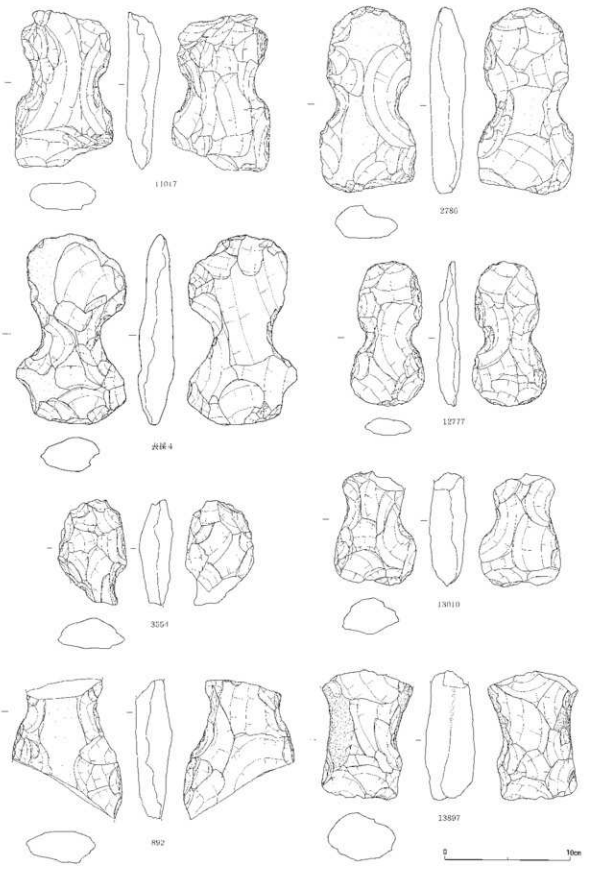
図版番号	器　種	No.	全　長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重　さ (g)	グリッド	X	Y	H	石　材	備　考
第85図	打製石斧	667	(6.6)	3.6	2.0	60	Af-51	29660.720	−67277.685	67.604	頁　岩	
第85図	打製石斧	2082	8.4	4.7	1.5	80	Ag-04	29659.394	−67464.657	67.466	硬質頁岩	
第85図	打製石斧	3587	18.0	7.5	1.9	310	Ag-38	29659.434	−67339.675	67.541	結晶片岩	
第85図	打製石斧	7264	10.8	5.8	1.7	130	Ae-11	29666.433	−67439.380	67.832	結晶片岩	
第85図	打製石斧	9590	(10.1)	6.3	3.4	180	Ae-50	29665.813	−67283.518	66.985	硬質頁岩	
第85図	打製石斧	10911	8.9	4.6	2.0	90	Af-12	29661.908	−67432.496	67.576	硬質頁岩	
第85図	打製石斧	11832	9.7	5.2	2.2	110	Ae-17	29666.710	−67415.600	67.772	凝　灰　岩	
第85図	打製石斧	12872	(8.0)	7.5	3.3	230	Ag-24	29658.402	−67386.667	67.606	頁　岩	
第85図	打製石斧	13623	9.4	6.7	3.3	140	Ae-29	29665.139	−67366.853	67.640	黒　色　頁　岩	使用・製作欠損品
第85図	打製石斧	15377	(9.5)	6.6	2.6	160	Ae-31	29666.151	−67357.038	66.993	硬質頁岩	
第85図	打製石斧	2	(10.6)	(6.9)	1.7	150	Af-10打返	—	—	砂	岩	
第86図	打製石斧	2261	14.5	9.1	2.6	350	Ag-01	29658.275	−67478.456	67.701	緑　色　岩　類	
第86図	打製石斧	5705	12.3	6.6	2.3	220	Af-04	29660.120	−67467.293	67.271	硬質頁岩	
第86図	打製石斧	7184	11.1	6.6	2.5	160	Af-05	29663.808	−67463.636	67.497	硬質頁岩	
第86図	打製石斧	7868	11.7	6.5	1.4	110	Ae-11	29667.272	−67439.044	67.119	頁　岩	
第86図	打製石斧	8466	(9.1)	5.7	3.0	140	Ae-34	29666.606	−67347.670	67.466	緑色凝灰岩	
第86図	打製石斧	10967	14.4	5.6	3.0	210	Ag-02	29658.251	−67474.289	67.367	砂　岩	
第86図	打製石斧	15212	12.6	8.5	1.9	230	Ae-31	29665.757	−67357.877	67.044	結晶片岩	
第86図	打製石斧	15276	12.9	8.3	2.6	280	Ag-39	29658.967	−67362.598	67.573	頁　岩	
第87図	打製石斧	892	(11.1)	(8.8)	2.9	250	Ag-42	29656.308	−67314.086	67.345	硬質頁岩	
第87図	打製石斧	2786	14.7	7.6	2.9	350	Ag-29	29657.030	−67402.626	67.454	緑　色　岩　類	
第87図	打製石斧	3554	(8.4)	5.5	2.7	120	Af-35	29660.239	−67343.874	67.655	頁　岩	
第87図	打製石斧	11017	13.5	7.8	2.6	300	Af-12	29661.880	−67434.147	67.601	頁　岩	
第87図	打製石斧	12777	11.5	5.9	1.8	120	Af-19	29663.134	−67406.263	67.371	ホルンフェルス	
第87図	打製石斧	13010	(9.1)	6.5	2.9	180	Af-27	29660.923	−67375.971	67.485	頁　岩	
第87図	打製石斧	13897	(10.3)	7.2	4.0	340	Af-28	29661.004	−67368.289	67.275	硬質頁岩	
第87図	打製石斧	表採4	15.1	8.7	2.9	320	—	—	—	—	硬質頁岩	
第88図	打製石斧	836	10.2	8.4	2.4	250	Af-48	29663.638	−67290.153	67.189	黒　色　頁　岩	
第88図	打製石斧	2399	10.6	9.0	2.6	220	Ag-16	29658.401	−67419.540	67.684	硬質頁岩	
第88図	打製石斧	6766	7.6	6.6	1.0	40	Ae-40	29665.948	−67323.569	67.535	頁　岩	
第88図	打製石斧	7291	(21.7)	10.7	1.7	420	Ae-03	29666.152	−67468.641	67.491	結晶片岩	
第88図	打製石斧	12751	(9.7)	9.3	3.2	230	Af-20	29662.361	−67402.925	67.567	硬質頁岩	
第88図	打製石斧	13060	(8.9)	7.2	3.0	180	Ae-26	29666.003	−67377.558	67.428	凝　灰　岩	
第88図	打製石斧	14348	(7.0)	6.8	2.7	140	Ae-32	29664.071	−67354.085	67.301	安　山　岩	
第88図	打製石斧	15211	(8.5)	7.6	2.1	130	Ae-31	29665.938	−67357.615	67.032	硬質頁岩	
第88図	打製石斧	表採5	(7.2)	5.7	1.2	60	—	—	—	砂	岩	
第89図	打製石斧	3534	13.7	7.4	1.8	180	Af-34	29660.475	−67346.467	67.596	ホルンフェルス	
第89図	打製石斧	6346	13.1	7.7	2.8	280	Ae-42	29665.616	−67315.367	67.091	安　山　岩	
第89図	打製石斧	9774	9.3	5.9	1.3	70	Af-53	29661.886	−67268.284	66.905	ホルンフェルス	未使用剥片
第89図	打製石斧	10123	13.1	8.5	2.5	260	Ag-01	29659.154	−67479.428	67.356	砂　岩	使用・製作欠損品
第89図	打製石斧	11677	13.8	9.8	2.5	330	Af-02	29660.803	−67474.507	67.391	デイサイト	使用・製作欠損品
第89図	打製石斧	12086	8.5	(5.1)	1.6	80	Af-16	29660.796	−67418.062	67.386	頁　岩	
第89図	打製石斧	12781	8.7	6.1	1.8	90	Af-22	29663.208	−67392.374	67.555	硬質頁岩	
第89図	打製石斧	12782	14.7	7.7	2.3	230	Af-22	29662.221	−67393.109	67.618	硬質頁岩	
第89図	打製石斧	13641	8.5	4.9	1.2	50	Ae-33	29667.311	−67349.177	67.358	硬質頁岩	礫熱
第89図	打製石斧	15388	12.7	6.3	1.8	140	Ae-31	29664.663	−67358.705	67.212	硬質頁岩	
第90図	打製石斧	3329	10.2	6.3	1.6	110	Ag-34	29657.296	−67346.672	67.647	硬質頁岩	
第90図	打製石斧	3553	(5.0)	5.8	1.3	50	Ag-35	29658.305	−67343.127	67.573	頁　岩	
第90図	打製石斧	7925	8.8	6.3	2.1	90	Ae-10	29667.066	−67440.680	67.707	頁　岩	
第90図	打製石斧	10009	9.5	5.1	1.4	70	Ae-09	29665.174	−67447.688	67.687	安　山　岩	未使用剥片
第90図	打製石斧	10454	18.9	13.0	5.3	720	Ae-07	29667.929	−67452.150	67.696	硬質頁岩	
第90図	打製石斧	11934	14.4	11.1	3.0	490	Af-16	29661.278	−67418.619	67.579	頁　岩	使用・製作欠損品、敲
第90図	打製石斧	13091	13.6	4.5	1.4	100	Af-35	29662.567	−67340.375	67.658	ホルンフェルス	
第90図	打製石斧	表採6	11.5	10.8	3.2	310	—	—	—	—	硬質頁岩	使用・製作欠損品



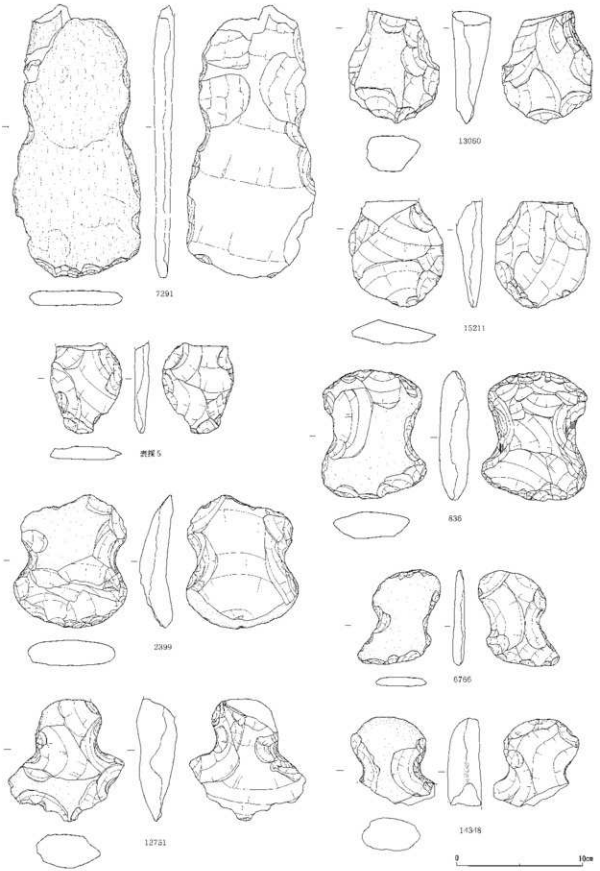
第85図　遺構外出土石器(4)



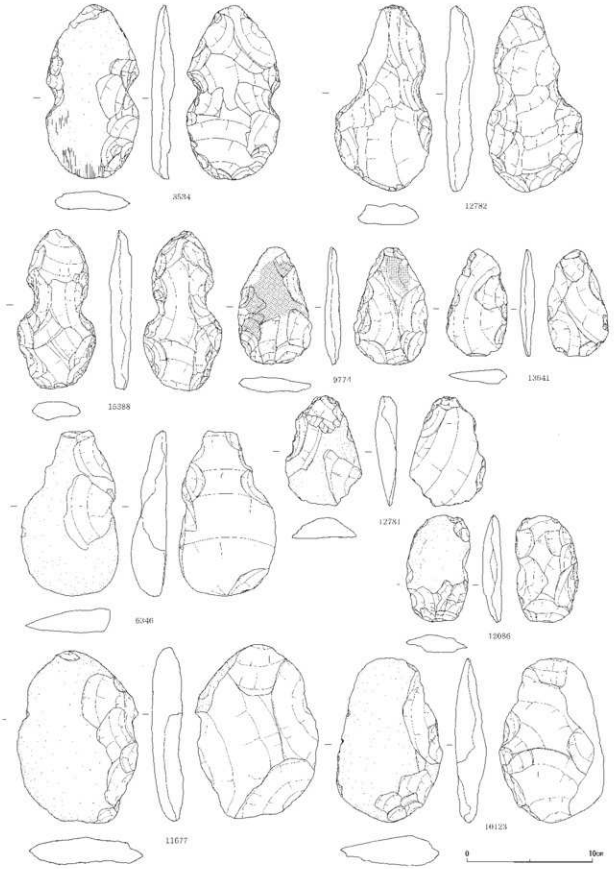
第86図　遺構外出土石器(5)



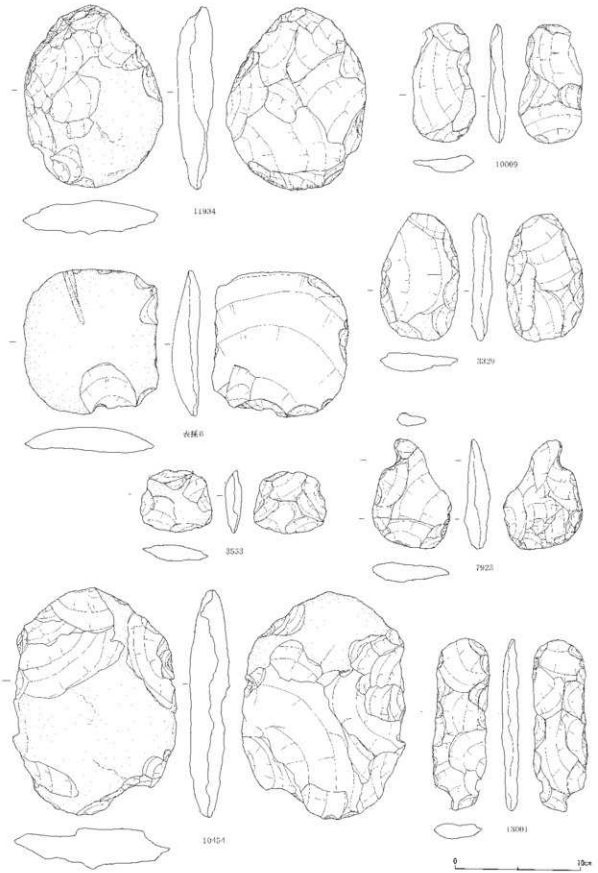
第87図　遺構外出土石器(6)



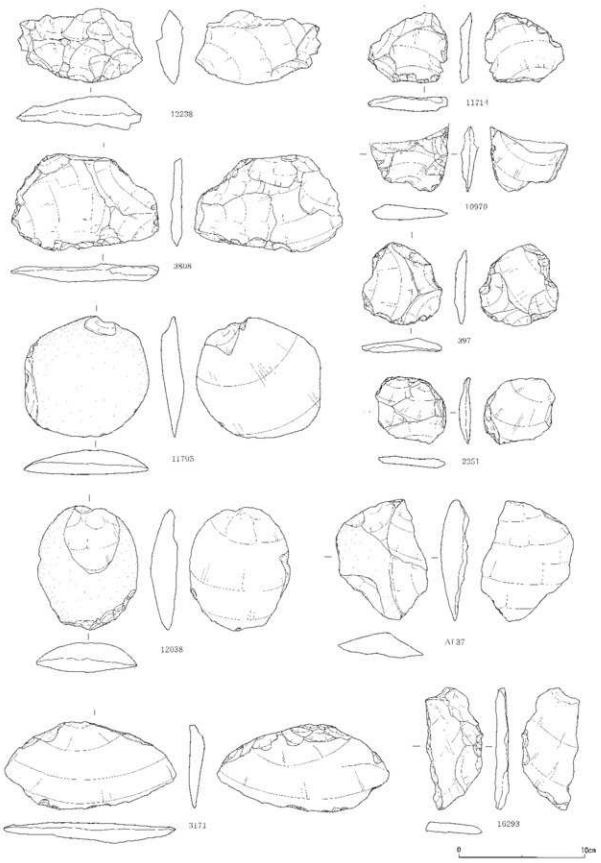
第88図　遺構外出土石器(7)



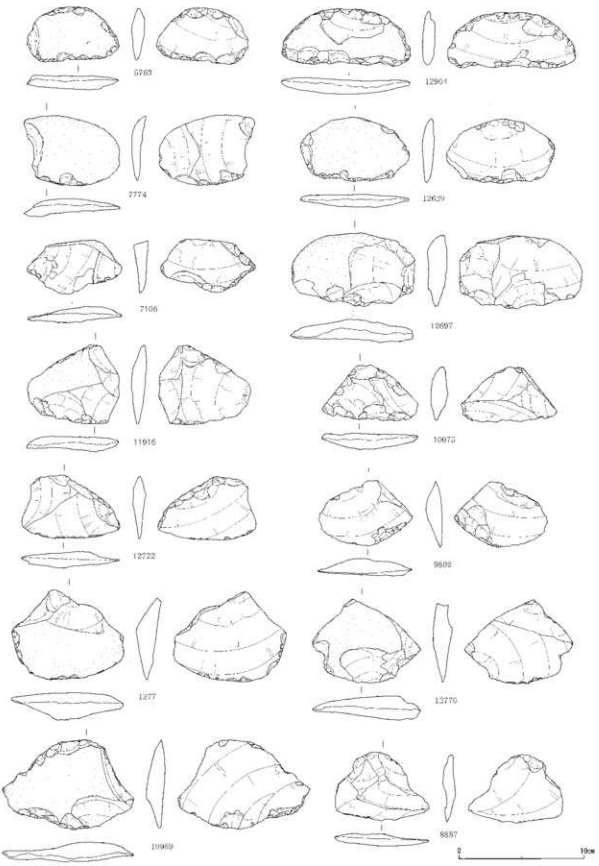
第89図　遺構外出土石器(8)



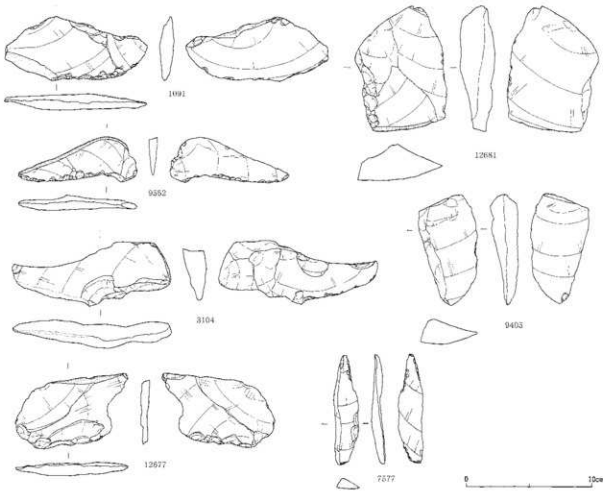
第90図　遺構外出土石器(9)



第91図　遺構外出土石器(10)



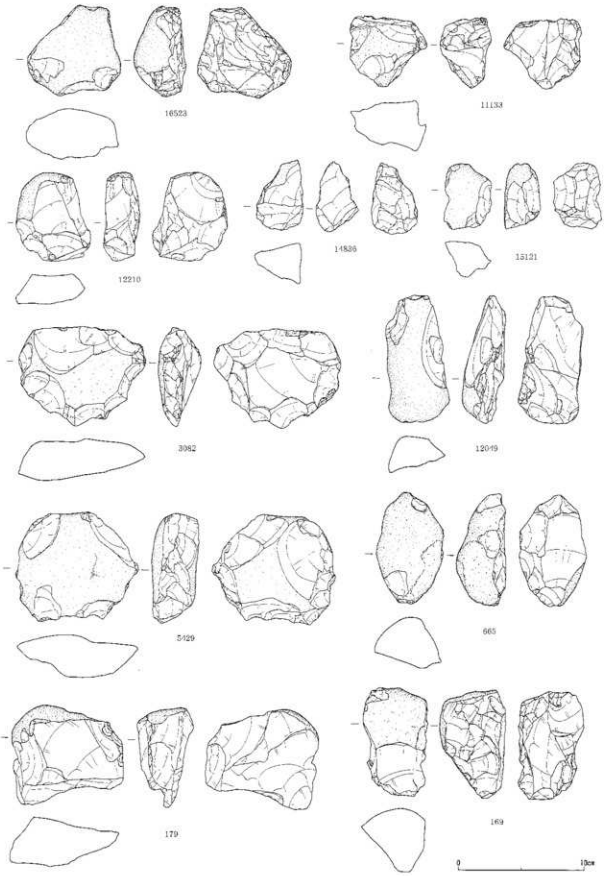
第92図　遺構外出土石器(1)



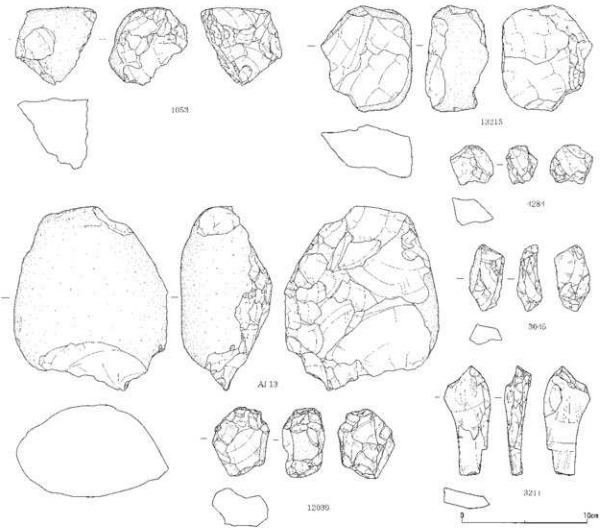
第93図　遺構外出土石器(2)

第29表　遺構外出土石器観察表(3)

図版番号	器　種	遺 物 No.	全　長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重　さ (g)	グリッド	X	Y	H	石　材	備　考
第91図	スクレイパー	397	6.6	6.4	1.2	40	Af-50	29661.556	−67281.658	67.638	頁　岩	
第91図	スクレイパー	2251	5.3	5.7	1.0	30	Af-01	29660.782	−67479.358	67.421	頁　岩	
第91図	スクレイパー	3171	7.1	13.6	1.6	120	Af-53	29663.576	−67270.038	67.085	ホルンフェルス	
第91図	スクレイパー	3808	7.7	11.7	1.5	110	Ag-46	29656.395	−67298.999	67.295	硬質泥岩	
第91図	スクレイパー	10970	5.2	6.2	1.3	30	Ag-01	29659.271	−67476.929	67.423	頁　岩	
第91図	スクレイパー	11714	5.6	6.3	1.3	40	Af-18	29660.317	−67410.932	67.687	頁　岩	
第91図	スクレイパー	11795	9.6	9.9	2.0	180	Ae-18	29665.107	−67411.073	67.810	頁　岩	
第91図	スクレイパー	12038	9.9	8.0	2.4	190	Ae-18	29666.214	−67409.733	67.453	安　山　岩	
第91図	スクレイパー	12238	5.9	10.2	2.7	120	Af-18	29663.911	−67409.745	67.497	緑色凝灰岩	
第91図	スクレイパー	16293	9.7	4.6	1.1	50	Ag-26	29659.679	−67377.235	67.594	硬質泥岩	
第91図	スクレイパー　グリッド一括	9.1	7.3	2.2	120	Af-37	—	—	—	硬質泥岩	
第92図	スクレイパー	1277	7.1	8.9	2.2	100	Ag-20	29657.788	−67403.745	67.792	頁　岩	
第92図	スクレイパー	5763	4.4	7.3	1.2	40	Af-06	29662.877	−67456.947	67.442	頁　岩	
第92図	スクレイパー	7106	4.3	7.6	1.3	40	Ae-07	29664.063	−67452.731	67.585	黒色頁岩	
第92図	スクレイパー	7774	5.6	7.6	1.4	50	Ae-08	29664.313	−67449.133	67.923	頁　岩	
第92図	スクレイパー	8887	5.4	7.5	1.0	40	Af-02	29663.072	−67475.121	67.438	頁　岩	
第92図	スクレイパー	9802	5.2	7.5	1.4	40	Ae-35	29664.678	−67263.742	66.726	頁　岩	
第92図	スクレイパー	10075	4.4	7.6	1.4	40	Ae-08	29667.300	−67450.051	67.700	黒色頁岩	
第92図	スクレイパー	10959	7.1	10.5	1.6	100	Ae-08	29665.204	−67449.791	67.665	頁　岩	
第92図	スクレイパー	11916	6.3	7.3	1.2	50	Ae-17	29666.375	−67415.490	67.717	硬質泥岩	
第92図	スクレイパー	12629	5.1	8.6	1.1	50	Af-20	29660.295	−67400.507	67.471	頁　岩	
第92図	スクレイパー	12697	5.9	9.8	1.8	100	Ae-36	29667.122	−67338.083	67.530	安　山　岩	
第92図	スクレイパー	12722	5.0	7.8	1.4	40	Af-19	29661.944	−67407.045	67.633	頁　岩	
第92図	スクレイパー	12776	6.7	8.6	1.9	90	Af-19	29662.705	−67406.278	67.553	頁　岩	
第92図	スクレイパー	12964	4.5	10.2	1.3	60	Ae-36	29664.391	−67338.680	67.600	頁　岩	
第93図	スクレイパー	12681	10.0	7.3	2.8	180	Af-20	29660.021	−67400.409	67.423	硬質泥岩	
第93図	スクレイパー	109	5.1	11.3	1.3	70	Ag-39	29658.896	−67325.970	67.813	硬質泥岩	
第93図	スクレイパー	3104	5.1	12.6	2.3	90	Af-53	29661.133	−67270.387	67.183	硬質泥岩	
第93図	スクレイパー	9403	8.8	4.7	2.3	80	Af-39	29662.777	−67327.092	67.563	硬質泥岩	
第93図	スクレイパー	9552	3.6	9.4	1.2	30	Af-52	29663.938	−67274.044	67.009	ホルンフェルス	
第93図	スクレイパー	12677	6.0	9.0	1.1	50	Ae-21	29664.328	−67399.727	67.446	頁　岩	
第93図	石　鏃	7577	8.7	2.0	1.0	50	Ae-13	29665.343	−67430.598	67.754	頁　岩	



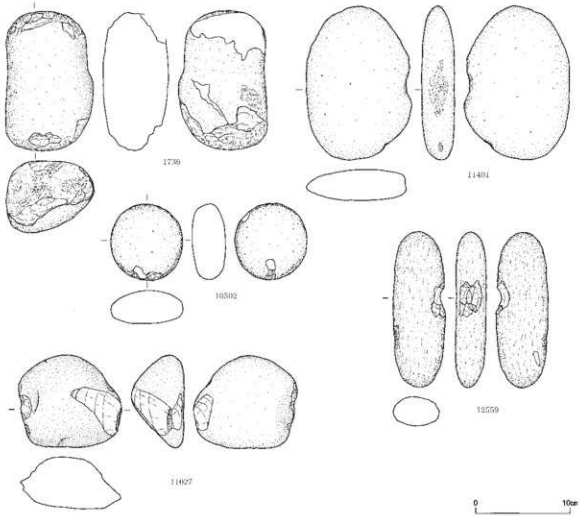
第94図　遺構外出土石器(3)



第95図　遺構外出土石器(4)

第30表　遺構外出土石器観察表(4)

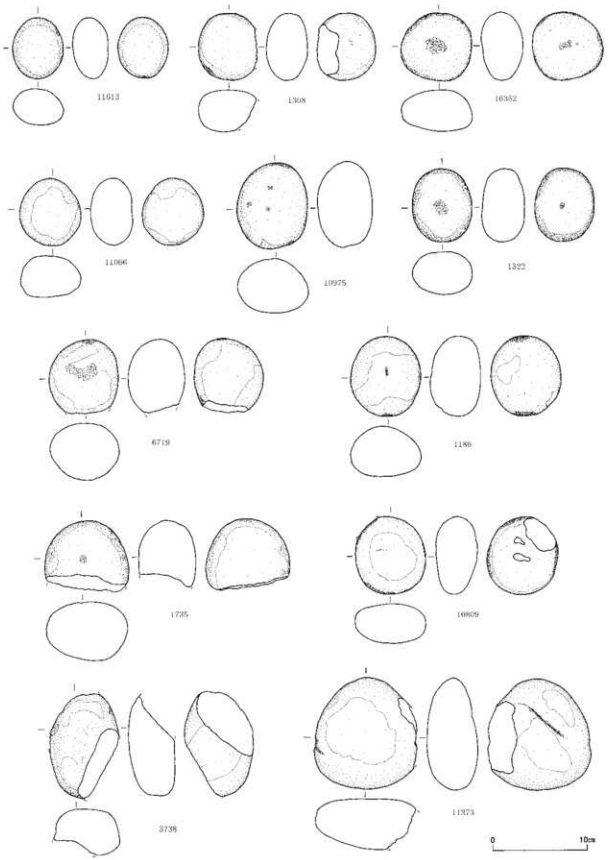
図版番号	器種	遺物No	全長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	グリッド	X	Y	H	石材	備考
第94図	石核	169	8.6	5.2	5.3	290	Af-52	29660.652	−67275.091	67.799	黒色頁岩	
第94図	石核	179	7.9	9.0	4.5	280	Af-52	29662.519	−67275.527	67.722	安山岩	
第94図	石核	665	8.9	5.4	4.0	200	Af-51	29661.453	−67277.364	67.703	安山岩	
第94図	石核	3082	7.9	10.1	3.4	270	Af-52	29661.090	−67274.569	67.265	硬質泥岩	
第94図	石核	5429	8.7	9.8	3.8	360	Ae-05	29667.075	−67460.487	67.529	硬質泥岩	
第94図	石核	11133	5.6	6.2	4.1	150	Af-02	29661.333	−67474.074	67.496	硬質泥岩	
第94図	石核	12049	10.1	5.1	3.4	180	Ae-17	29665.022	−67415.535	67.563	硬質泥岩	
第94図	石核	12210	7.0	6.0	2.9	160	Af-19	29661.746	−67404.956	67.459	硬質泥岩	
第94図	石核	14836	5.6	3.7	3.4	60	Af-30	29663.627	−67362.206	67.274	チャート	
第94図	石核	15121	5.2	3.8	2.9	65	Ag-30	29659.961	−67361.278	67.545	チャート	
第94図	石核	16523	7.2	7.5	4.2	260	Ag-28	29657.811	−67368.524	67.357	頁岩	
第95図	石核	1053	6.2	6.5	6.3	200	Ag-40	29657.595	−67323.780	67.856	頁岩	
第95図	石核	3045	5.3	2.8	2.0	20	Af-51	29662.166	−67278.566	67.458	黒曜石	
第95図	石核	3211	8.7	3.7	2.2	40	Ae-53	29665.681	−67269.229	66.991	黒曜石	
第95図	石核	4284	3.1	3.4	2.5	20	Af-04	29662.358	−67465.449	67.395	赤玉	
第95図	石核	12039	5.5	4.5	3.4	90	Ae-18	29666.855	−67409.666	67.527	頁岩	
第95図	石核	13215	8.4	7.2	5.0	315	Ae-35	29666.995	−67342.632	67.621	チャート	
第95図	石核	グリッド一括	14.6	12.3	7.3	1400	Af-13	—	—	—	頁岩	



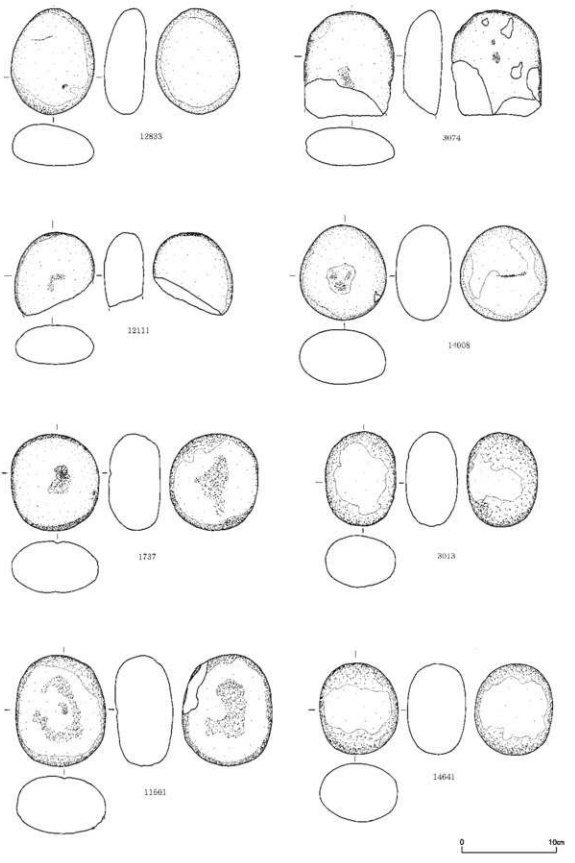
第96図　遺構外出土石器05)

第31表　遺構外出土石器観察表(5)

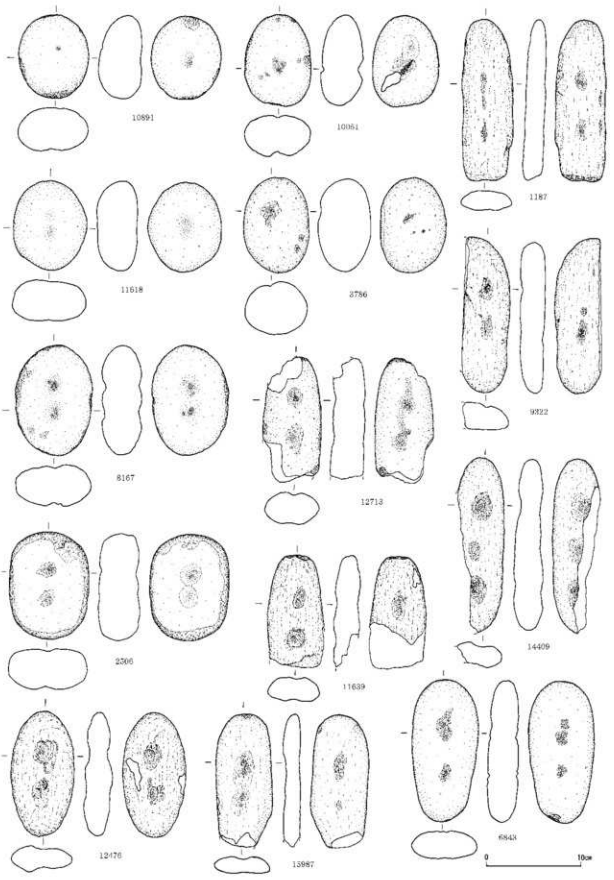
図版番号	器種	遺物No.	全長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	グリッド	X	Y	H	石材	備考
第96図	敲石	1736	14.7	9.5	7.6	1340	Ag-19	29656.783	−67404.077	67.736	安山岩	被熱
第96図	敲石	10502	8.1	7.7	3.5	310	Ae-09	29667.518	−67446.246	67.650	安山岩	
第96図	敲石	11027	9.9	11.0	5.7	740	Af-12	29661.004	−67434.150	67.514	頁岩	
第96図	敲石	11401	16.2	11.3	3.5	1000	Af-02	29660.639	−67472.895	67.342	安山岩	
第96図	敲石	12559	16.5	5.6	3.3	480	Ae-21	29660.043	−67399.348	67.493	結晶片岩	
第97図	磨石	1186	8.5	7.5	5.4	500	Af-49	29661.331	−67285.848	67.667	安山岩	
第97図	磨石	1308	7.2	(6.2)	4.4	260	Ag-19	29656.046	−67405.122	67.801	デイサイト	
第97図	磨石	1322	7.8	6.4	4.6	310	Ag-19	29657.609	−67405.855	67.704	凝灰岩	
第97図	磨石	1735	(7.7)	9.0	6.3	580	Ag-19	29657.176	−67404.135	67.730	砂岩	
第97図	磨石	3738	10.2	9.4	5.5	730	Ag-41	29657.667	−67322.168	67.728	緑色岩類	煤付着。
第97図	磨石	6719	(8.0)	7.4	6.1	450	Af-40	29661.561	−67323.365	67.594	安山岩	煤付着。
第97図	磨石	10809	8.3	7.5	4.4	380	Af-09	29663.646	−67445.243	67.561	閃緑岩	
第97図	磨石	10975	9.2	7.6	5.9	550	Af-01	29660.274	−67478.014	67.335	安山岩	
第97図	磨石	11066	7.2	6.6	4.5	300	Af-01	29661.488	−67476.094	67.328	流紋岩	
第97図	磨石	11373	11.8	(11.0)	5.5	900	Af-13	29663.679	−67431.761	67.316	閃緑岩	
第97図	磨石	11613	6.5	5.4	3.8	195	Ae-14	29665.230	−67424.711	67.586	安山岩	煤付着。
第97図	磨石	16352	8.2	7.5	4.5	320	Ag-29	29658.941	−67364.756	67.346	安山岩	
第98図	磨石	3013	10.0	7.5	5.5	600	Ae-51	29664.366	−67278.562	67.308	安山岩	
第98図	磨石	3074	(11.2)	9.6	4.1	600	Af-52	29662.939	−67275.715	67.432	凝灰岩	
第98図	磨石	1737	11.1	7.4	5.0	530	Ag-19	29656.715	−67404.280	67.727	凝灰岩	
第98図	磨石	11601	11.8	9.6	6.2	940	Ae-12	29666.942	−67432.651	67.628	凝灰岩	
第98図	磨石	12111	8.8	8.5	4.2	400	Ae-17	29664.802	−67412.432	67.498	安山岩	
第98図	磨石	12833	11.2	8.9	4.5	595	Af-23	29660.384	−67391.467	67.626	安山岩	
第98図	磨石	14008	10.1	9.3	5.8	810	Af-27	29662.309	−67375.267	67.582	安山岩	
第98図	磨石	14641	9.6	8.3	6.2	760	Af-30	29663.203	−67363.515	67.171	安山岩	



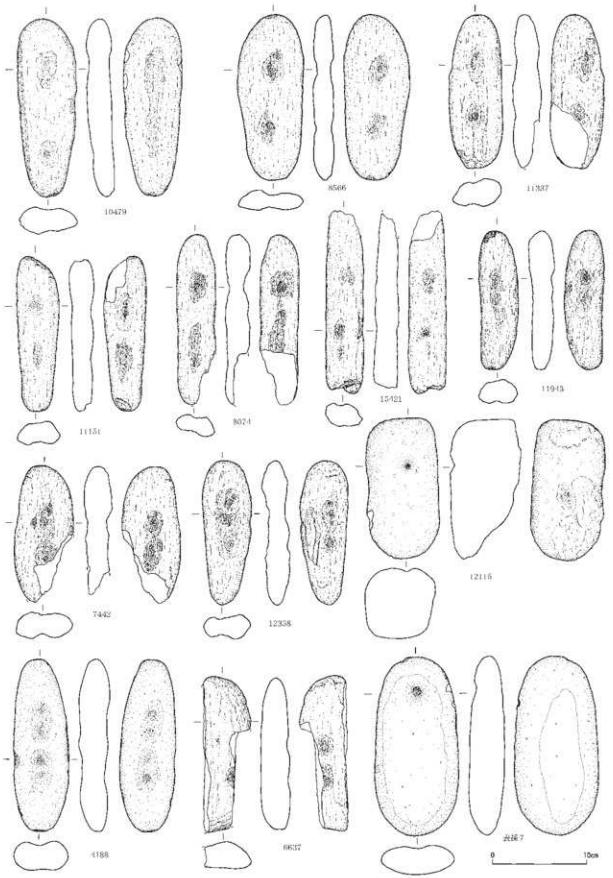
第97図　遺構外出土石器⑩



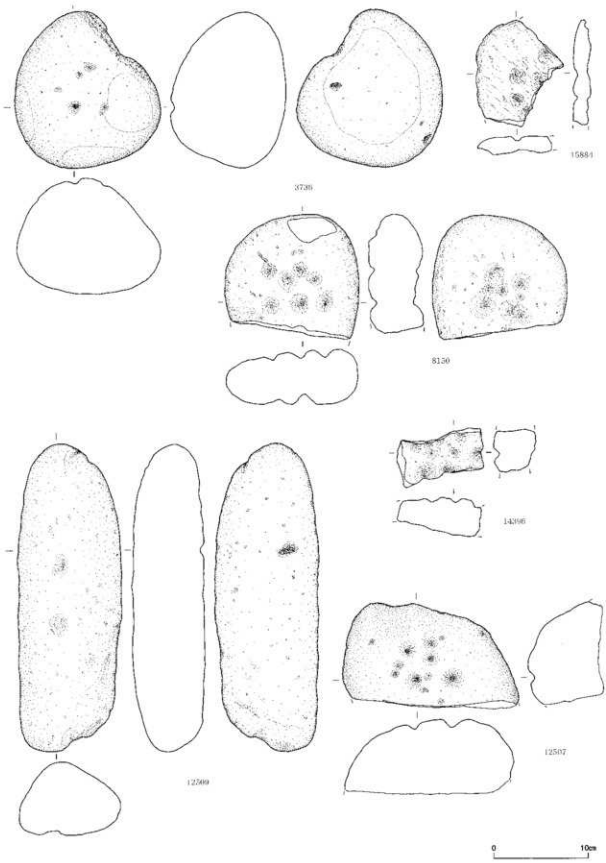
第98図　遺構外出土石器(7)



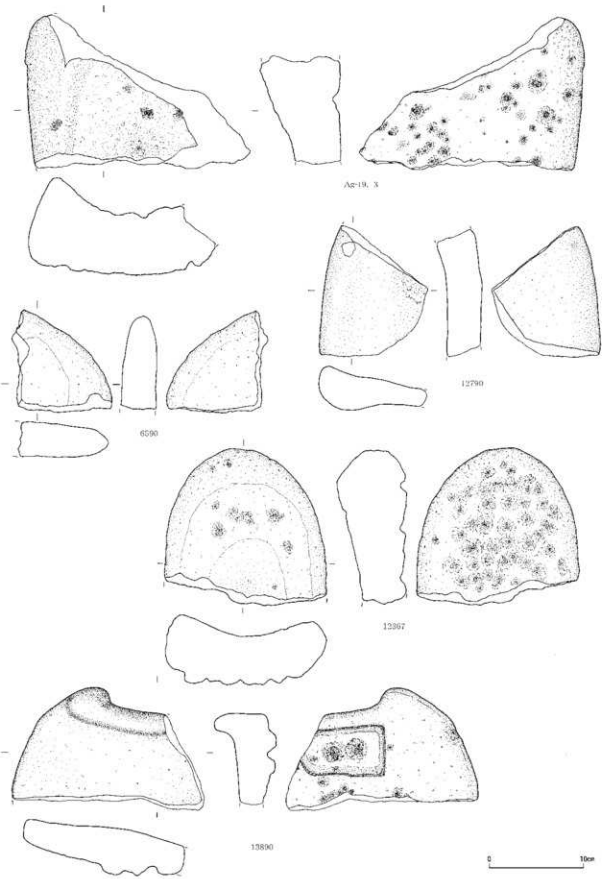
第99図　遺構外出土石器(8)



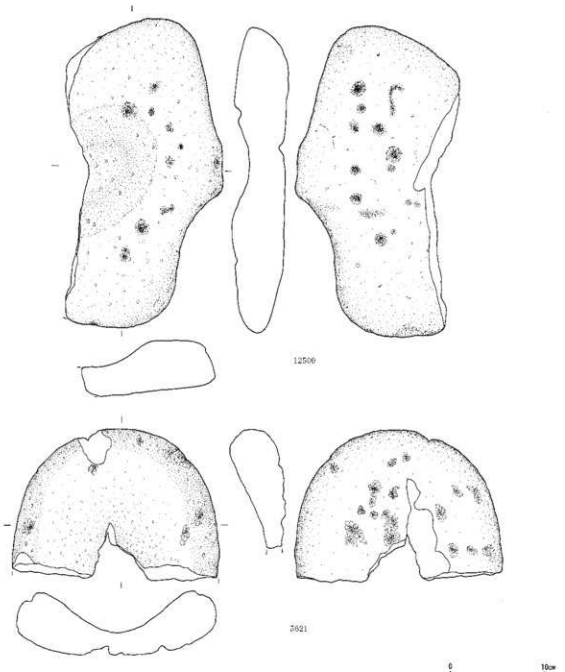
第100図　遺構外出土石器09



第101図　遺構外出土石器(2)



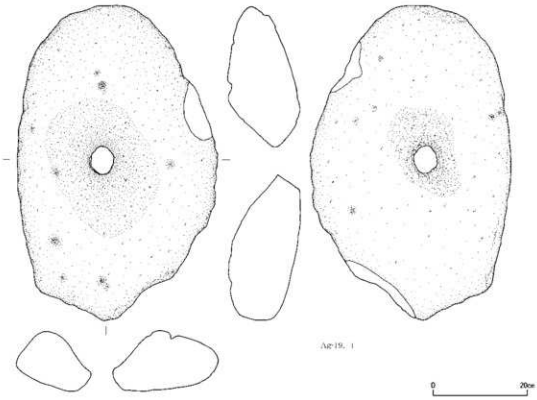
第102図　遺構外出土石器(2)



第103図　遺構外出土石器(2)

第32表　遺構外出土石器観察表(6)

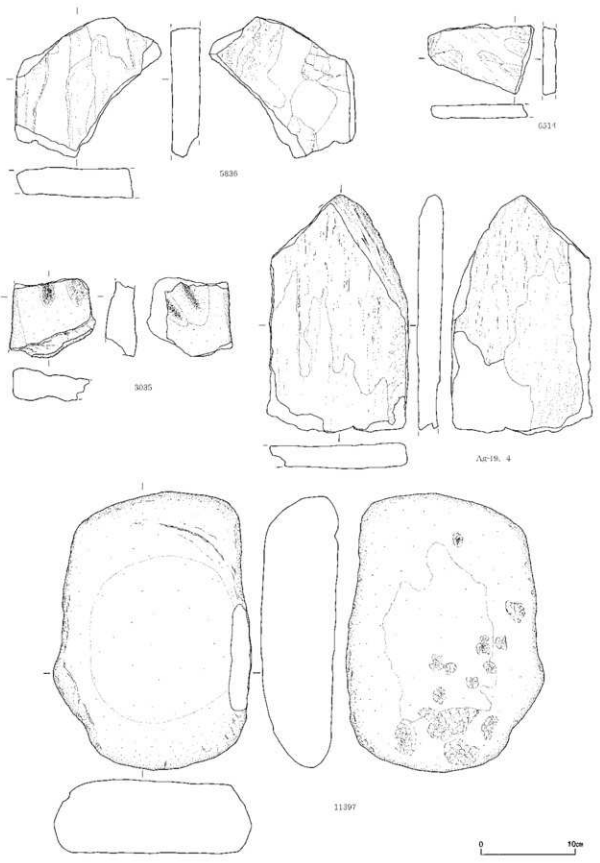
図版番号	器種	遺物No	全長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	グリッド	X	Y	H	石材	備考
第99図	凹石	1187	17.1	5.5	2.5	380	Ag-39	29658.287	−67326.203	67.800	結晶片岩	被熱
第99図	凹石	2506	11.3	8.5	4.5	690	Ah-19	29655.042	−67407.266	67.724	凝灰岩	
第99図	凹石	3786	10.1	7.0	5.6	560	Ag-44	29657.967	−67305.009	67.304	安山岩	
第99図	凹石	6843	15.0	7.1	3.3	520	Ae-40	29664.296	−67322.190	67.645	安山岩	
第99図	凹石	8167	11.7	8.3	4.4	540	Af-08	29662.752	−67449.184	67.642	安山岩	
第99図	凹石	9322	16.5	(5.1)	3.0	420	Ae-35	29666.422	−67340.018	67.542	結晶片岩	
第99図	凹石	10051	9.7	7.0	4.5	380	Ae-11	29665.629	−67438.197	67.713	安山岩	
第99図	凹石	10891	8.8	7.5	4.6	430	Af-07	29662.725	−67452.086	67.465	安山岩	
第99図	凹石	11618	9.6	7.9	4.4	470	Ae-15	29667.507	−67421.933	67.673	安山岩	
第99図	凹石	11639	(12.0)	6.0	2.8	290	Ae-15	29664.426	−67420.423	67.688	結晶片岩	
第99図	凹石	12476	13.3	6.8	3.1	360	Ae-23	29665.692	−67391.745	67.429	結晶片岩	
第99図	凹石	12713	(13.4)	6.2	3.7	420	Af-19	29662.827	−67407.927	67.670	緑色岩類	
第99図	凹石	14409	(18.5)	(5.1)	3.1	360	Ae-33	29666.274	−67351.228	67.364	結晶片岩	
第99図	凹石	15987	(14.1)	6.2	1.9	290	Af-31	29663.976	−67358.586	67.368	結晶片岩	



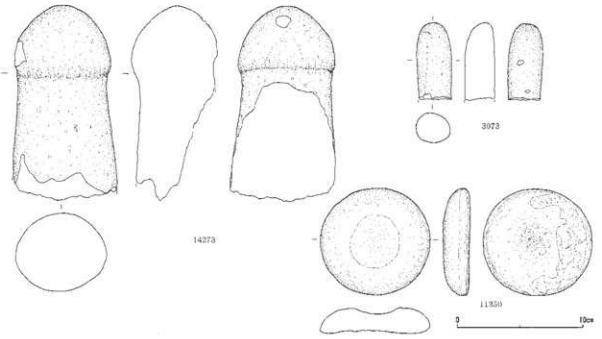
第104図　遺構外出土石器(23)

第33表　遺構外出土石器観察表(7)

図版番号	器種	遺物No	全長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	グリッド	X	Y	H	石材	備考
第100図	凹石	4188	18.2	6.0	3.4	640	Af-17	29661.396	−67414.289	67.640	緑色岩類	
第100図	凹石	6637	16.5	(5.1)	3.2	370	Ae-41	29665.537	−67316.390	67.552	結晶片岩	
第100図	凹石	7442	(14.5)	6.3	2.1	360	Ae-04	29667.488	−67466.916	67.445	結晶片岩	
第100図	凹石	8074	(18.1)	4.2	2.7	280	Af-08	29662.319	−67449.943	67.528	結晶片岩	
第100図	凹石	8566	17.6	7.1	2.2	460	Ae-35	29667.323	−67341.981	67.601	結晶片岩	
第100図	凹石	10479	18.8	6.3	3.0	510	Af-14	29662.794	−67426.376	67.643	結晶片岩	
第100図	凹石	11151	16.5	4.5	2.7	290	Ae-03	29664.650	−67471.322	67.457	結晶片岩	
第100図	凹石	11337	(16.3)	5.8	3.0	430	Af-01	29663.485	−67479.088	67.386	結晶片岩	
第100図	凹石	11943	14.7	4.3	2.8	260	Af-16	29662.375	−67417.363	67.602	結晶片岩	
第100図	凹石	12115	15.0	8.0	7.5	1200	Ae-18	29664.607	−67410.848	67.505	安山岩	被熱
第100図	凹石	12358	15.3	5.3	3.1	330	Af-18	29662.173	−67409.846	67.424	結晶片岩	
第100図	凹石	15421	(19.5)	4.1	2.7	340	Af-30	29660.174	−67362.176	67.515	結晶片岩	
第100図	岩版	表採7	19.0	8.9	3.8	880	不明	—	—	—	凝灰岩	中央上部に孔
第101図	多孔石	3736	16.6	15.5	12.3	3980	Ag-41	29657.816	−67318.264	67.613	安山岩	
第101図	多孔石	8150	(13.3)	14.4	5.9	1060	Ae-10	29665.455	−67442.510	67.738	凝灰岩	
第101図	多孔石	12507	(11.4)	18.6	8.0	1550	Ag-19	29658.009	−67405.962	67.312	凝灰質砂岩	
第101図	多孔石	12509	32.6	11.1	7.8	4180	Ag-19	29657.650	−67405.941	67.208	デイサイト	
第101図	多孔石	14396	(6.3)	(9.2)	(4.5)	200	Af-30	29660.881	−67363.587	67.301	安山岩	
第101図	多孔石	15884	(11.2)	(9.3)	(2.0)	240	Ae-31	29666.557	−67359.407	67.010	緑泥片岩	
第102図	石皿	6590	(10.9)	(10.8)	3.8	540	Af-40	29660.360	−67323.930	67.678	安山岩	
第102図	石皿	12367	(16.6)	17.3	7.5	2400	Ae-18	29664.842	−67411.569	67.448	安山岩	
第102図	石皿	12790	(13.8)	(11.5)	4.8	580	Ae-24	29667.299	−67386.749	68.126	凝灰質砂岩	
第102図	石皿	13890	(13.0)	(20.4)	6.6	820	Ae-36	29664.530	−67336.828	67.556	多孔質安山岩	
第102図	石皿	3	(16.1)	(23.9)	10.3	2950	Ag-19付近	—	—	—	安山岩	
第103図	石皿	5621	(16.2)	22.1	6.9	2700	Af-06	29663.885	−67457.391	67.548	安山岩	12548と接合
第103図	石皿	12500	32.7	(17.0)	6.2	2430	Af-19	29660.539	−67406.322	67.447	凝灰岩	
第104図	特殊石皿	S-1	66.4	42.6	15.2	34000	Ag-19付近	—	—	—	凝灰岩	中央孔 特殊石器
第105図	石皿	11397	29.6	21.0	8.2	9000	Af-01	29662.525	−67476.775	67.421	安山岩	石皿
第105図	石皿	4	(25.5)	(15.0)	2.8	1870	Ag-19付近	—	—	—	緑泥片岩	石皿片
第105図	礫石	3035	(8.4)	(9.1)	(3.6)	260	Ag-51	29665.786	−67277.257	67.452	牛伏砂岩	
第105図	礫石	5836	(14.9)	(15.6)	3.3	805	Ag-03	29659.713	−67468.211	67.374	砂岩	
第105図	礫石	6514	(7.4)	(11.2)	1.4	140	Af-40	29660.592	−67323.081	67.657	砂岩	
第106図	石棒	3073	(6.2)	2.4	2.4	80	Af-52	29663.117	−67275.640	67.382	緑泥片岩	
第106図	石棒	14273	(15.5)	8.4	6.9	1210	Ae-28	29664.582	−67370.733	67.489	緑泥片岩	
第106図	円盤状石器	11350	8.5	8.8	2.2	260	Ae-02	29666.635	−67473.956	67.195	緑色岩類	円盤中央部



第105図　遺構外出土石器②



第106図　遺構外出土石器(2)

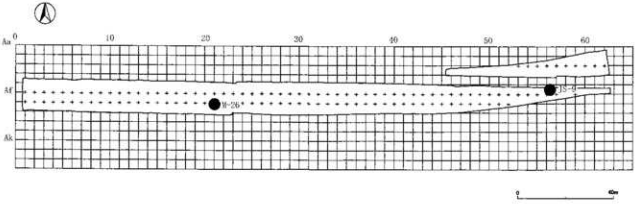
第Ⅵ章　自然科学分析

藤岡市、谷地D遺跡における自然科学分析　　古環境研究所

Ⅰ．谷地D遺跡の土層とテフラ分析

Ⅱ．谷地D遺跡におけるプラント・オパール分析

谷地D遺跡における動物遺存体分析　　パリノ・サーヴェイ株式会社



分析資料採取位置

藤岡市、谷地Ｄ遺跡における自然科学分析

株式会社　古環境研究所

Ⅰ．谷地Ｄ遺跡の土層とテフラ分析

1．はじめに

藤岡市域とその周辺に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、浅間や榛名など北関東地方とその周辺の火山、中部地方や中国地方さらには九州地方などの火山に由来するテフラ（火山砕屑物，いわゆる火山灰）が多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている示標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

そこで、年代が不明な土層や遺構が検出された谷地Ｄ遺跡においても、地質調査を行い土層層序を記載するとともに、テフラ検出分析と屈折率測定を行って示標テフラの層位を把握し、土層や遺構の年代に関する資料を収集することになった。調査分析の対象となった地点は、縄文時代セクション９（JS－９）およびM-26である。

2．土層層序

(1)　縄文時代セクション９（JS－９）

JS－９では、下位より灰色シルト質砂層（層厚28cm，Ⅸ層）、若干粘質の灰色シルト質砂層（層厚13cm，Ⅷ層）、灰色砂質シルト層（層厚９cm）、層理が発達した灰白色砂層（層厚13cm，以上Ⅶａ層）、灰色シルト質砂層（層厚36cm，Ⅶ層）、下部に白色軽石を多く含む成層した砂層や白色軽石混じり灰色砂層のブロックを含む灰色砂質シルト層（層厚45cm，Ⅵ層）、灰色砂質シルト層（層厚20cm，Ⅵａ層）、暗灰色土（層厚７cm，Ⅴ層）、黒褐色粘質土（層厚４cm，Ⅳ層）、軽石混じり褐色粗粒火山灰層（層厚３cm，軽石の最大径９mm，石質岩片の最大径３mm）、暗灰色砂質土（層厚８cm，以上Ⅲｂ層）、黄灰色砂質土（層厚７cm，Ⅲａ層）、灰色砂質土（層厚13cm，Ⅱ層）が認められる（図１）。

発掘調査では、Ⅷ層から縄文時代後期、Ⅵ層から縄文時代晩期の遺物が検出されている。

(2)　M-26

M-26の基盤層は、灰色砂質シルト層（層厚10cm以上，Ⅵ層）からなっている（図２）。遺構の覆土は、下位より暗灰色土（層厚10cm，Ⅴ３層）、灰色土（層厚11cm，Ⅴ２層）、灰色土（層厚10～21cm，Ⅴ１層）、若干色調が暗い灰色土（層厚13cm，Ⅴ層）、黄灰色土（層厚４cm，Ⅳ層）、暗灰色粘質土（層厚４cm，Ⅳａ層）、軽石混じ

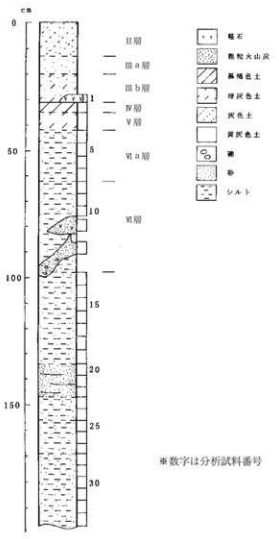
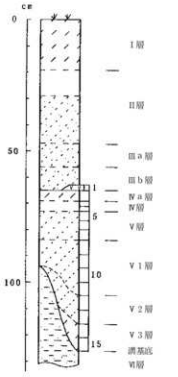


図１　縄文時代セクション９（JS-９）の土層柱状図

り褐色粗粒火山灰層（層厚２cm，軽石の最大径９mm，石質岩片の最大径３mm）、若干色調が暗い灰色砂質土（層厚７cm，以上Ⅲｂ層）、灰色砂質土（層厚９cm，Ⅲａ層）、灰色砂質土（層厚13cm）、黄灰色土（層厚10cm，以上Ⅱ層）、暗灰色作土（層厚19cm，Ⅰ層）が認められる。



※数字は分析試料番号

図２　M-26覆土の土層柱状図

３．テフラ検出分析

⑴　分析試料と分析方法

テフラの特徴とその降灰層準を把握するために、JS-９およびM-26の土層断面から採取された試料のうち、19点を対象にテフラ検出分析を行った。分析の手順は次の通りである。

１）試料10ｇを秤量。

２）超音波洗浄により泥分を除去。

３）80℃で恒温乾燥。

４）実体顕微鏡下で観察し、テフラ粒子の量や特徴を把握。

⑵　分析結果

テフラ検出分析結果を表１に示す。JS-９では、試料12や試料11に良く発泡し光沢をもつ白色軽石（最大径4.2mm）が多く含まれている。軽石の班晶としては、斜方輝石や単斜輝石が認められる。試料９から試料３にかけては、スポンジ状によく発泡した灰白色軽石（最大径2.1mm）が少量含まれている。さらに試料５には、ほかに発泡がさほど良くない白色軽石（最大径0.8mm）がごく少量認められる。この軽石の班晶には、角閃石が認められる。試料２や試料１のテフラ層には、比較的よく発泡した淡褐色軽石（最大径7.7mm）が含まれている。軽石の班晶としては、斜方輝石や単斜輝石が認められる。とくに試料１のテフラ層に多く認められることから、試料２に含まれる軽石については、何らかの作用により上位より攪乱を受けて混入したものと考えられる。

表１　テフラ検出分析結果

地　点	試料	軽石の量	軽石の色調	軽石の最大径
JS－９	1	＋＋＋＋	淡褐	7.7
	2	＋	淡褐	2.2
	3	＋	灰白	1.7
	5	＋	灰白＞白	1.4,0.8
	9	＋	灰白	2.1
	11	＋＋＋	白	3.2
	12	＋＋＋＋	白	4.2
	17	－	－	－
	21	－	－	－
	23	－	－	－
	25	－	－	－
	27	－	－	－
M－26	1	＋＋＋＋	淡褐	6.3
	2	－	－	－
	3	－	－	－
	5	＋	灰白	1.0
	9	＋	灰白	1.2
	13	＋	灰白	1.2
	15	＋	灰白	1.1

＋＋＋＋：とくに多い，＋＋＋：多い，＋＋：中程度，＋：少ない，－：認められない．最大径の単位は，mm．

M-26では、試料15から試料５にかけて、スポンジ状によく発泡した灰白色軽石（最大径1.2mm）が少量ずつ含まれている。また試料１のテフラ層には、比較的よく発泡した淡褐色軽石（最大径6.3mm）がとくに多く含まれている。軽石の班晶としては、斜方輝石や単斜輝石が認められる。

４．屈折率測定

⑴　測定試料と測定方法

テフラ検出分析により軽石が検出された試料のうち、JS-９の試料12と試料９、M-26の試料15の３点について、日本列島とその周辺のテフラ・カタログ（町田・新井，1992）の作成に利用された温度一定型屈折率測定法（新井，1972，1993）によりテフラ粒子の屈折率測定を行った。

(2) 測定結果

屈折率測定の結果を表2に示す。JS-9の試料12に含まれる火山ガラスの屈折率（n）は、1.507-1.512である。この試料に含まれる重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石があげられる。斜方輝石の屈折率（γ）は、1.706-1.711である。JS-9の試料9に含まれる火山ガラスの屈折率（n）は、1.515-1.521である。この試料には、斜方輝石や白雲母がごく少量含まれている。M-26の試料15に含まれる火山ガラスの屈折率（n）は、1.514-1.520である。この試料に含まれる重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石があげられる。ほかに白雲母や角閃石も少量認められる。斜方輝石の屈折率（γ）は、1.706-1.711である。

表2　屈折率測定結果

地点	試料	火山ガラス(n)	重鉱物	斜方輝石(γ)
JS－9	9	1.515－1.521	(opx,mica)	－
JS－9	12	1.507－1.512	opx＞cpx	1.706－1.711
M－26	15	1.514－1.520	opx＞cpx,(mica,ho)	1.706－1.711

屈折率の測定は，温度一定型温折率測定法（新井，1972，1993）による．
opx：斜方輝石，cpx：単斜輝石，ho：角閃石，mica：白雲母．

5．考　察

屈折率測定の対象となった試料のうち、JS-9のVI層中の試料12に含まれるテフラは、その特徴から1783(天明3)年に浅間火山から噴出した浅間A軽石（As-A，荒牧，1968，新井，1979）に由来すると考えられる。その産状から植物の根によりできた空洞を埋めたものと考えられる。試料9（VI層）に含まれるテフラについては、軽石の特徴や火山ガラスの屈折率などから、4世紀中葉*1に浅間火山から噴出した浅間C軽石(As-C，荒牧，1968，新井，1979）に由来すると考えられる。試料5（VIa層）に含まれる白色軽石は、その岩相から6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳渋川テフラ（Hr-FA，新井，1979，坂口，1986，早田，1989，町田・新井，1992）に由来する可能性が考えられる。試料1（IIIb層下部）のテフラ層は、含まれる軽石の特徴から、1108（天仁元）年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ（As-B，荒牧，1968，新井，1979）に同定される。

土層の比較的下部については、攪乱によるAs-Aを除いて、検出されたテフラの量が少ないことから、テフラの降灰層準を明確に指摘することは難しいが、VI層最上部にはAs-C、またVIa層にはほかにHr-FAの混入が認められるようである。これらは、当初予想された示標テフラの検出層位より若干下位にある。この地点では、周辺の遺跡が立地している地点と比較して、安定した土壌の形成が若干遅れている可能性もあり、周辺との検討が必要かも知れない。

M-26における採取試料のうち最下位にある試料15（V3層）に含まれるテフラは、軽石の特徴、重鉱物の組み合わせ、火山ガラスや斜方輝石の屈折率ななどから、As-Cに由来すると考えられる。また、試料1（IIIb層下部）のテフラ層は、含まれる軽石の特徴から、As-Bに同定される。これらのことからM-26の層位に関しては、溝内に堆積したAs-Cが流水や人為的による除去の影響を受けていない限り、As-Cより上位でAs-Bより下位にあると推定される。

6．小　結

谷地D遺跡において、地質調査、テフラ検出分析、屈折率測定を行った。その結果、下位より浅間C軽石（As-C，4世紀中葉*1）、榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA，6世紀初頭)、浅間Bテフラ(As-B，1108年)、浅間A軽石（As-A，1783年）やそれらに由来する可能性が高いテフラ粒子を認めることができた。

＊1　現在では4世紀を遡るとする説が有力になっているようである(たとえば，若狭，2000)。しかし、具体的な年代観が示された研究報告例はまだない。現段階においては「3世紀後半」あるいは「3世紀終末」と考えておくのが妥当なのかも知れないが、土器をもとにした考古学的な年代観の変更については、考古学研究者による明確な記載を待ちたい。

引用参考文献

新井房夫（1972） 斜方輝石・角閃石によるテフラの同定-テフロクロノロジーの基礎的研究．第四紀研究11，P.254-269

新井房夫（1979） 関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層．考古学ジャーナル，no.53，P.41-52

新井房夫（1993） 温度一定型屈折率測定法．日本第四紀学会編「第四紀試料分析法２-研究対象別分析法」，P.138-149

荒牧重雄（1968） 浅間火山の地質．地団研専報，no.45，P.65

町田 洋・新井房夫（1992） 火山灰アトラス．東京大学出版会，P.276

坂口 一（1986） 榛名二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器．群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」，P.103-119

早田 勉（1989） ６世紀における榛名火山の２回の噴火とその災害．第四紀研究27，P.297-312

若狭 徹（2000） 群馬の弥生土器が終わるとき．かみつけの里博物館編「人が動く・土器も動く―古墳が成立する頃の土器の交流」，P.41-43

Ⅱ．谷地Ｄ遺跡におけるプラント・オパール分析

１．はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（SiO_2）が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査が可能である（杉山，2000）。

２．試　料

試料は、縄文時代セクション９、M-26、M-26東、東側水田の４地点から採取された計12点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

３．分 析 法

プラント・オパールの抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）をもとに、次の手順で行った。

１）試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）

２）試料約１ｇに対し直径約40㎛のガラスビーズを約0.02ｇ添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）

３）電気炉灰化法（550℃・６時間）による脱有機物処理

４）超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散

５）沈底法による20㎛以下の微粒子除去

６）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成

７）検鏡・計数

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパールをおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。試料１ｇあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率をかけて、試料１ｇ中のプラント・オパール個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重、単位：10⁻５ｇ）をかけて、単位面積で層厚１cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は2.94、ヒエ属（ヒエ）は8.40、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、タケ亜科は0.48である。

４．分析結果

水田跡（稲作跡）の検討が主目的であることから、同定および定量はイネ、ヒエ属型、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科の主要な５分類群に限定した。これらの分類群について定量を行い、その結果を表１および図１に示した。写真図版に主要な分類群の顕微鏡写真を示す。

表１　藤岡市、谷地D遺跡におけるプラント・オパール分析結果

検出密度（単位：×100個／ｇ）

分類群	学名	地点・試料	縄文時代セクション９					M−26					M−26東	東側水田
			1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	1	1
イネ	*Oryza sativa* (domestic rice)		22	30	8			30	45	15	8			7
ヒエ属型	*Echinochloa* type		7											
ヨシ属	*Phragmites* (reed)		67	23	23			7	23	23				112
ススキ属型	*Miscanthus* type		15					45	7	7			8	15
タケ亜科	*Bambusoideae* (Bamboo)		45	30	45	53	60	75	82	105	7	60	76	30
推定生産量（単位：kg／m²•cm）														
イネ	*Oryza sativa* (domestic rice)		0.66	0.88	0.22			0.66	0.88	0.22				0.22
ヒエ属型	*Echinochloa* type		0.63					0.63						
ヨシ属	*Phragmites* (reed)		4.26	1.42	1.42			4.26	1.42	1.42				7.09
ススキ属型	*Miscanthus* type		0.19					0.19					0.09	0.19
タケ亜科	*Bambusoideae* (Bamboo)		0.22	0.14	0.22	0.25	0.29	0.22	0.14	0.22	0.25	0.29	0.36	0.14

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。

５．考　察

(1)　水田跡の検討

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料１ｇあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している（杉山，2000）。ただし、密度が3,000個/ｇ程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/ｇとして検討を行った。

１）縄文時代セクション９

Ⅳ層からⅥ層までの各層について分析を行った。その結果、Ⅳ層（試料１）、Ⅴ層（試料２）、Ⅵａ層（試料３）からイネが検出された。このうち、Ⅴ層（試料２）では密度が3,000個/ｇと比較的高い値である。したがって、同層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

Ⅳ層（試料１）では密度が2,200個/ｇと比較的低い値であり、Ⅵａ層（試料３）では800個/ｇと低い値である。イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、洪水などによって耕作土が流出したこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、および上層や他所からの混入などが考えられる。

２）M-26地点

Ⅳａ層からⅥ層までの各層について分析を行った。その結果、Ⅳａ層（試料１）、Ⅳ層（試料２）、Ⅴ層（試料３）、Ⅴ１層（試料４）からイネが検出された。このうち、Ⅳａ層（試料１）とⅣ層（試料２）では密度が3,000

個/ｇおよび4,500個/ｇと比較的高い値である。したがって、これらの層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。Ⅴ層(試料３)とＶ１層（試料４）では、密度が800～1,500個/ｇと比較的低い値である。イネの密度が低い原因としては、前述のようなことが考えられる。

３）M-26東地点

Ⅴ層（試料１）について分析を行った。その結果、イネは検出されなかった。

４）東側水田地点

As-B直下層(試料１)について分析を行った。その結果、イネが700個/ｇと少量検出された。イネの密度が低い原因としては、前述のようなことが考えられる。

(2) 堆積環境の推定

ヨシ属は湿地的なところに生育し、ススキ属やタケ亜科は比較的乾いたところに生育している。このことから、これらの植物の出現状況を検討することによって、堆積当時の環境（乾燥・湿潤）を推定することができる。おもな分類群の推定生産量によると、縄文時代セクション９のAs-B直下層（Ⅳ層）とその下層、および東側水田のAs-B直下層ではヨシ属が優勢であり、とくに両地点のAs-B直下層ではヨシ属が卓越していることが分かる。また、M-26地点ではおおむねタケ亜科(おもにネザサ節）が優勢となっている。

以上のことから、稲作が開始される以前の遺跡周辺は、ネザサ節などが生育する比較的乾燥した堆積環境であったと考えられるが、Ⅳａ～Ⅴ層の時期にはヨシ属などが生育する湿地的なところが見られるようになり、そこを利用して水田稲作が開始されたと推定される。なお、稲作の開始以降もヨシ属が多く見られることから、水田雑草などとしてヨシ属が生育していたことや、休閑期間中にヨシ属が繁茂していたことなどが想定される。

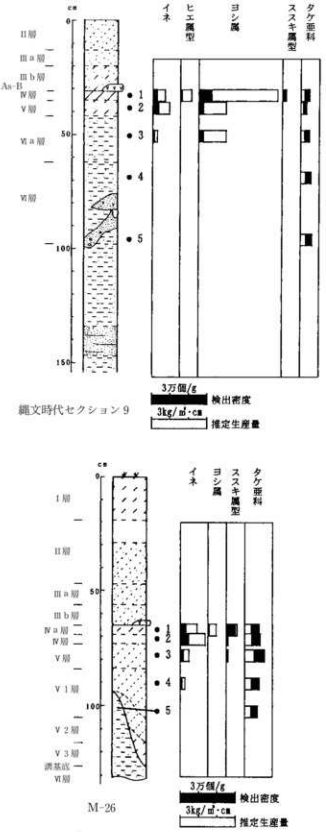


図１　土層柱状図とプラントオパール分析結果

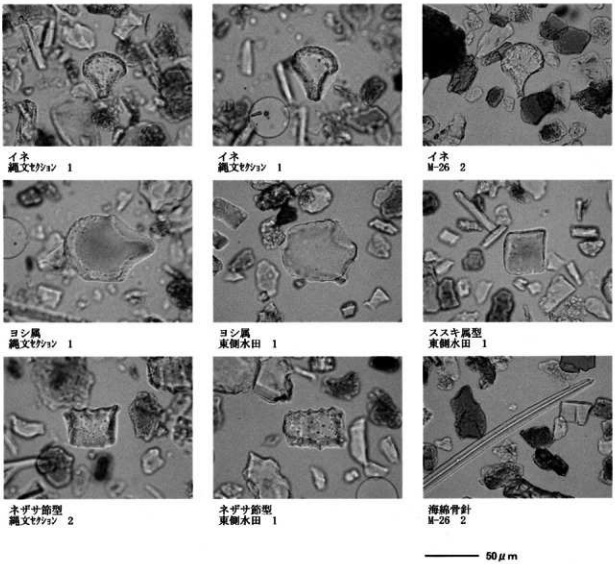


図3　植物珪酸体（プラント・オパール）の顕微鏡写真

6．ま と め

プラント・オパール分析の結果、縄文時代セクション9のV層およびM-26地点のIVａ層とIV層からは、イネが多量に検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。また、これらの下位層などでも稲作が行われていた可能性が認められた。

本遺跡周辺は、稲作が開始される以前はネザサ節などが生育する比較的乾燥した堆積環境であったと考えられるが、IVａ～V層の時期にはヨシ属などが生育する湿地的なところが見られるようになり、そこを利用して水田稲作が開始されたと推定される。

参考文献

杉山真二（2000）　植物珪酸体（プラント・オパール）．考古学と植物学．同成社，P.189-213

藤原宏志（1976）　プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)　―数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法―．考古学と自然科学9，P.15-29

藤原宏志・杉山真二（1984）　プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)　―プラント・オパール分析による水田址の探査―．考古学と自然科学17，P.73-85

谷地D遺跡における動物遺存体分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

藤岡市中栗須に所在する谷地D遺跡は、藤岡台地縁辺及び台地下の沖積地に立地する。本遺跡の発掘調査では、旧河道及び微高地上より縄文時代後期と考えられる住居跡や配石遺構、焼土、炭化物集中などが検出され、土器、炭化物、動物遺存体等が確認されている。

本報告では、住居跡や配石遺構、土坑等から出土した動物遺存体について種類や部位等を明らかにし、当該期における動物利用の状況を検証する。

1．試　料

試料は、住居跡や配石、土坑等から出土した動物遺存体を含む土壌175試料である。試料の選択にあたり、試料の出土位置や土壌中に含まれる動物遺存体の状況を検討し、1）遺構との共伴性、2）遺存状況、といった条件で試料の選択を行った。この結果、2号配石JD-6～10、18、20、24、JH-2の10遺構と2号配石付近及びJH-2付近から採取された土壌58点を分析対象とすることにした。試料の詳細は、結果とともに示す。

表1　出土分類群一覧

脊椎動物門	*Phylum Vertebrata*
哺乳綱	*Class Mammalia*
ウシ目（偶蹄目）	*Order Artiodactyla*
イノシシ科	*Family Suidae*
イノシシ	*Sus scrofa*
シカ科	*Family Cervidae*
ニホンジカ	*Cervus nippon*

2．分析方法

試料を自然乾燥させた後、土壌中より骨片を抽出する。保存状態が良好な試料は、水洗後、自然乾燥させる。また、接合可能な試料については、一般工作用接着剤を用いて接合を行う。同定は、試料を肉眼およびルーペで観察し、その形態的特徴から種と部位を鑑定する。計測は、デジタルノギスを用いて測定する。なお、同定・解析には、金子浩昌氏の協力を得ている。

3．結果および考察

検出された分類群を表1、各試料の同定結果を表2、遺構毎の種類別・部位別数量を表3に示す。

検出された試料は、いずれも被熱により灰白色を呈し、細片化する、あるいは破損する状況であった。試料の一部は、骨格の全体が遺存し、保存状態の良好な試料が認められたが、大半は砕片化しており同定には至らなかった。これらの試料中より検出された分類群は、イノシシ・ニホンジカの2種であった(表1，2)。以下に、検出された主要骨の所見を示す。

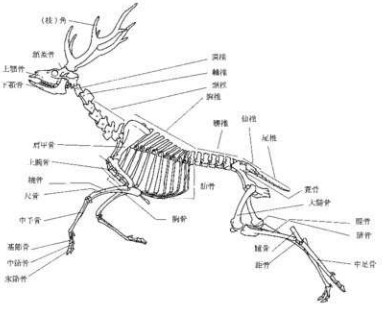


図1　主要な骨格の名称（図はニホンジカ）（八谷・大泰司　1994）

表 2　骨同定結果(1)

遺構名	時期	遺物No.	分類群	部位	左右	部分	数量	推定年齢	備考
2号配石	不明	9869	ニホンジカ	中足骨	左	ほぼ完存	1	幼獣	近位骨端外れ.
			獣類	不明		破片	3		
	不明	9960	獣類	不明		破片	1		
	不明	―括	獣類	不明		破片	18		焼微細片有
2号配石付近	不明	―括	獣類	不明		破片	11		12mのトころ11m で設定
JD-6	堀ノ内2-加曽利B1	5131	獣類	不明		破片	2		土塊状、焼微細片有
JD-7	堀ノ内2-加曽利B1	5129	イノシシ	中心足根骨	右	ほぼ完存	1	成獣	
				種子骨		ほぼ完存	1		
			イノシシ/ニホンジカ	椎骨		椎体関節板	4		
				肋骨		破片	31		
				不明		破片	21		
JD-8	―	―	獣類	不明		破片	24		焼微細片有
JD-9	不明	4185	獣類	不明		破片	6		
JD-10	―	―	獣類	肋骨		破片	1		
				不明		破片	28		
JD-18	加曽利B1式	7036	イノシシ	踵骨	右	近位端	1	若獣	
				第III/IV中手/中足骨		遠位端	1	成獣	骨端幅13.23mm
				第III/IV中手/中足骨		遠位端	2	若獣	
				基節骨		遠位端	1	成獣	
				中節骨		近位端	1	成獣	
				第III/IV末節骨		遠位端	1		
			ニホンジカ	中手/中足骨		遠位端	1		
			獣類	下顎骨	右	破片	1		
				不明		破片	4		
	加曽利B1式	7211	イノシシ	下顎第1門歯	左	破片	1	1歳未満	未萌出歯牙, 同一個体
				下顎第2門歯	左	破片	1		
				下顎骨		破片	1	幼獣	
				腰椎		後関節突起	1		
			獣類	不明		破片	58		焼微細片有
	加曽利B1式	―	イノシシ	橈骨		破片	1		
			獣類	不明		破片	2		
JD-20	加曽利B1式	―	獣類	不明		破片	16		
	加曽利B1式	7342	獣類	不明		破片	1		
	加曽利B1式	7547	獣類	不明		破片	11		
JD-24	加曽利B1式	2170	獣類	不明		破片	1		
JH-2	加曽利B1式	13716	獣類	不明		破片	6		
	加曽利B1式	13853	イノシシ	下顎骨	右	関節突起	1	大型成獣	内側欠
	加曽利B1式	13860	獣類	不明		破片	11		
	加曽利B1式	13894	ニホンジカ	中足骨		前面	1		
			獣類	不明		破片	2		
	加曽利B1式	13909	ニホンジカ	中手/中足骨		破片	1		
	加曽利B1式	13910	獣類	不明		破片	4		
	加曽利B1式	13996	獣類	不明		破片	18		
	加曽利B1式	14023	イノシシ	前頭骨	左	眼窩縁	1		
			ニホンジカ	中手/中足骨等		破片	25		焼微細片有
	加曽利B1式	14169	イノシシ	第II/V基節骨		ほぼ完存	1	大型若獣	近位骨端外れ, 現長19.35mm
	加曽利B1式	14193	獣類	不明		破片	4		
	加曽利B1式	14195	獣類	不明		破片	1		
	加曽利B1式	14280	獣類	不明		破片	1		
	加曽利B1式	14306	獣類	不明		破片	1		
	加曽利B1式	14307	獣類	不明		破片	9		
	加曽利B1式	14308	獣類	不明		破片	8		
	加曽利B1式	14309	獣類	不明		破片	2		
	加曽利B1式	14310	獣類	不明		破片	1		
	加曽利B1式	14311	獣類	不明		破片	2		
	加曽利B1式	14312	獣類	不明		破片	2		
	加曽利B1式	14317	獣類	不明		破片	7		
	加曽利B1式	14458	獣類	不明		破片	5		
	加曽利B1式	14951	獣類	不明		破片	1		
	加曽利B1式	14952	獣類	不明		破片	4		
	加曽利B1式	14954	獣類	不明		破片	2		
	加曽利B1式	15598	獣類	不明		破片	1		
	加曽利B1式	15999	獣類	不明		破片	8		

骨同定結果(2)

遺構名	時期	遺物No.	分類群	部位	左右	部分	数量	推定年齢	備考
JH-2	加曽利B1式	13344	イノシシ	椎骨		棘突片	1		
			獣類	不明		破片	2		
	加曽利B1式	13862	獣類	不明		破片	26		
	加曽利B1式	14046	イノシシ/ニホンジカ	基節骨/中節骨		近位端片	1		
			獣類	不明		破片	2		
	加曽利B1式	14224	イノシシ	第4足根骨		破片	1		
				足根骨??		破片	1		
			獣類	不明		破片	6		
	加曽利B1式	14226	獣類	不明		破片	1		
	加曽利B1式	14227	獣類	不明		破片	2		
	加曽利B1式	14246	獣類	不明		破片	5		
	加曽利B1式	14248	イノシシ	踵骨		遠位端	1		
			獣類	不明		破片	30		
	加曽利B1式	14249	イノシシ	頭骨		破片	1		
			獣類	不明		破片	2		
	加曽利B1式	14280	イノシシ	尺骨		破片	1		
			獣類	不明		破片	1		
	加曽利B1式	14283	獣類	不明		破片	1		
	加曽利B1式	―括	イノシシ	橈骨	左	破片	1		成体
			ニホンジカ	踵骨	左	破片	1		
				距骨	右	破片	2		
			獣類	不明		破片	147		
	加曽利B1式	―括	ニホンジカ	中手/中足骨		遠位端	2		
			獣類	不明		破片	87		焼微細片有
	加曽利B1式	―括	獣類	不明		破片	17		
	加曽利B1式	―括	獣類	不明		破片	134		
JH-2付近	―	―括	イノシシ	手根骨		破片	1		
			獣類	不明		破片	32		焼微細片有

表３　種類別・部位別一覧表

	イノシシ																							ニホンジカ						イノシシ/ニホンジカ			獣類		
	頭骨	前頭骨	下顎骨	下顎骨（破片）	下顎第１門歯	下顎第２門歯	腰椎	椎骨	橈骨	橈骨	尺骨	手根骨	踵骨	踵骨	中心足根骨	第４足根骨	足根骨？	種子骨	第Ⅲ／Ⅳ中手／中足骨	基節骨	中節骨	第Ⅱ／Ⅴ基節骨	第Ⅲ／Ⅳ末節骨	中足骨	中手／中足骨	中手／中足骨等	踵骨	距骨（破片）	中節骨	椎骨	肋骨	基節骨／中節骨	不明	下顎骨	肋骨	不明
遺構名		左	右		左	左			左				右		右												左	右	左					右		
２号配石																													1							22
２号配石付近																																				11
JD-６																																				2
JD-７															1			1												4	3		21			
JD-８																																				24
JD-９																																				6
JD-10																																			1	28
JD-18				1	1	1	1			1			1						3	1	1		1		1									1		64
JD-20																																				28
JD-24																																				1
JH-２	1	1	1					1		1	1			1		1	1					1		1	3	25	1	2				1				536
JH-２付近												1																								32

(1)　検出された分類群

１）イノシシ

ａ．頭骨

前頭骨の小骨片、眼窩縁が検出される。

ｂ．下顎骨

下顎左第１門歯、下顎左第２門歯、下顎骨骨体、下顎骨右関節突起が検出される。左門歯は、同一個体と思われる。未萌出歯であり、顎骨内にあったと思われる。同試料で幼体とみられる下顎骨片が認められているが、これも同一個体に由来する可能性がある。１歳未満の個体である。右関節突起は、内側が破損しているために原形が不明であるが、成獣の大形個体とみられる。

ｃ．椎骨

腰椎後関節突起、椎骨椎弓部の破片が検出される。

ｄ．橈骨

成獣の左側破片が認められる。この他に、破片検出される。

ｅ．尺骨

破片が検出される。

ｆ．手根骨

破片が検出される。

ｇ．足根骨

踵骨、中心足根骨、第４足根骨が検出される。踵骨の右側近位端と遠位端の破片が確認される。右側近位端骨は、近位骨端のみを残す破片であるが、焼きしまりを考慮しても小さく、若い個体と考えられる。

中心足根骨は、右側であり、ほぼ完存する。骨体の全体に細かいひび割れがみられるが、原型を保っていたのは成獣で頑丈な骨質であったためと考えられる。骨質は頑丈で、骨後面には骨隆起粗面がみえ老成獣個体であったことが推定される。この他、第４足根骨の破片１点、足根骨の可能性がある破片１点がみられる。

ｈ．中手／中足骨

第Ⅲ／Ⅳ指の中手／中足骨遠位端３点が検出され、この内２点は、外れた骨端骨である。この部分が満１歳頃

に骨化する。骨のサイズからみても、その程度の個体と推測される。また、残り１点は、骨端幅13.23㎜を計り、成獣と考えられる。

ｉ．種子骨

ほぼ完存する中手／中足骨の遠位骨端に付く種子骨が検出される。

ｊ．基節骨

第Ⅱ／Ⅴ基節骨が検出される。近位骨端の外れる若い個体であるが、現長19.35㎜を計り、大形サイズの個体であったと推定される。この他、成獣とみられる基節骨の遠位端部分の破片がある。

ｋ．中節骨

近位骨端部のみを残す。成獣である。

ｌ．末節骨

第Ⅲ／Ⅳ末節骨の遠位端片が検出される。

２）ニホンジカ

ａ．踵骨

左踵骨の破片、右距骨の破片が検出される。

ｂ．中手／中足骨

中足骨前面部片が検出される。この他に、中手／中足骨の遠位端や破片などが検出される。

ｃ．中節骨

ほぼ完存する。左側である。近位骨端が外れており、幼獣である。

３）その他

イノシシ／ニホンジカの椎体関節板、肋骨片、基節骨／中節骨近位端片が検出される。また、種類不明であるが、下顎骨右側破片、肋骨片検出される。

⑵　各遺構の検出状況

本分析で対象とした遺構は、時期不明の土坑や配石を除くと、考古学的所見から縄文時代後期(堀ノ内２式-加曽利Ｂ１式期)頃の時代観が想定されている。このうち、JH-２では579点の動物遺存体が抽出され、イノシシ、ニホンジカの２種で確認されたが、大部分は砕片化した試料のため種類・部位とも不明であった。次いで、JD-18では78点の動物遺存体が検出され、イノシシ、ニホンジカの２種が確認されたが、大部分は種類・部位がともに不明と、JH-２と同様な傾向を示した。この他の遺構においても、顕著な差異は認められないことや、大部分が種類不明の獣類であったことから、現時点では遺構間における種類構成の差異を言及することはできない。

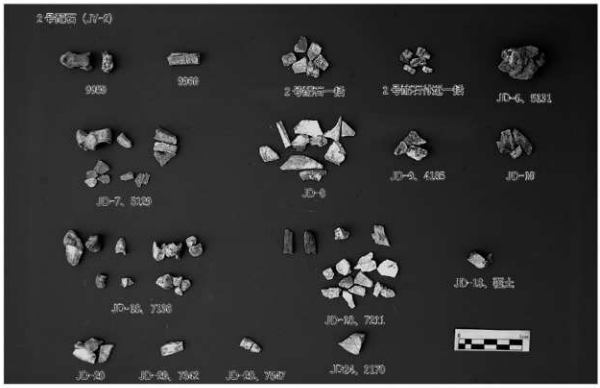
以上の結果から、少なくとも本遺跡ではイノシシやニホンジカが利用されていたと考えられ、試料がすべて焼骨であること、砕片化した試料が多いこと、試料を含む土壌中に炭化物が含まれる状況を考慮すると、利用時に火熱の影響を受けた状況が推測される。

引用文献

岡之郷・郷土誌編集委員会（1996）　藤岡市岡之郷・郷土誌．岡之郷・郷土誌編集企画委員会，P.310

群馬県史編さん委員会（1990）　群馬県史　通史編１　原始古代１．群馬県，P.902

近藤　恵・大泰司紀之編（1986）　歯の比較形態学，医歯薬出版，P.266



谷地D遺跡遺構内出土骨(1)

谷地D遺跡 JH－2 号住居址内出土骨(2)

写真図版

小野地区水田址遺跡社宮司地点　図版２～５

谷地D地点　図版６～20

C M Y K

図版1

調査区全景（南西より）

調査区全景・IV層（東より）

調査区全景・IV層（西より）

調査区全景・縄文時代包含層（東より）

調査区全景・縄文時代包含層（西より）

C M Y K

図版2

小野地区水田址遺跡溝状遺構（M1～4）

小野地区水田址遺跡溝状遺構（M6）

小野地区水田址遺跡溝状遺構（M5）

小野地区水田址遺跡溝状遺構（M6/M8）

小野地区水田址遺跡状遺構（M6/M8）

C M Y K

図版 3

小野地区水田址遺跡溝状遺構（M６/M８合流）

小野地区水田址遺跡溝状遺構（M11）

小野地区水田址遺跡溝状遺構（M12/M13）

小野地区水田址遺跡溝状遺構（M10/M12）

小野地区水田址遺跡溝状遺構（M７）

小野地区水田址遺跡溝状遺構（M12）

C M Y K

図版 4

小野地区水田址遺跡溝状遺構（M13）

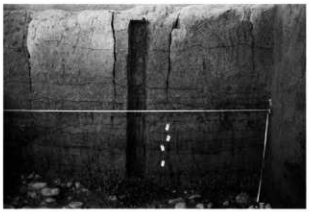
小野地区水田址遺跡溝状遺構（M15）

小野地区水田址遺跡溝状遺構（M17/M16）

小野地区水田址遺跡溝状遺構（M18/19）

図版 5

小野地区水田址遺跡畝状遺構



小野地区水田址遺跡土層堆積状態とサンプリング

小野地区水田址遺跡 As－B 埋没水田址

小野地区水田址遺跡遺構外出土土器

図版 6

谷地D遺跡 JH－１号住居址

谷地D遺跡 JH－２号住居址

谷地D遺跡 JH－３号住居址

谷地D遺跡１号配石（南より）

谷地D遺跡２号配石（南より）

谷地D遺跡２号配石（西より）

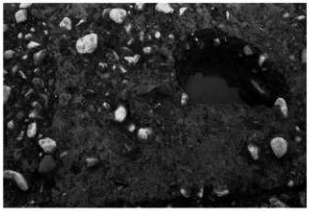
谷地D遺跡１号集石

谷地D遺跡３号集石

図版7

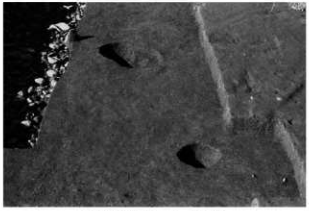
谷地D遺跡 JD－4、3土坑

谷地D遺跡 JD－5、6、7B土坑



谷地D遺跡 JD－7A土坑、5506土器

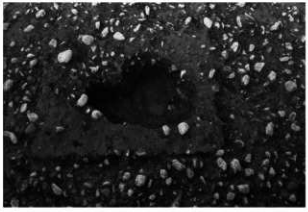
谷地D遺跡 JD－8土坑



谷地D遺跡 JD－8、10土坑

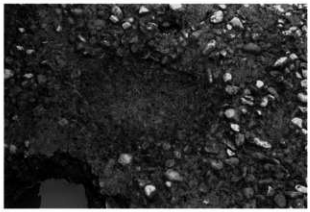
谷地D遺跡 JD－12、13、15、16、17土坑

谷地D遺跡 JD－14土坑



谷地D遺跡 JD－18A、7A土坑

図版 8

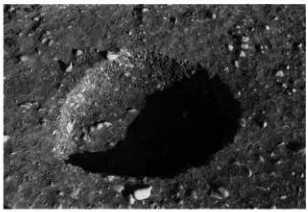


谷地D遺跡 JD－18、24、25土坑

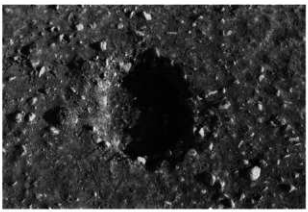
谷地D遺跡 JD－21土坑

谷地D遺跡 JD－30土坑

谷地D遺跡 JD－33、32A土坑



谷地D遺跡 JD－49土坑



谷地D遺跡 JD－50土坑

谷地D遺跡 JD－56土坑

谷地D遺跡 JD－59土坑

図版9

谷地D遺跡 JD－57A、60土坑（JH－2号住居址内）

谷地D遺跡 JD－60土坑

谷地D遺跡14263土器出土状況

谷地D遺跡7553土器出土状況

谷地D遺跡10761土器出土状況

谷地D遺跡13707土器出土状況

谷地D遺跡13378土器出土状況

谷地D遺跡16477、16476、16478土器出土状況

図版10

JH－1，9026

JH－1，9755

JH－2，13707

JH－2，14263

JS－1，13596

JH－2，14689

JH－2，14858

JD－24，4035

JD－8，3495

JD－31，10100

JD－59，15000

JD－7，5152

JD－18A，5506

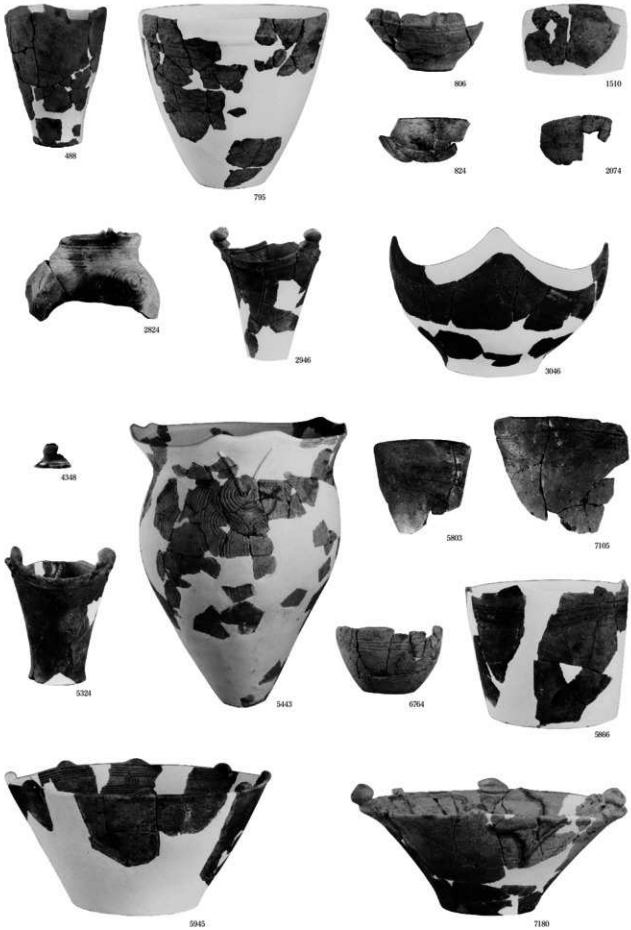
JD－18B，5984

JD－24，2149

谷地D遺跡遺構内出土土器

C M Y K

図版11



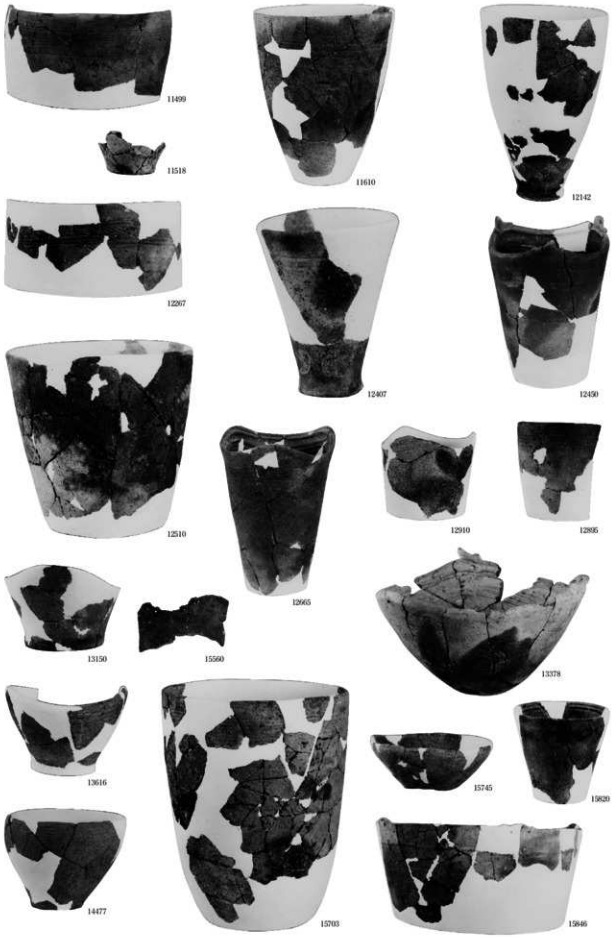
谷地D遺跡遺構外出土土器（1）

C M Y K

谷地D遺跡遺構外出土土器（2）

C M Y K

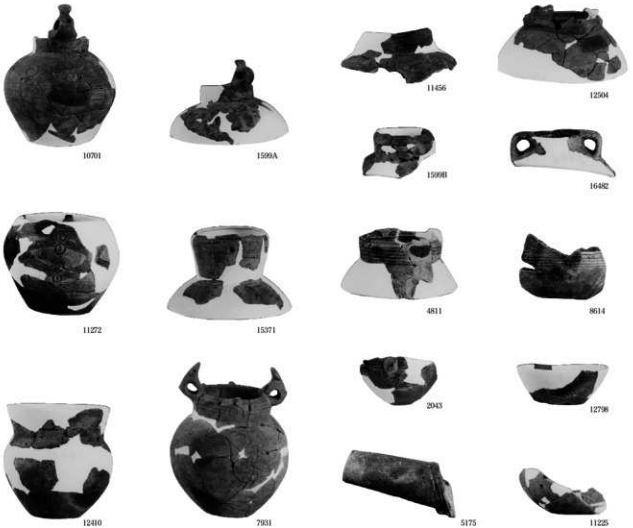
図版13



谷地D遺跡遺構外出土土器（3）

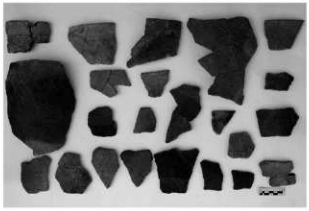
図版14

谷地D遺跡遺構外出土土器（4）

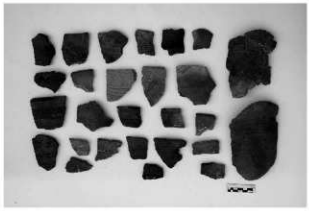


谷地D遺跡遺構外出土土器（5）注口土器

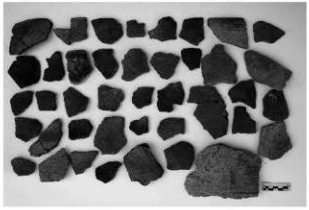
図版15



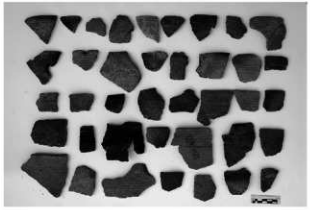
谷地D遺跡遺構外出土土器（6）



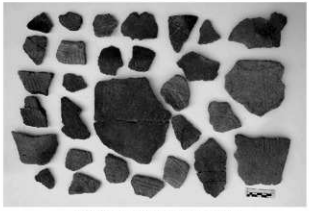
谷地D遺跡遺構外出土土器（7）



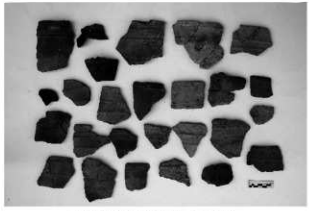
谷地D遺跡遺構外出土土器（8）



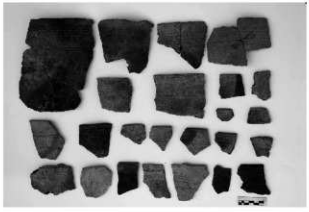
谷地D遺跡遺構外出土土器（9）



谷地D遺跡遺構外出土土器（10）



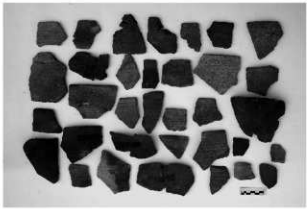
谷地D遺跡遺構外出土土器（11）



谷地D遺跡遺構外出土土器（12）

谷地D遺跡遺構外出土土器（13）

図版16



谷地D遺跡遺構外出土土器（14）

谷地D遺跡遺構外出土土器（15）

谷地D遺跡遺構外出土土器（16）

谷地D遺跡遺構外出土土器（17）

谷地D遺跡遺構外出土土器（18）

谷地D遺跡遺構外出土土器（19）

谷地D遺跡遺構外出土土器（20）

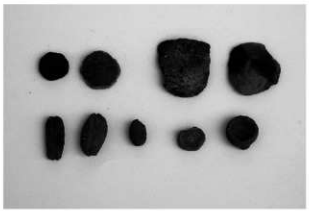
谷地D遺跡遺構外出土土器（21）

図版17

谷地D遺跡遺構外出土土器（22）

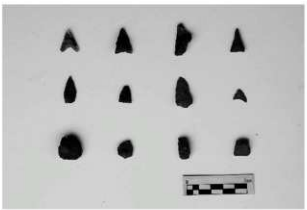
谷地D遺跡出土土製品

谷地D遺跡出土ミニチュア土器・土偶



谷地D遺跡出土土製品（土製円盤、土錘、匙状土製品）

谷地D遺跡出土石製品（石錘）



谷地D遺跡出土石器（石鏃）

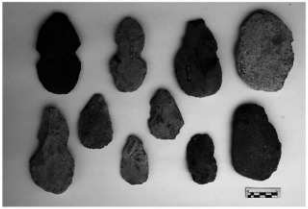
谷地D遺跡出土石器（1）

図版18

谷地D遺跡出土石器（2）

谷地D遺跡出土石器（3）

谷地D遺跡遺構外出土石器（1）（打製石斧）

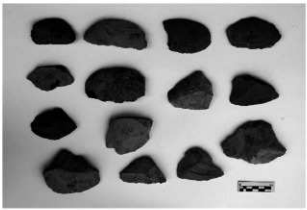


谷地D遺跡遺構外出土石器（2）（打製石斧）

谷地D遺跡遺構外出土石器（3）（打製石斧）

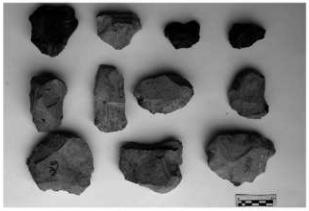
谷地D遺跡遺構外出土石器（4）（打製石斧）

谷地D遺跡遺構外出土石器（5）（打製石斧）



谷地D遺跡遺構外出土石器（6）（スクレイパー）

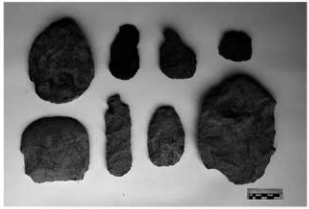
図版19



谷地D遺跡遺構外出土石器（7）（スクレイパー）

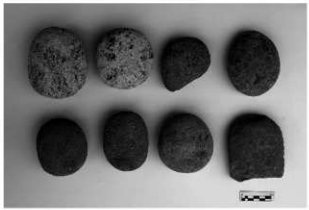
谷地D遺跡遺構外出土石器（8）（スクレイパー）

谷地D遺跡遺構外出土石器（9）（スクレイパー）

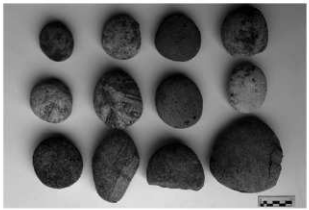


谷地D遺跡遺構外出土石器（10）（スクレイパー）

谷地D遺跡遺構外出土石器（11）（石核・その他）



谷地D遺跡遺構外出土石器（12）（磨石）



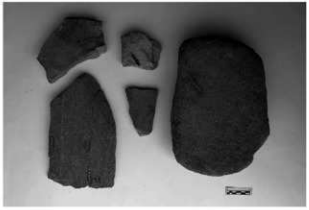
谷地D遺跡遺構外出土石器（13）（磨石）

谷地D遺跡遺構外出土石器（14）（凹石類）

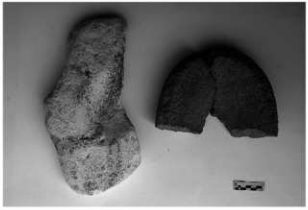
図版20

谷地D遺跡遺構外出土石器（15）（凹石類）

谷地D遺跡遺構外出土石器（16）（磨製石斧）



谷地D遺跡遺構外出土石器（17）（砥石）



谷地D遺跡遺構外出土石器（18）（石皿）

谷地D遺跡遺構外出土石器（19）（多孔石）

谷地D遺跡遺構外出土石器（20）（石棒、特殊石器）

谷地D遺跡遺構外出土石器（21）（特殊石皿）

谷地D遺跡特殊石皿出土状況（Ag－19グリッド）

小野地区水田址遺跡社宮司地点
谷地Ｄ遺跡
―― 市道2481号線道路改良拡幅工事に伴う発掘調査報告書 ――

2004年３月15日

編集・発行　藤岡市教育委員会
〒375-8601
群馬県藤岡市中栗須327番地

印刷所　朝日印刷工業株式会社
〒375-0846
群馬県前橋市元総社町67